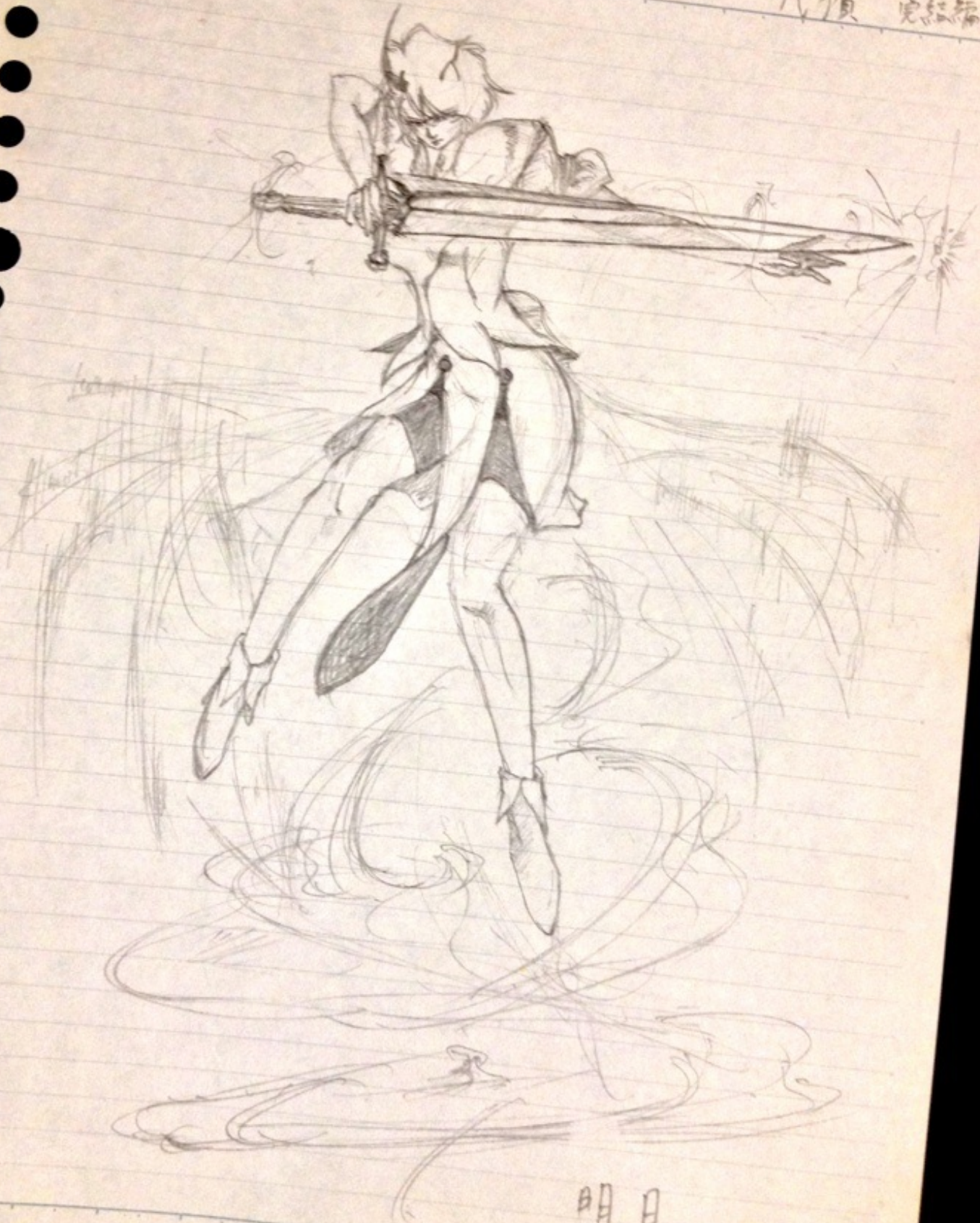


綠·四章·孤城落日篇

No. _____
Date 99.5
代價 完結編



明月

アニス・キーオン公国の西北端に位置する黒塔は元帥・黒の将、ファナティス卿が預かる街の無い塔城である。人はこの塔を宝石箱と呼ぶ。それはこの塔が多く王侯貴族の貴重品を管理・保管するからである。城下に街を持たないこの塔は国境と海に囲まれて、ただひっそりと聳える。城主ファナティスは不在である事が多い。

年に数回帰城するファナティス卿が、その日はレイナ侯を招いていた。同じ元帥として赤の将に就くレイナ侯は王宮守護を任されているが、普段は王都周辺国をあちこち駆け回っている。ファナティス卿はレイナ侯を度々連れて帰ってくる為、ファナティス卿の帰城する時期はこの国が不思議と静まり返ると言われる。



「それが聖剣ディメンジョンか」

アリスが珍しく腰に剣を帯びている。

「ああ、まあ、城を出る時は一応帯刀しておくと親父がうるさいんでな」

「次期大公はお主の姉上なのだろう？」

「さあな。多分フュリーは継がないだろう。アラン卿の事を結構気にしてるからな。親父も剣士である俺を選んでいるようだ」

「アラン・カプラーか。あれも悪くない騎士だが...」

「まあ、騎士としては頼りないな」

「言うな。いや、そう言えるのがこの国なのか。他国へ行けば筆頭騎士になれる程ではあるのだぞ」

「ヴァリエーションでもか？」

「なれるだろうな、貴族であれば」

「貴族であれば、か。馬鹿馬鹿しい話だ。お前の強さは貴族だからじゃないだろう？だからこのアニスでも筆頭四元帥に就いている」

「・・・」

「なあ、カタルシア。何でお前、アニスなんかに来た」

「聞くな」

「ファナティスもまた貴族って事か？」

「ん？」

「お前には貴族社会が似合わないからさ、貴族社交が嫌になったのかと思ってさ」

「ふふ...、そう見えるか？」

「意外だな、違うのか？」

「私はむしろ静かな場所でのんびりしている方が好きなんだがな...。ただこうして、・・・こんな姿を見せるのも、この国に来てからはお主くらいだ」

普段は元帥・黒の将として常に黒い外套を纏い、長い髪も束ねているが、今はその髪を下ろし、白いドレス姿で宝飾を纏った姿をしている。国民がこの姿のファナティス卿を見る事はなく、

ファナティス卿もこの城の外では着飾った装いをする事は無い。レイナ侯が度々ここを訪れる目的の半分はそんなファナティス卿を見るのが面白いからだと言う。もちろん、半分は何かと悪い噂の絶えない辺境の実態調査も兼ねている。

「ジュエリーボックスか…。噂以上だよな、この城は」

「塔城といっても、殆ど機能していない。この城には町も無いからな…。ただの牢獄のようなものさ」

「牢獄にこれだけの装飾品をよく集めたもんだよな。半分くらいはお前の所有物なんだろう？」

「最近は貴族共が口封じに献上してくるのさ。まあ、そんな事をしなくても何も言わんが…」

「しかしまあ、豪華なもんだ。これだけ有れば賊共が盗みに入っても分らねーだろ」

「ああ、時々入ってくるな」

「へえ…。って、そうなのか？」

「気晴らしに殺している。1人として逃がさん」

「そ、そうか。それでも入りたくなるような物量だもんな…」

「そうだな、一つでも持って帰れば良い生活も出来るだろう」

「くれてやれば良いじゃねーか、一つくらい」

「他人のものを奪う事を許しては結果治安が悪くなる。1人それを許せば、私は国民全員にそれをしなければならなくなる。一つとして例外が有ってはならんのだ」

「お前が相手だと分って侵入するには勇気がいるだろうな」

「最近はお主くらいしかこの塔城に近づくものも居らん」

「そりゃあ、賊と間違えられて殺されたらたまらんからな。はは…」

「私はただの番人なのさ。この国の貴重品をただこの城で管理する為だけのな。少なくともこの貴族共はそう思っているのだろう」

「ヴァリアント最強の騎士を相手にか。お前そこまでなめられて悔しくないのか？」

「慣れた」

「慣れたって、仮にも元帥だぞ」

「名ばかりの元帥だ。私は人質なのだよ侯爵、それは知っているのだろう？」

「・・・どういう意味だ？人質って何の為に。そんな話は初めて聞く。ていうか、そんなよそよそしく侯爵って呼ぶなよ。今は二人きりなんだから、…やめてくれ、せめてこう言う時くらいは」

「すまん。しかし、知らないとはどういう事だ。レイナと言えども流石に公子には伝わっていないと言う事か」

「何の話だよ」

「いや、知らぬのなら…」

「聞かせろ、どういう事だ」

「離せ、お主でなければ殺…つく、痛い、離せ！」

「離さん！聞かせろ！」

「分かった！分ったから、……離してよ」

「すまん」

「その前に聞きたい事が有る」

「何だよ。俺は何だって話すぜ、隠し事はしない」

「私がこの国に来た経緯をどう聞いている」

「詳しくは知らん。ただ、より戦いを求めて強くなりたいと願ってこの国に来たと。アニスに来る連中はみんなそんな猛者ばかりだ。お前もそうなのだとばかり思っていた」

「本当にそれだけか」

「それ以外、どんな理由があってこのアニスに来るって言うんだ。他国からして見れば魔族の往来が激しいこの国は地獄のようなものだ。自ら進んで来たいと思える国では無い事は承知している」

「国際法もあるだろう」

「国際法？国際法でアニスに入国する奴がいるのか？...お前が、そうなのか？」

「大公家の公子がこれでは...。アニスは情報統制も厳しい国なのだな」

「何の話だ、一体」

「これは他国の人間ならば誰でも知っているくらい当たり前の事だ。国際法でアニスに入国するのは、国外追放を受けた重罪者、及び反乱分子だ。力無ければ死罪に等しいのが、国際法でのアニス流罪だ」

「アニス流罪？」

「どうしてこの国にはこれだけの猛者が集まり、これだけの猛者が黙って従うと思う。単に強さに憧れ、強きものが弱きものを制するだけではあるまい」

「お前は、ヴァリアントでどんな罪を犯したんだ」

「.....」

「俺にはお前が罪人だとは思えない」

「.....」

「そもそも、それだけの腕があれば、アニスを脱国してヴァリアントに戻る事だって容易じゃないか。外交で何度か他国にも行っているし、...その時に逃げる事も出来るはずだ」

「出来ない。...これを、知らないのか」

「...んな！？」

「.....」

「馬鹿な！何故だ！なぜ元帥位に就くお前が...、それは隷縛印だぞ！」

「...本当に知らないんだな」

「そんな、お前一体...」

「私だけじゃない。政務官のメツエルダー、キャンベル、ヴィエラ殿、ノージスのアメシスタ様を始めとする極東守護、北のナイトレイ卿、ガビエル卿、南のフィナン卿...。皆この隷縛印に縛られている」

「フィナンやキャンベルは知っていた。入国した経緯からも奴らは納得が行く。しかしメツエルダーやアメシスタ様まで...。アメシスタ様はセイレーンの皇族だぞ！そんな馬鹿な...」

「私とて、ファナティス家はヴァリアントの外戚王家だ。この国はお構いなしさ」

「お前、それが原因でこの国に居るのか」

「言っただろう、私は人質だと」

「あ、ああ...」

「アニスは大陸最強の国だ。国際会議でもアニスはその武力を持って威圧する。しかしいつまでもそれに屈してばかりでは、大陸はアニス王国が支配されてしまいかねない。各国が武力を増強するのは、アニスに対抗する為だ」

「それでヴァリアント最強のお前を隷属させる事で黙らせていると？」

「ふん、腐っても隷属などするものか。私を見くびるなよ侯爵...」

「分かっている。仮にお前を隷属させたとしてもヴァリアントを鎮めるには逆効果だろう。エーレン大公は強い。お前の弟やウェヌス家もいる。ヴェヌスのレイはマジーのファラと同じくらい強い。仮にヴァリアントとマジーが手を組んでアニスを攻めてきたら、幾ら何でも太刀打ちは出来ないだろう。充分抑止力はある。なのに一体お前は何の人質だと言うんだ」

「そのエーレン大公リヒターの槍をアニスに向けさせんが為、その弟子であるイエスパー・ファナティスの動きを封じる為、延いてはヴァリアントがアニスに対して悪意無き証明とせんが為。私は自らその証明として入国した。その際陛下より賜った魁丸は私を縛る為の妖刀だ。アニスに敵意を持てば私はこの刀に殺される。私はこの国の傀儡でしかない。元帥位とは表向きの面構えにすぎん。太刀無双が太刀に縛られるとはな...。笑いたければ笑うが良い。私はもう二度と... . . . な、何をする！」

「もういい、もう言うな。悪かった...。何も知らなかった俺を許せ！無知で無能な俺を許してくれ...」

「わけの解らぬ事を...。私は、私は別にお主を責めた積もりは無い。ただ、これは私が自ら臨んだ結果だ。 . . . 放して。...いつまでも抱くな、...無礼者」

「あ、ああ、すまん。らしくねえ...」

「 」

カタルシアの心情はアリスにとって他人事では無かった。当のカタルシアはそれを知る由も無い。アリスにとって信頼を置く人物は姉のフュリーを除いて他に無く、唯一カタルシアがその中でも最も信頼に足る人物であった。そのカタルシアの口から漏れた事実は、己が大切なものを守りたいと言う衝動を駆り立てていた。

いつも男のように毅然と振る舞うカタルシアの弱々しくも儂い素顔を前に、アリスは初めてカタルシアを異性として意識した瞬間だった。アリスにはそれが初恋である事など全く認識出来ていなかった。

「悪かった、すこし感情的になり過ぎた。そう怒るな」

「 . . . 別に、怒ってなど、...そうではないが」

「なら良いが、何か気になる様な事でもあったか」

「いや...、久しぶりに、人肌に触れた。少しホッとした。...それだけだ」

「 」

「なんだ、その顔は」

「不思議な女だな、お前は」

「お主に言われたくはない」

「・・・」

「・・・」

「みんなにも見せてやりたいぜ、お前のそんな姿を」

「・・・。ここを出る時は筆頭騎士、黒騎士だ。ただこの中でだけは、...この城に戻ってきた時だけ普段に戻る。今の私は黒騎士では無い。アニスには騎士として入国した以上、騎士以外の姿を晒すわけにはいかん」

「眉間にしわを寄せていないお前を知っているのは、この国では俺だけか。なんか勿体無いだろ、それは」

「やめろ」

「黒騎士ファナティス卿が貴重品を管理するのは、そこに価値など見出しておらぬから、だと専らの噂だが、当の本人は目を輝かせてそれらに囲まれて喜んでいる。誰も想像出来ないだろうし、それを俺が言っても誰も信用しないだろうなあ、あっはっは...」

「やめろ馬鹿！は、恥ずかしい・・・お主、意外と酷い奴だな」

「・・・」

「お、おかしいか、私が、その、着飾ったら。おかしいだろうか...」

「・・・」

「なぜ黙る！」

「・・・」

「どうした、急に」

「俺が、解除してやろうか、その印」

「出来るものなら、と言いたいが、お主では無理だろう」

「ああ、今の俺では無理だ」

「今の？...何を言っている。この印はそう易々とは...」

「魔族の力を知っているのは魔族だけってな。本来それは魔族を隷従させるために造られた聖導印だが、この程度の聖導印で縛れるのは力の無い魔族だけだ。アニスにとって国際基準なんて高が知れているのさ。その程度なら魔族はいとも簡単に解いてしまえる。だからこそアニスでは魔族に対して人族を縛る程度の印なんざ使わない。もっと強い、人族には何の効果も無い、特殊な聖導印を施す。大聖導法師に受けた印なら兎も角、高が関官クラスの法師が施した印なら解くのも容易い」

「そんな馬鹿な。それは初耳だ。私もこの国に来て短くはないが、少なくともこのキーオンでは隷縛印がよく使われている。私も初めは何度か奴らに戒められた。この太刀もそれに反応する。私は自分の剣すら抜けんと言うのに。風の聖導術だけは使えるが私程度の聖導術では...」

「ヴァリアントで疾風の魔女と言われたお前がアニスに来て剣を抜かなくなった理由が解ったよ。しかしそれでは鈍るだろう...、ヴァリアント最強の剣士を潰すのは惜しい」

「ふん、おかげでこの国に来て聖導術の腕は上がった」

「受勲していないだけで、お前の風は司杯の水準ではあるな」

「お主には負ける...」

「隷縛印は聖導術と魔導術を合成すればいとも簡単に解せる」

「そんな事を頼めるような魔族の知り合いでもいるのか？」

「残念ながら魔族に知り合いはいない。そもそも知り合う前に殺してしまうし、力のある魔族は滅多に人前に姿を見せないからな。だが、前例は有る」

「実験でもしたのか？まるでその目で見えてきたかの様に言う...」

「じゃあ、その目でも見て見るか？」

「...どういう意味だ」

「こう言う意味だ」

「馬鹿な！この国は大公の公子にすら...、お主は一体...」

「隠し事はしない。お前なら信用出来るからな。だから、俺の全てを見せてやる...」

「何をする気だ」

「.....」

「な、...お主、まさか！」

「.....」

「...ああ、...そんな！お主、...お主は、私にそれを見せて、...私に何を望む！何の目的で！」

「恐いか、俺が。そうだろうな。...蔑みたくば蔑めば良い」

「.....、わからない。わ私は、...どうしたら。お主は私にそんな姿を晒して、私にどうしろと言うのか.....。私に何を.....」

「.....」

「...うぐわあ！...あああ、あああああ！ううう...」

「こんなものに縛られてなるものか。こんな下らねえものに...」

「ううう...、つく、っはあ、はあ...」

「流石に疲れるな、今は一時的にほんの少しだけこの力を解放出来る。あまり多用は出来ん。流石に俺も堕ちたくは無いからな。こいつが無かったら俺もどうなるか...、予想に易い話だが、そうは成りたくないんでね」

「それは...、聖導器？なのか。そうか。そう言えば、いつも、付けて...」

「時期に楽になる。魁丸の力は消していない。消せば王にバレるんでな。だがその刀に縛られる事はもうない。時が来たらその太刀を砕け」

「...私に、何を望んでいる」

「.....」

「何の目的でこんな事！何故私の、...なぜ私を選んだ！」

「お前だけじゃねーよ。それに、別に俺はお前に何も望んじゃ、...いなかったさ」

「...どういう意味だ」

「フィナンの印も既に解いてる。時が来たならレーザー口のバスター・ヴォルテージをアイザックに継がせるつもりだ。お前には以前荷物を預かってもらっていただろう」

「お主、今まで、私を利用する為に...」

「.....」

「それでこれまでも何度か私に密偵の依頼をしてきたのか！...私は、知らず知らずの内にお前の罪に手を貸していたと言うのか！...騙したのか！！」

「.....」

「応えろ！何も隠し事はしないと、...あれも嘘か！」

「嘘じゃねえよ。騙していたわけじゃない。初めから騙すつもりじゃなかった。利用するつもりもない」

「では何故このような真似をする！」

「ずっと縛られたままでいたかったのか？それならもう一度施してやるまでだ。だが次はもう外せんで...」

「そうではない！...お主は、お主は一体何者なのだ」

「王国第三の大公、レイナの公子だ。それ以外の何者でも無い。俺には治める城も、従える部下も、何も無い。王より賜ったのは元帥位と緊急時に王宮を守護する任務、後は国内保安の全権代理を任務とする事だけだ。だから常に王都を中心に各国、各領を駆け回っている。年に一度は全ての領土を回り、状況を政務官に報告する義務は仰せつかっている」

「王は、それを知っているのか。お前の、その姿を...」

「さあな。王自身も人魔だ。知っているだろうし、俺やフェリーが人魔だからと言って、それをどうこうとはせんだろう」

「なんだと！？...王が人魔だと、...馬鹿な！」

「お前は入国以来王にお目通りした事が無いだろう。しかも直接その目で見てはいない筈だ。知る由も無い」

「それは、皆、知っている事なのか？この国の民は、皆...」

「知らんさ。だが俺を含めて王侯貴族の一部は知っているだろう。俺も王に直接お会いした事は無い。俺が知っているのは、...俺が同類だからだ」

「私にそれを打ち明けて、お主は私にどうしろと言うのか。本来ならば、国際法に基づいて、今此処で、...私はお主を殺さねば成らぬのだぞ！」

「.....」

「私に殺されるのを覚悟してその姿を晒したわけではあるまい。...私に何を望むのか」

「.....」

「今の私は、剣を抜けるのだぞ！」

「お前如きに殺されるほどやわじゃねえよ...」

「くっ...！.....お主は何か企んでおるのだろう。それに私を加担させる為に、このような事を...」

「違う」

「では何故だ！」

「確かに、時が来た時、俺は事を起こす積もりだ。しかしそれにお前を巻き込む気は毛頭なかった！まさかお前もフィンランやキャンベルと同じように印を施されているとは思わなかったからな」

「まさか、キャンベル殿も…」

「いや、キャンベルには何もしていない。あいつは融通が聞かないからな」

「……」

「このキーオンやフリーデル、マティスの愚行はいずれ肅正される。その肅正にはお前も加わってもらおう。でなければお前もキーオンの黒当主として放任していた事を問わねば成らんからな」

「先ほどから「時が来たら」と言うが、それはその肅正の事では無いのか」

「肅正は時が来れば嫌が応にも下される。だがそんな事などは俺にとっては小さい話だ。そこにお前は巻き込みたくは無かった。時が来ればお前は国に帰れば良い。これはアニス王国の問題だ。ヴァリアントのお前には関係が無い。隷縛印も無くなればお前はもうこの国に縛られる事も無いだろう…、時が来るまでは、お前と一緒にいたかったけどな」

「これからどうするつもりだ」

「それを知ってどうする」

「……」

「……。ヴォルテージは暫く預かっておいてくれ。ここに置いておくだけで良い。俺もここに来るのはもうこれで最後にする」

「……」

「そろそろ…」

「待つて…」

「お前は関係ない」

「解っている。そうではなくて、…」

「何だ」

「その…、麗峰へは、…また、行っても良いか」

「……」

「他に行く所が無いんだ！…ここに閉じこめられているのは、…苦痛だ。この国では、お主しか宛が無いのだ。…その、私は、…」

「いつでも来い。俺がいない時は親父が相手をしてくれるだろう。時々南塔にでも行くと良い。フューリーやアイザックがいる。どうせ奴らも暇だろうしな」

「そ、そうか…」

「本当にそれだけか？」

「え…、いや、あの」

「まだ時が来るには間がある。お前が望むのならまた来るさ」

「そうか…」

「……。なんだ、それでもないのか？何が言いたいんだ」

「いや...」

「いつも凜としているお前が珍しいな、そんな歯切れの悪い...」

「も...、もう少し、その...、居てくれないか！...、さ、寂しい...のだ。・・・すまん」

「ああ、...ふふ、...はっはっはっは・・・」

「あ、笑うな！酷いぞ、お主...」

「あはは、いや、...すまん。お前はここにいるとただの女のような」

「私だって、ただの女に戻りたい時もある！...今くらい、いいだろう」

「お前がそんな赤面するなんてな。また面白いものが見れた」

「酷い...」

人魔は即抹殺される。人と魔族が交わったその血には永代薄まる事の無い魔障が宿る。人として生を受け、その魔障が覚醒しないまま生涯を閉じるのが専らだが、稀に魔族の血を濃く継いだ者は魔障に目覚める。魔障の覚醒は力ない者の自我を失わせ、その暴走は街一つを消し飛ばすほどの破壊を齎す。故に人でありながら魔障に目覚めたものは発覚次第、即抹殺する事が義務づけられている。



アニス王家には過去に魔族と結ばれた王がいた。王家の血統を持つアニスの貴族は例外なくその血に魔障を孕み、アニス王家の血族はその血の拡散を防ぐ為、他国の者との婚姻を禁じられている。セイレーン王家がアニスの姫を娶った過去があり、セイレーン王家もまた国を跨いで婚姻を禁じられる事となった。人魔に覚醒せずとも、その力は絶大を謳われ、アニス王家の母を持つセイレーン王女は過去に国一つをその力で滅ぼしたという伝説が残っており、アニスに並ぶ二大軍事国家としてその名を轟かせるに至る。

魔障に目覚めたものを判別する最も簡単な方法がある。それは術である。魔族は魔導術、聖導術を使うとされ、人族はそれに対抗した魔導法、聖導法を編み出し、術は法によって戒める事が出来た。人はこの四種の術法のうち何れか一つを修得する事が出来るが、魔族はそれを複数使いこなす事が出来る。そのため、魔導、聖導の両術をこなす者は魔障に覚醒している証とされた。

また、人魔によってはその容姿も変わってしまい、魔族同様に漆黒の髪や、漆黒の瞳を持つ者もいるとされる。黒い髪、白い髪の人には存在しない。また、魔族はそれ以外の特徴として肌の色が白く、個体によっては腕や足の本数など様々に人族とは異なった部分があり、容姿が変わる人魔は直ぐに判別が出来る。魔族の血を濃く受け継ぐアニスの貴族は外の地域に比べて髪や瞳の色が暗い事が特徴とされている。

レイナ候アリスは魔障に目覚めており、抑制して人型を保っているが、一度その力を解放すると、眼球や髪が黒くなり、魔族特有の白く大きな角が現れる。魔障には完全に寄り憑かれておらず、自我を保ち、瘴気を放つ程には至っていない。その力は聖導器によって抑制され、普段はその聖導器を身に付けている事で魔障を完全に封じ込めている。それでもアリスはアニス王国でも筆頭と言われるほどの実力者で、赤き武神としてその名を大陸中に知らしめている。

四色の元帥はそれぞれ赤、青、白、黒と別れており、赤は筆頭・王宮守護、青は内政・王都守備、白は外交・沿岸守備、黒は騎士団総帥・治安維持にそれぞれ務めている。しかし事実上の筆頭

は青の将・フィストであった。また、フィストは王妃のみに仕える騎士であり、王都守護や内政には関わっておらず、王にも忠義を示していない。現国王になって四元帥の役割は薄れ、内政は政務官を筆頭に各公王が取り仕切っている。

アニス王国で宗主国ヴァリアント、姉妹国マージの国境を預かるレイナ大公国の南塔。塔と言っても高さの無い、国内の塔城の中でも最も低い砦だが、最も地下深く築かれた塔城でもある。地下深く、最下層にある司書室で、この南を預かる騎士2人が話す。



「ねえ、アイザック。あんたここにいて肩身狭くない？ラザー口も継げなかったしさ」

「ん？自分の身の上を心配しての話か？」

「ん・・・まあ、それも有るけどさ。だってほら、貴方はボルテージの後継者でしょ？ボルテージを継承する為に振るってきた斧なのにさ、...なんか勿体無いなあって思って」

「ラザー口はソニックが継いだ。ソニックは槍を使うが、子供にでも継がせるだろう」

「あの子の嫁さんって、レジスんとこの末っ子でしょ？レジスも槍の家じゃない。お互い槍使いで、子供が斧使いとして器が有るかしら...」

「魔剣士の家に生まれた竜騎士のお前が言うか」

「う...、まあそれもそうよね」

「それに、ティファニーは槍使いじゃない。彼女はただの平民だ」

司書室で文献を読む騎士アイザックの傍ら、テーブルに足を乗せて座る女騎士フュリーが退屈そうに話す。

「あんたさあ、よくフィナンを名乗りながらアニスに戻ってこれたわねえ。そのままフェネルに仕えれば良かったのに」

「確かにフェネル王妃様の親類縁者の伝手を借りれば、フェネル王宮に入る事は難しくなかった。むしろ、王妃様には騎士団に誘われもしたさ」

「んじゃ、なんで？」

アイザックは本を読むのを止め、静かにフュリーを見る。

「フェネル現国王は軍縮政策を唱えている。今のフェネルは通商国。騎士はその護衛でしかない。たしかに経済豊かで安穩とした暮らしは約束された。しかし、俺は端くれ貴族でもアニスに生まれ育った戦士だ。戦いから身を引いて安穩とした生活に耐えられる自信は無かった。アニス現国王は例えどんな人物であっても、実力で地位を下さる方だ。ラザー口の地位と名誉を剥奪されたとしても、俺はこの戦場である国でしか安らげない」

「未練は無かったの？」

「何にだ」

「その地位と名誉とやらの、よ」

「お前は捨てるのが怖いかな？」

「ぜーんぜん。寧ろ捨てたいくらいだわ」

「ふふ...」

「なによ」

「お前らしいと思ってな」

「アニスの貴族で地位と名誉を好んでいる奴にろくな奴は居ないわ。みんな貴族の血など忌まわしいと思ってるわよ」

「アシュリーもか？」

「……。あっはっはっは、そう言えば居たわねえ。やたらと地位と名誉を重んじる家が。ファウラーは例外だわ。アシュリーだけじゃなくて、あの家ってみんなそう」

「そうなのか？」

「そうよ。代々、あそこは義を重んじる。信頼出来るけど、鬱陶しいほど頑固で堅苦しいわ。あとはマティス宗家。ファも真面目な女よねえ」

フリーの言葉にアイザックが少し怪訝そうな顔をした。

「マティス宗家には最近良い噂を聞かないな...」

「あそこはあんたのレーザー口家とメオラ家でいろいろ繋がってるからね。メオラが魔族を捕獲してる話でしょ？マティスが加担している」

「あれは本当の話なのか？」

「そうよ。そもそもフリーデルやキーオン公国にはそんなに魔族は居ないもの。マティスが流しているって噂よ。...レーザー口もね」

「しかし、キーオンにはカタルシア様が居られるではないか...。それを黙って見ている方とは思えないが...」

「カタルシアは居ないわ。黒塔はカタルシアの倉庫みたいなものだもの。あんな辺境に閉じこめられて黙ってじっとしている女じゃないよ。今ごろはまた城にでもいるんじゃない？」

「城って...、麗峰城か？」

「そうよ」

「いつも居るのか？」

「何よ、貴方カタルシアが嫌いなの？」

「いや、そう言うわけじゃない。が、...確かに言われて見れば、上洛すると良く会うな。いや、気付かなかった」

「アリスと仲が良いのよカタルシアは。だからアリスの留守中に国内の警備を自主的にね。まあ、あんな辺境よりはこっちの方が落ち着くでしょう？あれだけの腕なら」

「カタルシア様はメオラの行動を知っていて黙っているのか？」

「そうよ。メオラやレーザー口は仮にも端くれとは言えアニスの貴族だもん。宗主国から招かれたとは言っても他所者には変わりはないわ。それに、地位の低さが劣等感になって権力を振る舞いたくなる気持ち、レーザー口家の貴方なら解らなくはないでしょう？カタルシアもヴァリアントでは名門の貴族だし、その辺は分っている。事が重大になるようならば剣を抜くでしょうね」

「メオラは魔族を捕獲して何をする気なんだ」

「流しているのよ」

「どこに」

「さあ。フェネル経由で荷物になって流れているか、それとも、そのままフェネルを通さずに...どこかに流しているか。少なくとも、メオラには外交通商港があるでしょう？そこからじゃないかって」

「誰か調査しているのか？」

「カタルシアの密偵がね。あと、マティス宗家にはファも潜らせているわ」

「.....。ソニックにも知らせるべきだろうか」

「だめよ」

「待て、ソニックはそんな話に加担するような奴じゃ...」

「違うの。逆よ」

「逆？」

「今のあの子はただの犬。ラザー口家の奴隷も同然よ。公爵には絶対服従。.....だれのせい？」

「.....」

「それでのうのうとアニスに戻ってきて、ラザー口を捨て、フェネルのフィナン家としてここにいる兄貴をあの子はどう思っているかしら」

「.....」

「逆に余計な反感を買うんじゃないかって?...悪い事は言わないわ。ソニックはもう、貴方を兄だとは思っていないでしょうね」

「一つ、教えてくれないか」

「私の知っている事ならね」

「なぜ、なぜソニックが筆頭に名を連ねているのか...。白紋は国境警備、外交護衛。なぜソニックがその筆頭選ばれているのか、俺はそれだけが気になっているんだ。やはり、メオラの話に関係しているのか」

「...だとしたら？」

「本来なら、自由騎士章を持つアシュリーが筆頭四元帥に就くべきだろう。なぜ、なぜ実力にそぐわないソニックが...」

「王が決めた事よ。不満を言っても埒が明かないわ。それに、貴方にはどうする権利も無いでしょう」

「しかし...」

「ヴォルテージを捨てた貴方には関係の無い話だと思わない?...貴方はもうラザー口の騎士じゃない。フェネルのフィナン。他所者が口を挟むべきじゃないわ。カタルシアの様にね...」

「俺は...、私は兄や父が許せなかった。領民を守る為の騎士であるはずラザー口家をただの貴族とした。領民の事よりも自らの利益を追求する。俺は許せなかった！」

「.....」

「俺はヴォルテージや伯爵号が欲しくて騎士になったんじゃない！俺は、俺はただ、レイナ大公やチェゼレーア公爵のような、先ず第一に領民の幸せを願う正しい騎士になりたかった、...だけだ.....」

「兄殺しの狂騎士が言っても説得力無いわねえ…。王妃様が貴方を雇わなかったら、貴方はアニスに戻ってこれなかったのよ？おかげで王妃様の方が「気の迷いでも起こされたのではないかなんて言われる始末。そこまでして頂いた王妃様の顔に、まだ貴方は泥を塗りたいの？」

「そんな事は判っているさ！しかし、だからと言ってそれを黙って見ていると言うのか？その間ラザー口の領民はどうなる！」

「ラザー口だけが良ければ満足？」

「…そうじゃない！しかし・・・」

「まあ、見てなさいって。こう言うものは何事もタイミングが大事なのよ。今はまだ動く時じゃないって事よ」

「動くのは、いつだ…」

「さあね。もうすぐじゃない？皇子と皇女がお戻りになられたら…って所かしら。その時はあたしも一緒に行くよ、アイザック。時が来たら、もし本当にその時が来たら、あたしも侯爵位とレイナを捨てる。1人の騎士として、…ね」

「フユリー…、お前」

「それまでは大人しくしてなさい。エレナも心配してるわ。塔城暮らしとはいっても、フェネルに比べて魔族の往来が著しいアニスでは心休まる日々では無いでしょうに…。旦那の貴方がそんなんじゃ、生きた心地がしないでしょうに。あの子の事、もう少し労ってあげなさいよ」

アニス王国の現状を調査する目的で組織されたヴァリアント王国の師団は、クアドラと呼ばれる4将軍の下に編成された。王都守護、エーレン大使の任に就く2将軍を除く南北の将軍、王家の外戚に当たるファナティスとヴィナスに任命された。ファナティスとヴィナスは予めから仲が悪く、共に行軍する事など出来ないとして当初は断っていたが、王の計らいでファナティスは王都アニシアへ、ヴィナスはフルクレスト大陸に在るアニス王国の領地、ストームランドへ赴く事となった。

マジー国の師団も同様に南東から王都を目指しており、ウィリンド、サイレン王国の師団はフェネルに駐在するアニスの赤騎士と共に北からの進軍となった。南西から進軍するヴァリアントのファナティス師団は、アニスの黒騎士と共に師団を編成され、ヴィナス師団は単独での調査になった。聖導師らの報告によるとアニスの東、蠢く海に何やら不穏な影を察知しており、東から進軍は海を隔てたストームランドの調査を先に済ませた方が良いとの事だった。

蠢く海とは、アニス王国とフルクレリア大陸の間にある海で、船での航行が困難なほど荒れ狂う事でも知られており、海でありながら魔族の往来も多く、質の悪い怪魚も多いと言われている。ストームランドへ続く南側は静穏な地域であるが、それより北は荒れている為、フルクレストへの海運はストームランドが拠点となっており、アニスは其処を抑えた事で北フルクレスト諸国との交易権をほぼ独占している。



ヴァリアント・ファナティスの師団は、北のイエスパール・ファナティス将軍を師団長に十数名で構成され、そこにアニスの黒騎士、カタルシア・ファナティス卿も加わっている。何の因果か、王の計らいか、姉弟揃っての進軍であるが、互いに仕える国は違い、そこに騎士として私情を挟む事は無かった。

師団はヴァリアント王国からアニス王国領マティスへ入り、西の塔城へと辿り着いた。そこで暫く休息した後執るべきその後の進路に迷っていた。

西塔は西方聖導院を含めて広く大きく、塔というよりも城砦に近い構造で、マティス領を統べる時雨城よりも堅牢な造りである。進軍の拠点とするには少々広く大き過ぎる塔城だが、ヴァリアント王国に近く建造された城砦は監視目的も兼ねていた。

「師団長、これから先はどう成されるおつもりか」

「姉う、...カタルシア卿か。そうだな、貴方は土地勘がお有りだろう。意見を聞きたいがどうか」

「北が気になる。先にマティスの時雨城の様子を見たい。色々気になる所もある。ただ、このまま西へ進み王都へ向かってもいいが、何かいやな予感がする。何よりも静穏過ぎるのが気になる」

「・・・、流石はカタルシア卿、冷静なその判断力、恐れ入るよ」

「・・・」

「確かに静穏過ぎるのが気になっていた。貴方の報告ではアニスには魔族がこれまで以上に跋扈している筈ではなかったのか。これはどういう事か説明して頂きたい」

「疑われても仕方がないが、断じて我々が其方らを謀っているわけではない事は言って置く。あれだけいた魔族が死骸も無く消えている。まるで消滅したかのように」

「私も何度かこの国には来た事がある。貴方にお会いした事はなかったが...。その時もこれほど静穏ではなかった。魔族にとって紅族は格好の獲物だったからね。自由騎士ではなかった当時の私には恐ろしい国だった。ははは、何とんでもアニスの魔族はヴァリアントのそれとは比べ物にならないほど強いからね。・・・正直、姉上がこんな国で無事で居るのか、心配だった」

「今は任務中だ、師団長。貴方は師団長であり、私は貴方の部下だ。無駄な事は良い」

「ああ、いや、失敬...。そうだった。しかし、本来は王都の現状と、...アニス王の死を確かめるのが目的。やはり王都を目指そうかと思っている」

「そうか。部下たちには武器の手入れと警戒を怠りなくさせておいた。いつでも準備は出来ている」

「・・・・・・・・。至らない師団長だな私は。自分の事ばかりで部下にまで目が届かなかった。私も含め30年前程前までは皆、貴方の部下だった者達ばかりだ。礼を言う」

「まだ24年しか経ってないが、まあ良い。何か、気になる事でもお有りなのか」

「この師団の本来の目的は王都だ。時雨城は北から入られるウィリンドやサイレン、赤騎士の師団が向かうだろう。南から入る我々が向かう場所ではないと思う」

「・・・・・・・・」

「姉上は先ほど時雨城か王都かと言ったよね、姉う...」

「師団長・・・」

「...すまない。貴方は何故時雨城への選択肢を持ったのか、お聞きしても宜しいか」

「・・・・・・・・。無礼講で申し訳ないが一つ言って置くぞイエスパー。口の利き方が随分いい加減だ。お前は今私の上官なのだぞ。上下の区別も出来ぬ年頃ではあるまい」

「あ...、す、すまない。気をつける。ただ、...」

「言うな！戦時においての甘えは禁物。たとえ親兄弟であろうとも、今は関係ない。それでは命が幾らあっても足りんぞ！...馬鹿者が」

「至らず申し訳ない。気をつけよう。それで、卿の意見を聞きたい」

「国の事情を他国に漏らす訳にはいかぬが、ただ時雨のマティス宗家には良からぬ噂が絶えなかった。その辺りの調査も兼ねられたらしておきたい所存であった。王との密接な関わりなどあれば、と。現状に出来る事は恐らく...」

「この城にもいたのだろう、そのマティス宗家の騎士が」

「ああ、今はまだフェネルで治療中だそうだが、ルシファリア様と共に帰還されているはず。西方聖導院のミストラル、リンス様の下に居られるランス子爵がこの塔城の管理をされていた。ファに関しては疑う余地はありません。念のためファの私室も伺わせてもらいましたが...、口外出来る事は特に。詮索は無用かと」

「口外出来ぬ何があったと言うのか、それも国の事情か。後で確かめさせてもらおうか」

「い、いえ、...彼女は、余り政には関心のない様子で、・・・大したものは殆ど無く...。その、どうか遠慮なさいませ」

「何を隠す。それはヴァリアントに見せられぬ、アニスの秘め事か」

「ち、違います！断じてそのようなものではありません。た、ただ...」

「ただ何だ...」

「いえ、その...彼女も年頃の娘でありましょう。・・・その、ただの恋文ばかりです。彼女はランス子爵を、愛しておりましたゆえ...。そればかりが伝わる部屋になっておりましたので、他の者にも出入りを禁じております。本人とてあのようなものは見られたくはないでしょう」

「くくくっ...、はっはっはっは、なるほどな」

「笑う事はないだろう！彼女の事を考えたら、見られたくはないだろうと思ったまでだ」

「はっはは、いや、相変わらずだ。貴方は昔からそう言う事には疎かった。貴方が口を濁すのは決まってそう言う時ばかりだったな。まあ少々気にもなるが、...確かに今そんな物に構っている余裕はない」

「時雨の調査は確かに北を進むウィリンド、サイレン、レイナ候にも任せられるかも知れませんが・・・、恐らくそこまでは来られますまい」

「・・・どういう意味だ」

「今回の進軍にレイナ候は出陣されないか、されたとして、恐らく黒塔に留まるでしょう」

「なんだと！？...やはりアニスは何か企んでいるのか！この遠征は罠だというわけか！」

「まさか。そのような事はない。ただ言わせてもらえば、其方らヴァリアントもまたアニスを支配しようと企んでの事ではないのか」

「なに？」

「アニス王が亡くなられたのは事実。神誓官であるティスの言葉に偽りなどあろう筈もない。それを疑うのは、ヴァリアントが確たる証拠を持ってアニスを抑え、アニスを併合したい狙いがあるのでは無いか」

「馬鹿な！そんな話は聞いてない」

「ではなぜヴィナスがストームランドへ派遣されたのか、貴方はお考えにもなられませぬか。ストームランドを抑えれば、守りの薄い極東アニスを容易く攻められる。言うなれば極東アニスはレジスとチェゼレーアの盾。王都アニジアを護る北のファウラー、西のマティス、南のレイナ、南東のチェゼレーア、東のレジス。この内最も護りの硬いレジスを落とすのは困難で、中央塔のあるチェゼレーアもまた然り。極東アニスを崩す事が出来れば、レジスの魔導院、チェゼレーアの中央塔を抑え、一気に王都への進軍の道が開けるであろう。チェゼレーアもレジスも強い騎士の家ではないからな」

「私なら北から攻める。アニスの純正城は北寄りに位置する。狙うならファウラーを突破した方が...」

「北のファウラーをなめているのか？大した師団長だな。それでは師団が幾ら合っても足りませぬぞ。確かに王都の北に位置する王城を攻めるなら、北のファウラーを突破するのが距離的にも一番早いだろう。だが、高い断崖に守られ、志気の高いファウラーを相手にするなど誰も考え

まい。今となってはもぬけの殻同然だが、直接北へ入る事が出来ぬから西と南に師団を分けてお
るのだろう。マジーが東に進路をとらぬ理由が解らんが...」

「では何故だ！赤の武神と言われるレイナ候は何故進軍しない！自国の地理を理解し、何より
も解って居られる筈ではないのか！何故だ！」

「私も此処より進軍する気は毛頭無かった。だが師団として進軍を望むのなら、...止む無しか。
従わねば成らぬな。危険と解っていて足を踏み入れる覚悟の無いお前たちは足手まといだが、ア
ニスの騎士となった私もまた、王にとっては用済みという事なのだろう...」

「何があると言うんだ、この先に」

「さあ、何があるのか、何が居るのか。少なくとも現状を把握する方が先だろう？」

「知らないものに怯えるのか、アニスの騎士は」

「はあ...。貴方は本当に軽率な将軍だな」

「何だと！」

「ティス・カーンが死亡を伝えたのはアニス王だけか？他に誰がいた？それは誰だと思っ
ている！」

「アニスの青騎士と白騎士は、彼らは王と闘って共倒れた...」

「そんな報告を誰から受けた」

「いや、てっきり私はそうだと...」

「てっきりで自分に都合の良い解釈を作り上げるとは...。情けないにも程があるぞイエ
スパー！この20年間、お前は私の師団で何をしてきたのか！」

「くっ...」

「白紋筆頭のソニックは大した騎士では無い。特にこんな場所ではな。しかし青のフィスト様は
精霊剣士ぞ。誰が殺す？大陸最高の剣聖を、マジーのユイ卿よりも強い剣聖を、誰が殺した！？
アニスの騎士ならばそれを聞いて迂闊に飛び込めるものなど居らぬわ。彼の強さを知っておれ
ばな...」

「では、どうしろと言うのか！」

「ヴァリアント王の命令では王都アニジアの調査、並びに王城ピューリティの実態調査と28代ア
ニス王の亡骸を回収せよとの事だ。死に行けと言われたも同然の命令を我等は下されたのだ」

「そんな、考え過ぎだ！王がそのような...」

「王妃様とヴォイス様の行方が知れぬ。王妃様をお守りする筈のフィスト様が亡くなられ、光塔
主も不在。魔族を戒める結界は消えてしまっているのだぞ！魔族がアニスより外へ出て行くだ
ろう。そんな時に国を手薄にするなど、気が狂っているとしか思えぬ。ティスに何があったのか
。調査すべきは王都ではなく、チェゼレーアの光塔のはずだ！」

「すまない、姉上のおっしゃっている意味が解らない。この国はどういう国なんだ」

「...」

「ティス・カーンはただの聖導師じゃないのか？光塔には代りの聖導師を置けばいいじゃな
いか！それと王妃の不在が何の関係があるのか。魔族を戒める結界とは何だ、...姉上！」

「...」

「どこへ行かれる！」

「ついて来い、イエスパー」

アニス王国には王都の他に12の領地と10の塔城がある。塔城を持たないのは北東のディジェニア領とフルクレストにあるストームランド領のみ。王都の中央塔を含めて11の塔城はチェゼレーア大公国にある光塔を司令塔に繋がっており、随時連絡をとり合う事が出来た。これは聖導法による疑似的な伝心であるが、各塔城にはそれが備えられており、聖導師でなくても塔の主であればその利用を許されていた。

カタルシアは王国北西端にあるキーオン公国の黒塔主でもある。

「ここは？」

「ここから塔に入る。ここには官位騎士のみしか入る事は許されていない。まして他国の騎士など、本来入れる場所ではない」

「良いのか、そこに私を入れて」

「誰に罰せられるわけでもあるまい。それに、これから再興するまでの間、こうしてアニスの城砦を使われていたら、他国の将軍たちはこぞって入りたがるであろう。予めこの国の騎士が入り機密を保持出来れば其れで何よりだ。共に来た将軍がお前で良かった」

塔といっても、地上に立つ城砦とは裏腹に、カタルシアがイエスパーを連れて行くのは地下だった。塔城の多くは中枢を地下に持ち、地上の建物はカムフラージュとして建造されている。

「地下に降りる塔とは…。まさかこんな構造とは思わなかった」

「こんな構造だろうと思われるものを建造する事に何の意味が有る…」

「う…、確かにそうけど」

地下には広い部屋と呼べるかどうか解らないような空間が広がっているだけに過ぎなかった。

「黒紋筆頭、カタルシア・ファナティス、これに参じた。開かれたし！」

カタルシアの言葉に反応して10のパネルが現れる。それは全ての塔城だったが、ただ黒いだけのパネルに過ぎないもので、イエスパーには其れが何なのか解らなかった。

「まだ誰も開いていないか…」

「こ、これは次元聖導法か？黒法聖導法で作られているのか？こんな事が…」

「黙っている」

「・・・」

「黒紋筆頭、カタルシア・ファナティスである。現在西塔に参じ、勝手ながら開かせてもらっている。ヴァリアントの師団と共に居る。城砦は荒らさぬよう命じてある。現状は特に荒れた形跡などはなかった。マティスの要人が何名か肅正されているが、私の知り預かる所ではないので放置している。民たちは見当たらない。また、…魔族も今のところこの付近には現れていない。師団はこれより王都へ向かう積もりらしい。私は今ヴァリアント師団の指揮下にある。不本意ではあるがそれに従う。時雨に立ち寄る積もりだったが、師団には従わねば成らん…。現状は以上である」

カタルシアの言葉に反応して目の前のパネルが一枚白く変わった。直後、全てのパネルが閉じ、そこはまた何もない空間へと戻る。

「全ての塔がこれに繋がっている。平常時ならば交信も出来る。ただ、今ので解った事がある。本来なら光塔によってコントロールされて全ての塔が映し出されて交信が行える筈だが、それが機能せず記録を残す事しか出来ない状態だ。光塔が完全に機能していない。ティスが自分で切断しない限りこうはならない筈だ」

「今のは、普通の使い方ではないのか？」

「今はただ伝言を残しただけに過ぎない。西塔から繋がるのは光塔と中央塔を除く全ての塔だが、随時繋ぎ続ける事は出来ていない。その制御は光塔にあり、光塔主ティス・カーンのみはその制御を行える」

「たった一人でそれを制御出来るのか？こんな大規模な聖導法を...」

「非常時であればこそ機能する伝言システムだが、果たしてこれを照会してくれるものが居るかどうか...、アリスが黒塔に入って聞いてくれれば良いが...」

「レイナ候はこれを使う為に黒塔に留まるというわけか」

「それだけじゃない。アニスの塔城にはそれぞれの役割がある。伝言を残せるのはこの西を含めて7つの塔のみ。西の外れにある黒塔に伝言を残す能はない。照会は出来るがな。黒塔には殆ど何の機能もない代りにアニス国内の貴重品を管理する能力がある。どこに何が封じられ、どこに何が置かれているのか。正直、塔主だった私でも意味が解らないモノも多かったが、レイナ候ならば概ねそれを把握出来ている筈だ。やりたい事もあるだろう。アリスがいつ来ても良いように整えておいたが...」

「それじゃあまるでレイナ候がフェネルへ駐在しているのが予め決まっていた事のように聞こえるが...」

「はっはっは、まあある意味その通りかも知れないな。私はヴァリアントの騎士。黒騎士としてヴァリアントへ向かう。アリスは公安の全権代理人、赤騎士として国民を守る義務がある。それ以上にもやるべき事があった。結果としてフェネルの方へ向かうのであれば、それに近い黒塔にも立ち寄るだろう。フェネルには予め難民受け入れの要請を済ませておいていた。アリスがもし私の計らいに気付いてくれれば、フェネルへ逃げ込むだろう事は織り込み済みだったさ」

「アニス王が崩御される事も、織り込み済みだったのか？」

「・・・そう言う事だ」

後ろで話しかけるイエスパーに向かって振り向くと、剣を抜きその切っ先をあごの下に突き付けた。

「我々はクーデターを起こしたわけではない。報告の通り、ただアニスの人魔が自滅しただけだ。いや、それを知っていて黙って放っておいたというのが正解だ。どの道人魔に覚醒した者は即死罪。国際的に間違った事はしていない」

「・・・元首を失えば国はもはや無いも同然じゃないか。それを見殺しにすると言う事は、国を滅ぼすのと...」

「リンス様をご帰還成されたであろう。フェルナンドを失った事は痛手ではあったが...。アニス

はリンス様とルシファリア様のお二人が再建なされる」

「リンス殿を戴冠させて、それでアニスの者達は何をしようと言うのか！現状はそれが出来ないじゃないか」

カタルシアが静かに剣を鞘に納め、溜め息を吐いた。

「何か別の事が起きている。狙いはリンス様への王権委譲ではないのだろうか。残念ながら私の知っている事はそこまでだ」

「では、誰がフィスト卿を討ったというのだ…」

「討たれていないのかも知れないが」

「どういう事だ」

「彼は精霊だ。生きてはいないだけで、死んでもいないのではないかと」

「言っている事の意味が解らない」

「精霊族は何も人の姿形をしているわけではない。人型の器でしかないのだよ、あれは」

「そ、そうなのか」

「だからヴォイス様が消息を絶たれても不思議ではない。が、では王妃様は何処に御座すのか…。正直私にも解らない事だらけだ。現に今見た通り、塔城の伝心機能を他の塔で使った形跡が無かった。と言う事は、未だ誰も塔を動かしていない事になる。アニスの官位騎士は塔には逃げ込んでいない事は分ったが、それを我等以外の者に使われた形跡もなかった。つまり、この国の管理統制機能は使われていない。では、今王都に居るのは誰だと言うんだ・・・」

話ながらだんだんと独り言のように呟き始めるカタルシアの言葉にイエスパーはただただ驚くばかりだった。アニスの騎士の強さが他国とは比べ物にならない事は周知の通りである。それは即ち、聖導法から魔導術に至る全ての水準が他国とは比べ物にならないものであり、その活用法もまた今まで見た事も、聞いた事もないものばかりだからである。それを然も当たり前のように使いこなし、まるで全てを把握しているかのように喋り続けるカタルシアに、イエスパーはカルチャーショックを受けていた。イエスパーとカタルシアの知っている事の量と、その幅がケタ違いに違う事をまざまざと見せつけられていた。

「待ってくれ、ちょっと待て。王都に誰かが居るのか？なぜそこに誰かが居るのだと解るんだ」

「何故って、・・・お前今まで何を見ていた。今全ての塔と繋がったではないか。王都に誰もいなかったら繋がるわけがないだろう」

「そ、そんな事言われたって、アニスの騎士でもない限り分かるわけがないだろう」

「ひょっとして、お前今まで王都には誰もいないと思っていたのか？」

「あ、姉上は一体いつからそれを知っていたのか…」

「ここに来てからだ。西塔に入って直ぐに確信に変わった。北の時雨にも誰か1人居る。この塔に入る時、入り口に燐玉があっただろう？あれが作動していた。誰かが王城からこの塔を見ている」

「な！？では、我々は監視されているのか？ここにいる事も、すべて、その誰かに知れているというのか」

「そうだ。それが誰かは知らん。もし仮にそれがフィスト卿を討った者だとするのなら、警戒を

怠るべきではない。お前は休息をとる積もりで入ったのかも知れないが、ひと息つける所ではないのだぞ」

「何故だ！何故それを直ぐに言わなかった！」

「何故って...」

「仮に相手が敵だとしたら、私たちは罠に掛かっているのだぞ！」

「罠？そもそもお前はそんな事も知らずにのうのうとしていられるのだから呆れる。それでよくアニスに入って来れたものだ。それが罠だとするのなら、アニスでは全てが罠だ。無知を言い訳に被害妄想も大概にしろ、イエスパー。貴族の戯れに呆け過ぎたか、この虚けめが」

「そうは言っても、勝手に違い過ぎる！ヴァリアントにこんな物は無かった！」

「甘えるな！」

カタルシアがイエスパーを平手打ちにする。

「全ての国がヴァリアントだと思うな。ここは他国だぞ。国にはそれぞれの仕来りがある。国にはそれぞれの文化がある。異国の異文化に触れて困惑する気持ちは解るが、それを自国の物では無いからと言って拒絶をするのはただの怠慢だ。お前はこの国に侵略をしに来たのか。この国をヴァリアントにしたいくてここに居るのか。己の立場を考えて行動せよ。無警戒にも程があるぞ、未熟者め！」

カタルシアはそのまま歩き去って行く。

「いくぞ。ここにいつまでもいても仕方がない。・・・イエスパー！お前は師団長だろう！しっかりしろ」

「分ってるさ！くそっ...」

中枢から出て直ぐ、イエスパーは師団を纏め、王都を目指して塔を出る決断を下した。

しかし、塔から出た時、一人の男が彼らを待ちかまえていた。



「久しぶりだな、カタルシア。元気そうで何よりだ。まさか姉弟揃ってここで再会するとは思わなかったよ」

「リヒター様！」

「ライツェン...」

暫く行方が知れなかったエーレン大公が目の前にいた。彼こそはイエスパーの師であり、カタルシアの元許婚でもあった。カタルシアはアニスに所属する際、ライツェンとの婚約を破棄していた。それ以来の再会となる。

「リヒター様もこちらの調査に来ていらっしゃったのですか」

「下がれ、イエスパー！」

師に会えた喜びの余り、リヒター大公に近付こうとするイエスパーの腕を引っ張って止める。イエスパーにはその意味も、今の状況も理解出来ていなかった。

「待てカタルシア。私はお前たちに槍を向けたくは無い。素直に本当に再会を喜びたくてここに来たんだ」

「ふざけるな。今この時に、何故お前が王都から来る！王都で何をしていた！」

「姉上、何を...」

「いいから黙っている！後ろに下がれ、イエスパー。そこから先はルームの射程だ」

聖槍ルーム。竜を凌駕した竜騎士であるライツェンが騎竜から賜った支配者の槍。エーレン大公、ライツェン・フォン・リヒターはフルクレリア大陸で唯一人の竜聖、黒凰であり、ヴァリアント最強の騎士でもある。

「流石だ。腕は鈍っていないようだな。だが私も本気だ。お前たちを手にかけてたくは無いだ。分かってくれ」

「どう為されたか姉上。まさか、照れて居られるのですか？」

「黙れ！馬鹿者が。・・・分らないのかイエスパー。リーンは私たちがこのまま退かなければ私たちを殺すと言っているのだぞ！」

「そ、そんな、馬鹿な。何を言って...」

「久しぶりだ。君に振られて直ぐ結婚をしてしまったが、今でも私の事をリーンと呼んでくれるのだな、ケイト」

「くっ...、戯れ言を！」

「やはり照れているだけじゃないか。リヒター様、どうか一緒に...」

大公は槍の石突きでイエスパーを吹き飛ばした。何の警戒も無いイエスパーは為す術無く大きく吹き飛ばされた。

「イエスパー！！」

「退け！ヴァリアントの民よ！これ以上の犠牲は私も出したくは無。今すぐアニスから撤退せよ！然ればこの場はこれで終わりとする」

「ファナティス様...」

師団の兵たちが慌てふためく。ヴァリアント騎士の総司令ともいえるリヒター大公と、その弟子であり、ヴァリアント貴族でもあるイエスパーの戦いとは遠く及ばない状況である。退く気は満々に満ちている。

「リヒター...様、・・・なぜ...」

「喋るなイエスパー。...聖導師はいるか！聖導師はどこか！...イエスパー、イエスパーしっかりしろ！」

「ふむ、良かった。不意打ちとは言え峰打ちで死んでしまうようでは困る。まだまだだな、イエスパー」

「おのれリーン！」

「ケイト、お前も退け。お前が怖いから言うのでは無いぞ。かかって来るのなら相手をする。お前如きに敗ける私では無い。だが一つ言って置く。この先には私よりも強い方がいらっしゃる。それも一人や二人では無い。...悪い事は言わん。もう少し時間をくれないか」

「目的を言え！王都で何をしている！なぜ、...どうして国を裏切ったあ！」

「焦るな。時期が来れば分る。だがそれまでは我等がこのアニスを守る」

「私の問いに答えろおお！」

「言えぬ。という答えではダメかな。裏切ったわけではないが、まあそう受け止められても止む無しか。私の行動にエーレンは関係ない。だが、エーレンが裏切ったと見なしたければそうすれば良い」

「国に残してきたお前の妻と子供に危害が及ぶかも知れぬぞ。それでも良いと言うのかお前は！」

「はっはっは、相変わらずだな君は。そんな優しい君を妻にしたかったと今でも思うよ。もちろん君の事だ。昔の馴染で私の家族を守ってくれるよう手を尽くしてくれると信じている」

「もちろんそのつもりだ。私はお前のそう言う所が好きでは無かった！」

「今でも愛している。...ケイト」

「戯れ言もいい加減にしろ！」

「一段落がついたらまた会おう。それまでは、もう会いたくはないが...、他の誰かに殺されて死んでしまうのなら、今私が君を葬ってやっても良い。だがね、私たちは何も君らを殺したくてここに来たわけじゃない。だから君らさえ来なければ私たちも何もしない。いや、尤も...、今は私の方から手を出してしまったが。すまない。これが最後だ。弟子とかつての恋人に最後の忠告をしに来ただけだ。本当はここは私の持ち場じゃない。たまたま君らが二人一緒にいたから、私にここを譲って貰ったんだ。ある意味運が良かった。彼女は私よりも強く、冷たい子だからな...。お前たちが殺される所は出来れば見たくは無い。悪い事は言わん、撤退せよ。そして事が終息するまで、もう来るな」

「事情が判らなければ来るしかないだろう！事情を言え！」

「何も聞かず退いてくれないのか」

「くっ...」

「ファナティス様、どうか、ここは...」

「部下たちは賢明な事だな。次に来るならそんな足手纏いなど連れて来ぬ事だ」

マジー国の部隊が王都アニシアへ迫る。

行く手を遮る者も無く、南のヴァリアントからすんなりと王都付近まで辿り着こうとした頃、レイナ公国とアニシアの国境付近まで来た時、空から1人の若い男がゆっくりと降りてきた。



「この先へは行くな。悪い事は言わない。退け」

若い男の風貌は明らかに人では無かった。

「何者だ、お前。魔族か？」

「異世界から来た。魔族と言う種族では無い」

「異世界から来た貴方が、どうして私たちの行く手を遮ろうとするのか。理由を尋ねてもよろしいか」

「面倒くせえから此処で死ぬか？死にたくなかったらそこをどきな、異世界のお前には関係の無い事だろう？」

「俺は此処を守っている。王都アニシアへは誰一人として入れるわけにはいかん。俺に剣を向けるのなら、相手をしても良い。ただ、命が惜しければ引き返せ」

「なんだと！」

霧衣が沙羅を止める。

「待って、未だ私の質問には答えてもらってない。異世界の貴方がこの世界の、王都アニシアを守るのか。その理由は一体...」

「それを知ってどうする、女。出来ればお前のような小娘を手にかけてたくは無い。何も問わず、来た道に戻るが良い」

言い終わるか否か、沙羅が斧を構えて飛び込んだ。

素早く身を躲し、冷静に様子を窺う。

「へへ、動じないね。良い度胸してやがる。...なら、これでどうだ！」

沙羅が2つの斧を若い男に投げる。

今度は避けもせず、2つの斧を素手で掴み取る。

「戦いは避けられないのか？」

そう言って斧を投げ返す。

「ちっ、やるじゃねーか...」

「沙羅、やめて。彼は強いわ」

「うるせえ！ここまで来てのこのこ退けるかって一の！」

「別の道を探しましょう、沙羅。別の道からなら通してもらえるのでしょうか？」

霧衣が男に尋ねる。

「どこを通ろうとも、アニシアには入れません」

「話が通じる相手じゃねーつつうの。いいからお前も剣を抜け、霧衣」

「素手の相手に、戦意の無い相手に剣は抜けないわ...」

「ここは戦場だぞ、霧衣！いつまでもウダウダ言ってんじゃねえ！戦士隊のやろう共も、お前の騎士団達も、既に臨戦態勢は整ってるんだぜ？後は俺達の号令を待つばかりだ。トップのお前がそれじゃあ騎士団も纏まりやしねえ」

「どうあっても退いてはくれないか」

男は静かに言う。

「てめえを倒してでも先に進ませて貰うぜ」

「沙羅！」

男が両手を胸の前で合わせると、電光が音を立てて光り始める。両腕を広げた一瞬、激しい光と共に、大降りの白い剣が男の前に現れた。

「俺もここで死ぬわけには行かない。・・・相手をしよう。死なないよう、全力で来い」

そうやって男が剣を構えた。凄まじいばかりの威圧感に、戦士隊、騎士団、双方の兵たちは圧倒され、完全に呑まれていた。

『こいつ・・・強い！』

「霧衣、こいつは俺が相手をする。邪魔だからみんなを連れて下がれ」

「何を言っているの？とても沙羅が1人で...」

「戦意のねえお前がいても足手まといなんだよ！いいから行け！...出来るだけ時間を稼ぐ。みんなを、・・・頼む」

霧衣は沙羅が覚悟を決めている事に感づく。それほどまでに男の気当たりが強いのだ。しかし、ここで沙羅を見殺しには出来ない...

「もたもたしてんじゃねえ！戦えねえ奴は下がってろ！」

騎士団員が霧衣を見る。それは退却の命令を待つ者の、哀れにも嘆かわしい目だった。もはやここに兵はいない。霧衣はそう悟った。

「戦士隊、騎士団、双方我について退け！一時撤退する。退けー！」

「待ってくださえ、霧衣の姉御。それじゃあ、それじゃあ、あっしらのお頭はどうなるんですかあ...」

霧衣に戦士隊の副隊長が縋る。

「お頭は強い。この気当たりにも負けてはおらぬ。安心してお頭が戦えるよう、今は退いて見守ろう。お前たちが信頼しないでどうする！...大丈夫だ。お頭は、沙羅は、...大丈夫だから。お前も師団を纏め上げよ」

霧衣が握り込む拳から鮮血が滴る。その瞳も、声も、涙に潤ませながら、必至に耐えている。それでも「退け」とはどういう意味か。副隊長も沙羅の覚悟を悟り、霧衣には何も言わず、師団を撤退させるべく走り去った。

「霧衣様...、魔導騎士団も撤退を開始しました。さ、参りましょう」

「賢明な判断だな。願わくは、お前も撤退してもらいたかったのだが...」

「悪いねえ。強い奴を見るとついつい戦いたくなって、うずうずしちまうんだ」





2人は黙ったまま対峙する。

先に動いたのは沙羅だった。

「本気で行くぜ！」

沙羅が大きく跳躍し、男の頭上から2つの斧を降り降ろす。

そこに男は既に居らず、斧が地面を粉碎する。

「なるほど、確かに良い腕っ節だ...」

男はその背後から落ち着いてそう言う。

「へへ、そうかよ。そりゃ、どおーも！」

言いながら振り向き様に斧を尻ざる。

「身のこなしは素早いな。だが、その大剣を振るにはちょっと華奢じゃねえか？」

「案ずるな、それほどでもない」

「そうか」

「ー！？」

沙羅が高速で男の背後に回り込み斧を左右から外へ尻ざった。男は不意を突かれ、それを剣で払い流した。男が剣を構え直した時、目の前に沙羅は居ない。

上空からの風切り音...

咄嗟に頭上へ構えた剣が大きな音を立てる。

「くっ...」

即座に男は後ろへ逃れたが、目の前に沙羅の顔があった。斧が下から突き上げられる。

防戦一方の剣士と沙羅の斧が激しくぶつかり合い、火花を散らす。

「強いねえ、あんた。ここまでやって皮一枚しか刻めなかったのは初めてだぜ。一応聞いておくか。お前、名前は？」

「カイン。ヴィドヤー＝ラ＝カインだ。そっちはシャラクんだったかな？」

「へ、名前を覚えて頂いて光栄だね。俺はシャラ・シアフォンだ。へへ、良いね。久しぶりだ、こんなに血が滾ったのは。うれしいぜ、カインさんよお！」

再び沙羅がカインに襲いかかる。

カインがそれを待ちかまえて、大きく剣を横に尻ざる。

「そろそろ決着をつけよう。俺も少し本気で行く」

カインが剣を両手に持ち、それを地面へと突き刺した。

「な！？」

次の瞬間、辺り一帯から激しい電光が天へと上り、弾けた。

撤退を続ける霧衣ら一行の背後から、大きな爆裂音と地鳴りが響いた。

「お頭あ！！」

「ああ、やべえよ、ありゃあ！」

「あいつ魔導師だったのか！？」

戦士隊の面々が騒ぎ始める。

「司令...」

霧衣の脇にいた副長官が不安げな眼を霧衣に向ける。

「霧衣の姉御お、俺達あやっぱり戻りますぜ！お頭一人を死なすわけにゃ...ひい！」

戦士隊の副長の首に霧衣の剣がかかる。霧衣の大きく見開かれた眼は中空を見つめたまま、ただ凄まじいばかりの怒りが入り交じったかのような形相で、何も言わず剣を抜いていた。普段は無表情で何も言わない霧衣の忍耐も限界だった。

「あ、姉御お...」

「司令...」

おっとりとして優しく、母のような温かさを持つと言われる魔導騎士団の司令官には想像も出来ない光景であった。誰もが信じられないものを見るかのように霧衣を見ていた。その気迫に気押されて、その場は静まり返った。

「何人たりとて、戻る事は許さん。...大丈夫だ。...大丈夫・・・」

霧衣が皆を沈めるべく、声を振り絞って言葉を発したその時、また大きな光と音の振動が聞こえる。

「姉御お、行って下せえ！あっしらはお頭と姉御の言いつけを守ってここから動きませんからあ！どうか、どうか！姉御！お頭をたのんます...」

戦士隊の1人が霧衣の前で膝を突いた。

「姉御お、俺からもたのんます！お頭を助けてやってくだせえ！」

「お頭を宜しくお願いしやす！姉御！」

「俺らはこのまま大人しくしてますんで！姉御の副長官にも従います！」

次々と霧衣に懇願する。しかし、霧衣は動かない。怒りで体が奮え、握る剣が鳴ろうとも...。唇を噛みしめて必至に耐えていた。

「司令、行って下さい。沙羅様をお救い出来るのはもう司令しか居りません。此処は我等にお任せ下さい」

副長官が霧衣の顔をのぞき込むように、優しく諭す。

「...めだ。司令官の私が、...ダメだ。私情に走るような事は・・・」

「このまま愛する人を見殺しにしてでも司令官で有りたいのですか、貴女は！マージに入国したのは何故です！祖国を離れたのは何故ですか！お行きなさい！貴女がいなければ統率も執れないほど、我が騎士団は廃れておりません！」

唯一、霧衣の事情を知る副官が怒鳴った。霧衣は目が覚めたかのような、びっくりしたような顔で副官を見つめる。

「どうぞ、ご武運を。我等が司令...」

優しく微笑んで最後の挨拶をするその頬に、涙が伝う。

もし霧衣も、沙羅も、ここで死のうものならば、自分たちも後を追うのだと、決意した涙であった。

「お頭をたのんます！」

「ご武運を！」

気がついたら霧衣は走っていた。後ろから戦士隊、騎士団の兵たちの声が木霊する。走り去った霧衣が見えなくなると同時に、空に金色の竜が昇った。

「な、今度は一体、なんだ...」

「霧衣様の雷竜だ...。霧衣様が本気になられた...。・・・強いぞ、霧衣様は。我々など足元にも及ばぬ。自由騎士とだって渡り合えるほどに...」

副官が半ば興奮気味に言う。

「ま、まさか。幾ら何でも自由騎士とは...。あのお優しい姉御が...。わしら、何度かお手合わせ頂いたが、とてもとても・・・」

「では何故我々の上に司令官として就いて居られようか。...あの方は誰よりもお優しい。それがいつも戦場では災いを招いて居られた。あの方はいつも加減なされる」

「あんた、副官なら見た事が有るのか？姉御の本気を...」

「ああ、ある。一度だけ。あの方は水竜を召喚する剣士。雷も、氷も自在に操る魔導術師でもある。しかし、何より恐ろしいのは、竜でも魔導でも無い。剣技よ...。あの方は抜刀術の才子。アニスの黒騎士、ヴァリアントのカタルシア様のような抜刀術の冴えを持ってらっしゃるのだ」

「とてもそうは見えねえなあ...」

「私とて目を疑った。目の前の竜騎士を竜諸共真っ二つにして退けたのだからな...。恐ろしいまでの気迫、そしてスピード...。司令は類い稀な才能を、あの優しさで隠し持って居られた」

「それじゃあ、フェイス様と互角に渡り合えると？」

「さあ...、解らん。だが、フェイス様も霧衣様を侮るなといつも仰せであった。あの時、その言葉の意味がはっきりと解った。フェイス様、シャラ様、キリエ様。この三人はマージ国として敵に回したくないからこそ、我が国に招かれたのだと...」



「命よ、さっきの光は雷霆であろうか？敵は私と同じ使い手か」

『解らぬ。同じようではあるが、あれは完全に電光そのものの衝撃だった』

竜に跨がり上空を駆ける。

『あそこだな...』

前方に大きく地面をえぐり取ったような跡があった。

「沙羅！！」

その近くで横たわる沙羅を見つけ、竜から飛び降りる。

「沙羅！沙羅！眼を開けて！！沙羅！！」

「死んではいない。安心しろ」

離れた場所にカインはいた。

「な！？」

霧衣がカインに剣を抜いた。

「よせ、お前は...・・・」

霧衣の魔導術が無数の水の刃となってカインを襲う。

「連れて退けば良いものを...貴様もあなりたいか、小娘！」

「許さない...お前は許さない！！」

霧衣の魔導術を払いのけてカインは上空へ逃れた。

「おいで、ミカツチ！我が翼、我が刃、我が盾となれ！我が魔導の渾てをあげる！我が魔導を喰らいて、我が命を喰らいて、我に従え！...アメノミカツチノミコト！！」

『・・・愚かな...心して従おう。我が最上なる主、ケイ・キリエ...』

超高速で上空のカインを追う。

「なに！？」

空中戦を得意とする霧衣にとってカインは最早止まった的も同然であった。

水竜と同化した霧衣は地表から、大気から、ありとあらゆる場所から水を吸い上げて武器とする。四方八方から水や氷の飛礫を喰らう。水の飛礫がカインを貫き、氷の飛礫がカインを刺す。緩急入り乱れた散弾の波状攻撃と霧衣の高速な切り込みがカインを容赦なく襲う。

『つ、強い...さっきの男よりも、この小娘は強い』

カインは霧衣の切り込みを剣で受ける事が精一杯だった。

『この娘、正気じゃない...』

「はっ！」

カインは一つ衝撃波を放ち、刹那、距離をとった。その剣は形状を変え、中心から2つに割れた挟み状に変化した。

「これは使いたくは無かったが...、相手が水ならば効果も高いだろう」

カインは剣を後ろから前へ大きく横に屈せると、2つに割れた挟み状の刃の間から電光を放った。

「竜雷！」

霧衣が応戦する。

「な...！」

カインが電光を放った直後、霧衣もまた雷霆を身に纏って突進し、電光を剣で薙ぎ払った。

「うぐう...」

霧衣の剣がカインの脇腹に突き刺さる。霧衣の両肩から2匹の竜が召され、カインの首を咬んだ。

「きゃあ！」

しかしその直後、カインから何らかの力が発せられて霧衣は弾き飛ばされた。

カインは化身した。

その身に光を纏い、傷を癒す。

「まさか、雷光剣が弾かれるとは...。なんて小娘だ。まるで死を恐れていない...」

死なせずに済むにはどうしたら良いか、とカインは考えていた。恐らく恋仲だったのだろう事は戻ってきた時に解った。なるべく殺したくは無い。しかし、彼女は死を恐れていない。化身為ざるを得なかった。カイン自身は神の化身となる事をあまり好ましく思っていない。人を相手に

神の力を振る舞うなど、もう金輪際したくは無かったからだ。

しかし今ここで自分が死ぬわけにはいかない。

「くっ...」

振り落とした霧衣が地上から無数の氷の矢をカインめがけて放ってきた。

霧衣はカインの目の前にいた。

「死ねええええ...」

閃光。

一瞬の閃きが如し高速の抜刀が真空の刃を飛ばす。

避けたカインの頭上から振り降ろされる霧衣の剣。

受け止めた次の瞬間氷竜が襲いかかってくる。

それを避けても霧衣が脇差を喉元をめがけて突いてくる。

化身したカインに見切れない攻撃ではないが、逆にどうケリをつけるかに戸惑っていた。

『殺意が無いな...』

！？

カインは声を聞いた。それは霧衣の召喚する竜の声だった。

『もしこの娘を生かしてくれるのなら、頼みが有る』

「なに?...どういう意味だ」

『私はこの娘を助けたい。しかしこれ以上戦えば私はこの娘を死なせてしまう』

「.....」

『この娘は私を凌駕した。私がこの娘にしてやれる最後の守護を...、この娘に授けたい』

「どうすればいい。どうすればこの娘を生かしたまま終わらせる事が出来る」

『先ほどの電光を今一度...』

「信じていいのだな？」

『時間が無い...頼む』

霧衣の執拗な攻撃に耐えながら、会話が終わる。

あとはタイミングだけ...。カインは化身を解き、その力を剣に戻すと、再び雷光剣の構えに入る。霧衣は容赦なくそのスキを突く。

「どうなっても知らんぞ！」

薙られたカインの剣から電光が迸り、霧衣はそれを竜雷で受け止める。至近距離からの電光を弾く事が出来ず霧衣の体が電光に包まれる。

光は上下に分裂して霧衣から剥がれ、上下2つの光の輪を作り上げた。それが再び霧衣の体に戻り、縛るかのように一つの輪となった後、光は霧衣を抱くようにその身に金属器となって残った。

霧衣に意識は無く、ぐったりと中空に浮いている。

召喚騎士が自由騎士になった瞬間でもあった。竜に認められ、その実力を凌駕した証は、守護環に姿を変えその身に宿る。

カインは霧衣を抱えて地上に戻り、沙羅を抱えて部下の許に送り届ける。

「お頭あ！」

「司令！」

「案ずるな、殺してはいない。悪い事は言わん、このまま退いて主を休ませよ。それとも、ここで全滅するか」

師団は退いた。

アニスが遂に落ちた。フルクレリア諸国にとってこれほど待ち望んだ話は無い。しかし、その原因が諸国の動きを鈍らせている。アニスはフルクレリアでも特に異常なほど魔族の徘徊する国で、逆にアニスとは魔族にとって希望の国なのだという。魔族はアニスに集まり、アニスもまた魔族を討伐する為の強い力を求め、そこに兵が集っている。軍事力は他国のそれを圧倒し、国際的にもその軍事力は脅威となってきた。また武勇で名の知れた者が現れると、あらゆる手段を以て抑圧し、アニスには逆らうことの無いよう謀るなど、アニスは大陸での主導権を我が物にしている。アニスに弓を引く国は事実上無かった。

—そのアニスが落ちた。

28代アニス王が崩御し、今アニスは魔族が制圧していると言う。アニスには魔族に対するあらゆる術が在るはずである。その国境には高い壁が築かれ、強い聖導法の結界によって魔族をアニスより外に出さないよう施されてもいる。王城を制圧したという魔族も国外に侵攻してくる気配は無い。しかし今、アニスの国内には今まで見たことも無いほどの魔族が往来し、とても人の住めるような状況では無いらしい。各国の精鋭、屈強な兵どもが集まるアニスの軍事力を持ってしても制し切れないほどの魔族がどこから湧いてきたのかは解っていない。ただ一つ、各国王が疑念を抱くのは、この落日が仕組まれたものではないのか。畏かも知れない、ということだった。

アニスが落ちる数日前、アニス王妃に親しい各国の聖導法師たちは同じ声を聞いたのだと言う。

『時は満たされました。亡びと再生が始まります。アニスは今こそ積年の罪を贖うべきです。... アニスを滅ぼしたくはありませんか』

白法聖導師はその声を聞く以前より、アニスに黒い影が在ると見ていたらしい。そしてアニスの中央塔より聞こえた其れは、紛れも無くティス・カーンの、アニス王国及び大陸最高の大聖導師の声であつたらしい。

大方、アニスの国内でクーデターが起こるのだろうと予測していたそうだが、ヴァリアントに帰還したアニスの元帥・カタルシア卿はその予想を覆す報告を携えていた。

アニス王は長く魔障に憑かれており、人魔と化していた事、その強大な力に抗う術なく時を待っていたと言う。人魔と化したアニス王は魔族の力を使って負の気を収束させ、アニスに眠る神を取り込んでフルクレリア全土を掌握しようと企てていたらしい。そして遂にアニス王は動いた。しかし強大な力の前にアニス王の魔障は暴走し、完全に自我を失っていたのだと言う。大陸最強のアニス王国元帥・青の将フィスト卿がそれを食い止める為に白の将ラザー口卿と共に王城ピューリティへ出陣し、赤の将レイナ卿は国民の国外への退去を先導、同時に国内に蔓延る魔族の殲滅を指揮、黒の将ファナティス卿は宗主国ヴァリアントへの実態説明と大陸各国への非常事態・救援要請にそれぞれ動いたのだと言う。

どこまでが作り話で、どこまでが事実なのかは定かでは無いが、ヴァリアントはその要請に応え、マジー、セイレーン、ウィリンドも其れに続き応じる事となった。フェネルは軍事国家では無い事を理由に救援要請には応じず、避難するアニス国民の受け入れのみに応じる形を執った

。フルクレリア中部地方の各国は動きを見せていない。

フルクレリア中部地方は西の軍事国家、ホンフォンとメガリアの対立が悪化しており、メガリアと同盟を結ぶテラー、エクサリオ、オース、タイハーン、タイハウが、ホンフォン・ミンファの二国間軍事同盟を警戒している。とてもアニスに軍事的な支援が出来るような状況では無い。中部地方東側の諸国は紛争を嫌うライセイ、トキワ、カノンと、他国には一切干渉しない軍事強国ニヴァールがあり、不穏なニヴァールの動きを警戒して三国は身動きの執れない緊張状態に在る。フルクレリア中部の渾沌とした情勢は北フルクレリア、南フルクレリア・ウィンディア島の各国も理解している為、アニスへの支援は宗主国であるヴァリアントを筆頭に、姉妹国であるマジー、同盟国のセイレーン、ヴァリアントの同盟国であるウィリンド、アニスからの独立国であるフェネルのみに限定される話となった。セイレーンから独立したウィンディア島・東端の小国、ビンランはセイレーンからの報告で明華との同盟を締結している事が明らかになっている。

アニスの騎士たちは支援に応じた五カ国に避難を完了し、赤の元帥レイナ卿はフェネル王国、黒の元帥ファナティス卿はヴァリアントへ駐在。青の元帥フィスト卿、白の元帥ラザー口卿は死亡した旨が伝えられた。伝えたのはアニスの神官、ティス・カーン。アニス王妃リリーナより任を解かれてヴァリアントに帰還。瀕死で衰弱し切っていた神官はそれから一日と持たず亡くなられたそうだが、死の間際に言い残した言葉が波紋を呼んでいる...

戻られた王子と王女が新しいアニスの創成をし、アニスは浄化される。

現国王は討たれたが、その王妃様と侍従の精霊が行方が知れず。

近い将来、大陸の各国を巻き込むことになる。

全ての国がアニス王国のために戦い、世界が変貌する。

フルクレリアのパワーバランスは均衡する。

...そんな内容であったようだ。

実際、今アニス王国の中では何が起きているのか判っていない。ヴァリアント王・ヴァリウス七世は宗主国の国王として、アニス王代理としてアニスの生き残った騎士を纏め、ヴァリアントに駐在する騎士を黒の元帥の指揮下に、フェネルに駐在する騎士を赤の元帥の指揮下に置き、部隊を整えるよう命じ、ヴァリアントから

南北の将軍、ファナティス卿、ヴィナス卿を師団長に遠征部隊を編成、マジーにも同様の二部隊を編成するよう要請があり、マジーは東方守護のシャフォン、西方守護のキリエがそれぞれの部隊を率いて参画することが決まった。

私は筆頭騎士として王城、玉座を守護する立場に在る。同じく筆頭を預かる第二王子ガラム様と、リュヌ家騎士侯爵のベルナティス殿は共に飛竜の騎士であるため、国土全域を飛び回る。キリエとシャフォンの抜けた穴はお二方が埋めて下さった。筆頭位に就くとはいえ、他所者の雇われ騎士にこのような大役を与えて頂けるのは嬉しいが...、隠している私の素性が知れば国民が黙っていないだろう。私の素性に関しては、王も、侯爵も恐らくお気づきになられているはずだが、暗黙を貫いて私を信用して下さっている。私もその信用を裏切らぬよう努める積もりだった...



夜遅く、密偵のフェイチェンが私を訪ねてきた。

「ミンユエ様...」

「どうした！？深手だな...。待っている、今、...」

「構いません、...これも最後の伝達になるのかと」

「・・・」

「タオシャンが動きました。ホンフォン、ミンファの連名で隣国を侵攻、中部統一を目論んでおる様です」

「あれを使うか...」

「メガリアが落ちました。その勢いでテラー、エクサリオ、オース、タイハーンを攻めているようです」

「メガリアが落ちただと！？馬鹿な...剣聖王が破れたのか」

「姫さまを人質に取られたようです...夢想溺、厄介です」

「しかしタイハーンは兎も角、オースまでは...」

「オースの総大将はお妃様。...恐らくメガリアの二の舞いかと」

「馬鹿な...」

「殿下達は何処に...」

「今はアニスに遠征している。狙ったな、...リウ・タオシャン！」

「夢想溺は危険です。ミンユエ様には特に警戒している様子でした。おそらく他よりも効果の強いものを用意してくるでしょう。...どうか、変な気を起こさせぬよう」

「・・・」

「どうか！...ミンユエ様」

「兄上には、たれぞ送ったか」

「いえ...、残念ながら。私も...、ここまで来るのが...」

「そうか...」

「ミン...エ...さま、どうか！...早まる...事、無きよ...」

「フェイチェン！...今まで、ご苦労だった。よくぞ此処まで尽くしてくれた」

「リン...ミン...エ様、...万...歳」

「フェイチェン...」

フェイチェンが死んだ。私と兄を亡命させ、常に私と兄に仕えてくれたフェイチェンの死は、タオシャンの謀よりも堪えた。滾る血に逸ってはいけない。それは解っている。しかしこのままこの地で待機し続けるわけには往かない。オース、タイハーンの落日が在って尚、私は奴らに合わせる顔が無い。何としても食い止めねば...

神剣エターナル...、お前は私を侮蔑するだろうか。皇帝の双剣に隠されたお前に見出された私はこんな女だ。気に入らねばいつでも私を焼くが良い。

私は、...私は最悪の皇帝だ。

「こんな夜中にどこへ行かれる、ユイ卿」

「ベルナディス殿...」

まるで私を待っていたかのように、ベルナディス卿はそこにいた。フェイスエンが来たことを察知していたのだろう。

「至高装に防御輪、そして神剣...。まるでこれから戦にでも赴くかの様な装いだ」

「・・・」

「お前1人で行くのは無謀だろう、せめて軍を整えたらどうだ。事はシルベストルから聞いている。誰もお前を責めたりはせん...」

「このような時に、玉座を守る私が身勝手を...」

「そんな事はどうでも良い。王もそんな器の小さいお方じゃねえ。ただ、どうせなら奴ら二人が戻ってからでも...」

「間に合いません！...それに、シアフォンは兎も角、キリエは無理です。やつらは麻薬を使います。あれは女を...」

「...麻薬？」

「魔導術や聖導術に合成した麻薬・夢想溺と言うものです。あれは女だけに効くものです。メガリアの陥落は姫さまを人質にされたものです」

「それだけじゃねえよ。メガリアの皇帝は魔剣を持っていなかった。そして既に自害していた。恐らく皇太子が魔剣を継承してどこかに亡命している筈だ」

「な！それは、誠ですか？」

「シルベストルの目をなめんじゃねえよ...。幸い、オースとタイハーンの皇族もこのマジーが匿っている。皇太子のお前がわざわざ死に行かなくても、大局を...」

「これ以上戦火を広げるわけにも...」

「女にしか効かない麻薬と言ったな。お前は待ち伏せされているんじゃないのか」

「それは、解っています...。それでも！」

「恐らく奴らにとって最も厄介な敵は大陸最強の剣聖、...お前だろう。無論、それがお前であることなど、あちらさんも概ね知っているだろうしな」

「だとしたら尚更、ここに居るわけには参りません。国王陛下に仕えさせて頂いたこのご恩を、仇で返すような真似だけは出来ませぬ。大恩あるこの国に被害が拡大為ぬ内に、手を打つには、...今の機会を逃すわけには参りません」

「・・・」

「ただ、私に出来る事は我が国を止めること。一時的に戦況は錯乱するでしょう。しかし本営は...」

「安心しろ。既にヴァリアントで遠征部隊を整えているという報告も来ている。何も手を打っていないわけじゃねえ。ただ、もう少し時間がかかるだろう。テラー、エクサリオ、オースの三国は諦めるしかねえ...。それを待って、お前が陣頭指揮を執って出陣するのが最前の手筈だ。今シ

ルベストルとはそういう協議で一致している。もうすこし辛抱しろ...」

「それを聞いて安心しました」

「そうだ、誰もお前を責めたりはせん、だから...」

「否、是よりフェイスエ・ユイ、帝都チャンハイを攻略に向かいます」

「なに？...お前、」

「必ずホンフォンを止めて見せます。どうか、ミンファの本営を宜しく願います。...あと、
...」

「はあ...。どうしても行くのか？」

「ベルナディス殿、シャフォンとキリエを、宜しく願います。...そして、「すまない」と...」

「自分で言え、馬鹿野郎！.....戻って来い」

「.....」

「...今夜は良い風だ。思わず酔いしれて独り言も増えちまうぜ、まったくよお。...ここには誰も
いねえのにな」

諦めたベルナディスがフェイスエに背を向けて歩きながらそう呟いた。フェイスエはベルナ
ディスに敬礼をすると、そのまま黙って消えるように去って行った。

「馬鹿野郎が...」

「フェイスエ様！...フェイスエ様！お待ち下さい」

「ステファン...」

「先ほどフェイジェン殿をお見かけしました。何か、大事でしょうか！？その姿は...」

「ここでは目立つ。...こっちだ」

マジーに在籍してから私に仕えていた侍従の一人だった。飛剣を知り、私を知る唯一人の従
者で、頭も腕も冴える事から、私は侍従としてではなく片腕として、私の参謀として常に傍に就
けていた。マジー国に所属し、生まれも育ちもマジーの男だ。

「ステファン、お前に最後の頼みがある」

「私に出来る事でしたら、何なりと」

「ヴィリンヒトへ行って欲しい」

「リンフォ様でしょうか？」

「そうだ。今から私の言うことをそのまま伝えて欲しい。頼めるか」

「はっ！」

「飛剣が死んだ」

「...！？フェイジェン殿が...」

「飛剣の代りに其方を遣わした。私はこれから母上を討ちに行く」

「...な！？...」

「晴れて私が22代嶺明月を継承した暁には、急ぎ紅鳳へ戻られよ。即位した私の下す、最初で最

後の勅令を言い渡したい。...これだけだ」

「お、お待ち下さい！お一人で行かれるおつもりですか！？」

「お前は黙って私の指示に従え。私の、最後の頼みだ...、何も言わず、兄上に伝えよ。非公式の伝令だ。お前もその命に代えて使命を果たしてくれ」

「... ・ ・ ・ ご武運を、お祈りしております。貴女にお仕え出来たこと、このステファン・ルメル、誇りに思います。この命に代えても必ずや、リンフォ様にお伝え致します。...どうか、ご武運を！」

「我が主と認めよう」

それが最初に聞いた声だった。

まだ幼かった私はその声がどこから聞こえてくるのか解らなかった。

「時々変な声が聞こえるの。私に話し掛けてくるの」

「あら、ミンユエはもう聴こえるようになったの？お兄さまはまだ聞こえないと言うのに...。うふふ、それはね、精霊達の声なのよ」

「精霊？導術を使う時の？」

「そうね。それだけじゃないけれども。精霊はいつも私たちの傍にいるのよ」

「どこに？」

「まだ眼は見えてないかしら。あなたの傍には3体いるわ」

「どこ？どこにいるの？本当にここにいる？何をしているの？」

「精霊はね、気に入った人の周りにいつも寄り添っているの。そしていつも力になってくれるのよ」

母上はそれを精霊の声だと言った。私も初めは疑わなかったが、私の霊聴が発達して行くにつれ、それが精霊の声ではないのだと悟った。

やがて時が経ち、私は聲に導かれて帝の間の奥へ案内された。

「ダメだ、ここは母上がいつも入ってはいけない場所だと言っている。成人したら入る場所だと。私はまだ成人していない」

「問題ない。私が主と認めた。そこから先は代々の皇帝以外、私の認めぬものは入る事を許さぬ場所。御主は私が主と認めた者なればこそ、問題ではない」

「一体、お前は何だと言うんだ...」

「来れば解る」

帝の間の奥には二振りの剣が祀られていた。二振り一対の剣、紅嶺は右に天嶺、左に地紅が祀られている。皇帝専用の双剣と言われる伝説の剣。この剣を握ったのは初代、この国をお造りになられた剣士、紅龍子だと教えられた。

紅嶺は奥の間の左右の壁に掛けられていて、それはしっかり封印もされていた。

「私にこれを使えと言うのか？母上ならともかく、私ではまだ...」

「我が名はエターナル。我が名は永恆。我が炎は神の怒り。我が炎は神の温もり。我が炎は神の

煌めき。其方が剣士というのなら我が器は剣と成らん...」

奥の間の中央に眩い光が輝く。それが収束して一振りの白い剣へと姿を変えた。

「これは...、なんだ？こんな剣、聞いた事もない。白い剣...」

「紅嶺は我を封じし鍵。龍子の血は紅嶺を守る鍵。忘れるな。決して解いては成らぬもの。本来あるべき姿へ戻せ。それまでの間、其方を主と認めよう。我は神剣。我が名はエターナル」

神の宿る剣。私はあまりこれを使う気にはなれない。私は強くなりたかった。母上のような、強く優しい剣士になりたかった。私の強さがこの剣のせいではない事を、私自身が実感したかった。私の至高章や剣聖章は...、私本来の強さでは無いはずだ。私は正直この剣を忌々しく思っている。私は剣のおかげで強いと思われているだけに過ぎない。私の力など、私の剣技など、母上に比べたらどれほどお粗末な事か！兄上ほどの優雅な振る舞いもできず、ただただ剣に振り回されて成り上がっただけだ。もし私の剣がただの剣であれば、私はどれほど弱い存在であろうか。神の剣を以てしても、果たして母上に適うのだろうか。

フェイチェンの報告だと母上はロンヅ様のテンリンを抜いていると聞く。タオシャんにチーホンを奪われてホンリンの力は無力化されているというが...

-それでもあの母上が相手だ。

帝都チャンハイが眼前に広がる。いやな臭いだ。夢想溺の香がここまで漂ってくる。こんなものに屈する気はない。

上空から一気に本殿を吹き飛ばす！本殿から帝の間、母上まで一気に突破させてもらうぞ！

私は空を飛ぶ事は出来ん。背翼の召喚が上手く安定して出来ないから...。後翼の疾走と主翼の跳躍、後翼の滞空から狙うしかない。飛び道具など本来好まぬ所だが、畏だと判っていて畏に掛かってやるほど私も馬鹿ではない。

母上に習った剣技の中でも、最近になってようやく扱えるようになった...

「風火招来！我が力、我が剣技、我が心のままに集え！...舎神・旋！！」

上空からの高速な攻撃で警戒は上空へ向かう。本殿に風穴が空くほどの巨大な衝撃波だ。尋常にはなれまいな。本殿に向かう兵に紛れて突き進む私を狙う敵意は殆ど感じられなかった。流石に本殿に入ればそうも行くまいか。私に向かってくる奴らが何かを言いたげだったが、話している余裕はない。夢想溺が回る前に母上の下に着かねばならぬ。果たして討てるか...。何人の兵を斬り倒したか解らない。血のりで手が滑る。それでも赤く染まった白い剣を振り続けるしかない。流石に後翼を羽撃かせながらの疾走で突撃するのは疲れるが、もたもたしては夢想溺に毒されてしまう。

ここへ来る傍ら、城下町を通り過ぎ様に哀れな姿を幾つも見てきた。ああはなりたくないものだ。もはや人ではない...

「えへへへ...、なんだあ？何事ですかなあ？」

「ああん、んもう、早くして」

これは一体なんだ…。

「おーやおや、これはお嬢さん。どうした。こっち来て一緒に楽しもう、ささ」

「あらあ？どこかで見たかしらあ？可愛らしい子ねえ。・・ああん、早くう」

「なんだあ？知り合いなのか。そうか、良いぞ、儂は二人一遍に相手するぞお」

「すてき…」

なんなんだこれは…。

「どうしたあ、お嬢ちゃん。そんな召し物なんぞとつと脱いでほら。肌と肌をすり合わせると、気持ちが良いぞお〜」

「おおおん、ああ、いいわあ〜」

「…んだ、これは・・」

母上…。タオシアンまで…。

「何だと言っているんだ、貴様ら！」

なぜタオシアンまで毒されている…。男には効かぬ筈では無かったのか…。もはや人ではない。こいつらは！

「やれやれ。わざわざそちらからお出でになるとは、御足労でしたな、殿下」

呆れたような、落ち着いた口ぶりの男の声が背後から聞こえた。

「誰だ！？」

「さあ？誰でしょう。もう直貴方も彼らの仲間入りになるのですから、お気になさいますな」

ミンファの者だ。すこし訛りがある。問答など無用…

「…くうっ、い、いきなり来ますか！まったく、北の女は野蛮ですねえ、ホントに」

「・・・」

「早く貴方も魔族のようにあなっておしまいなさい！っよっと。強いな、流石は次期皇帝を目される方だ、…ミンユエ！大陸最高の剣聖とは笑わせてくれるわ！このチビがあ！」

「…ふん、ミンファの民はよく喋る」

強い。筆頭クラスの腕だ。同じ剣士だがこれほどまでに強い剣士と戦うのは久しぶりだ。せめてもう少し体が自由に動けば・・・。くそっ、力が入らん。

「よく立ってられるものだ。両足からそんなに滴らせているというのに。普通の女騎士なら今ごろ身悶え始めておるわ。見事なものだな、白装束の剣聖とは」

「何故お前は何ともないのか。何故タオシアンは男なのに…、・・くそっ、まだだ！貴様だけでも…」

「ああ〜、知りたいですか？あれも魔族から抽出したものですよ。但し、直に注入しなければならぬ物ですが。夢想溺のように散布しないのは、…おほほほ、解毒剤が無いからですよ。怖いですねえ。私もああは成りたくないものです。ほほほ、大陸最高の剣聖様を陵辱出来るとあらば、少くくは…という気もしますが、ね！…いい加減に折れたらどうです！」

「くうう、この程度で！…ああああああ！はあ、はあ、はあ、はあ、…私は、あたしは、まけん！」

「くっ、この期に及んでまだそんな力が！末恐ろしいな女皇帝！剣聖は伊達じゃないと言うわけですか。まさか発情したメスに腕を一本持っていかれるとは...、このクソチビがあ！簡単には殺しませんよ！立ってられない程衰弱しておいて、まだ私を睨むか！この！この！」

もう痛みすら感じない。むしろ剣に切りつけられる度に、それが気持ちよくて、もっと切りつけて欲しいとさえ思える。朦朧とする。私は、なにを...

『力が欲しいか』

-？

力とはなんだ。なぜわたしは...

「ほーれ、ほーれ、ひやはははは、顔が悦んでおるぞ、剣聖！ん？気持ち良いのか、この小娘が！」

「ああ！っは、・・・きもひい...」

『我との約束を果たせ。主よ、...力が欲しいか』

やく...そく？あるじ？・・・ちから。

『我を受け入れよ、我が力を欲せよ、紅の皇帝よ』

ちから...。ほしい。・・・あたしは、私はつよくなりたい。私は！

「うぐう...、はあ！はあ、はあ、はあ、はあ...、わたしは・・・、私はああ！！」

「んな！？何だと！馬鹿な！！・・・まだ折れてないのか！？」

頭が痛い。体中が痛い。目の前が見えない。剣は、エターナルは...、在る！まだ握れ・・・、握れ！私の腕よ、...握れ！...握れ！

「往生際の悪い事で...。小生意気にまだ私と戦おうとでも言うのか」

『我が名はエターナル。我が名は永恒なる焰。我が眷族となり、我が力を求むるか』

「あああ、はああ、はあ、あたしは、ミンウエ、あたひは、まら、まあ、ひえあい...、ひぬかあ！」

もう体の感覚がよく分らない。喋る事すらできない。

『力が欲しいか』

「ほひい...、ひんえあまうか・・・」

「な、なに？今更火術なんて使ってどうしようと言うのです？よくもそんな状態で...、ちがう！これは火術じゃない！！まさか、神器か！まさか！」

熱い...。痛みと快樂が焼けていくようだ。

長く長くまるで火に炙られているかのような、いつまでも、じっくりと、全身を焼かれているような、じりじりとした痛みと言うのか何なのか解らない感覚が全身を包み込んでいる。

「そうか、炎の神器は貴様が持っていたというわけか...、まさかその奇妙な剣に隠し持っておったとは！」

『我が眷族となり我が力の全てを受け取るが良い。我はフルクレリア。我は炎、我は光明、我は安らぎ、我は怒り。我は温もり。我が名は永恒。紅の皇帝よ、我が眷族となりて新たなる光明を示せ。我が力を永久の刹那に...』

「なんだ、何が起きている...。火神が目覚めるとでも言うのか！神器は、・・・否、ここは退く

べきか」

「逃がさん」

「っく...、この炎、ただの炎ではない。私とて神の炎を纏う相手と隻腕で渡り合おうなど微塵も思わんわ！」

「我はフルクレリア。我は炎。我が炎は怒り...」

「ふふ、ふははは、神にでもなったつもりか、小娘え！発情して衰弱した淫らな小娘風情が偉そうに！」

「我が炎は煌めき。我が炎は温もり...」

「な、なんだ、その姿は...」

「我が名はヨンハン。我が名はエターナル。我が名はとこしえ...」

「馬鹿な！精霊か！？ふふ、ふはははは・・・、ふざけるな！人が精霊になるなど聞いた事もないわ！」

「帰依の世にはまだ遠く早い。我が眠りを妨げるなら刹那、開闢の灯りを瞬かん」

神剣を解放した明月は炎に包まれ、渦巻く火柱の中でその身を焼き滅ぼし、神の器として剣共々生ける屍となり果てた。消え行く焰の中から現れたその姿は総じて白く、その姿は精霊に限りなく近い人族と成り果てていた。11本完全に生え揃った角は正に完全体なる人族そのものであるが、魔族や精霊に見られる、気味の悪い白い肌で、それは最早この世のものではなかった。



気を失った明月に代りその体を依り代にして炎の精霊王・永恆がその場全てを破壊し尽くした。帝都・長海は大きな炎の渦に包まれ、削り取られるかのように跡形もなく焼き尽くされた。何も無かったかのように、何もかもが消え失せた長海は、そこに二振りの剣と、明月という白い不気味な体躯のみが在った。

ラフレッシュとレヴェイエの対話

一人でシルベストルの神殿へ

「そこで何をしている！」

不審者に気付いた衛兵が槍を構える

「お話をしに来ただけよ」

「お前のような怪しい者が出入りする場所では無い！立ち去れ！」

「貴方こそ、邪魔だからあっちへお行き。どうせそれ以上はこちらへ来れないのでしょうか？」

神殿には大広間があり、その奥には大きな扉が有る。

開かずの扉。

何人たりともその奥には入れず、その扉を開ける術は無い。

人は、シルベストルの神官のみが、その扉の前まで来る事が許された。

神殿には結界が有り、聖導の力の弱い者は弾かれる。

高位の聖導法師のみが神殿の大広間より奥に踏み入れる事が出来た。

奥の扉が静かに開く...

「一体何事だ」

シルベストルの大神官が騒ぎを聞きつけて現れる

その目の前で、大神官すら見た事も無い光景が広がる。

「おお・・・おお...、馬鹿な、扉が・・・どういう事だ!？」

「・・・」

扉はレヴェイエが中に入ると静かに閉まる。

対話

レヴェイエが出ると、大神殿には騒ぎを聞きつけて皆が集まっていた。

「不思議なものね...。確かに法師が多い。」

大神殿に入れるほどの、強力な大聖導法師が3人。

シルベストル大神官、ヴィリンクトの武帝エイル、そしてロラン。

「エイル様、あの者は一体何者なのですか？」

「さあ？本人に聞かれるとよろしいのでは？」

『さあ？気にしなくて良いわ。心話は出来るでしょう？』

「なんと!？」

『レーヴ、一体何をしていたの?』

「そこの小僧にも出来るのか!？」

『ロランを悪く言わないで!』

『失礼をお許し下さい、レヴェイエ様。しかしその神殿、奥には何が在ると言うのです？』

『ここはラフレシールが居るの。あの子はここで眠っている』

『ば、馬鹿な！始祖王は凍眠されておいでなのか？そんな話は...』

『違うわ...んもう、面倒くさい...』

レヴェイエがそう言いながら皆を躲して神殿を出ていく。

外には神殿に入れなかった者達が大勢集まっていた。

『随分賑やかな事ね...』

「仮面の奴、お前は何者だ！？」

『はあ...。揃いも揃って同じ事を...。ロラン、面倒くさいわ...』

「決して怪しい者では有りません、どうか...」

『そんな説明では誰も納得いたしませんよ、ロラン殿』

『...。マージ皇太子ガルム...か。』

「な、なんだ...！？声が...女の声が！？ラフレシール様の声なのか！？」

『違うわ。目の前にいる私よ。我が名はレヴェイエ。ラフレシールと同じ。皆が混乱するから、貴方に直接話すわ』

レヴェイエの声は今、ガルムにしか聞こえなかった。

「レーヴ？話しているの？」

ロランの問いにレヴェイエは無言で頷いた。

「エイン様、聞こえますかな？わたくしめには...未熟ながら...」

「ロラン殿にも聞こえておりません。直接交信されておいでなのでしょう。それほどまでにこの方の力は強いのです...」

『貴方の愛する師、ベルナディス侯爵が先の戦いで亡くなられたそうね』

「...」

『誰に殺されたのか、ご存知？』

「貴様、何が言いたい！」

『ベルナディスはラフレシールの子孫とされる騎士なのでしょう？ラフレシールに愛された騎士・ベルナディスは、先の戦いで相打ち倒れた』

「黙れ！貴様が誰かは知らん！しかし、俺の敬愛する師匠を愚弄する事だけは断じて許さんぞ！！」

『落ち着きなさいな、何も愚弄する気は無いわ』

「...」

『ラフレシールは先の戦いの折り、アニスの王を守る為に、自分が最も信頼する騎士をそこに遣わしたの。最も信頼し、最も愛した...』

「そうさ、リュヌ家の騎士は始祖王・ラフレシール様に愛された...」

『...違う』

「なに！？」

『彼はラフレシールと共に在る為にアニスの地下で眠っていたのよ。そしていつもラフレシール

の近くで、彼女の声を、彼女の詩を聞いていたの。まるで赤子が母の腹の中で眠るように...』

「何の事を言っているんだ、貴様は」

『その名は、ルー・ヴァンクール・ホリゾン。ニヴァールという国を建国した人だそうよ』

「なに！？・・・それでは、・・・ニヴァールが先の戦いで裏切ったのは...」

『ラフレッシュルはね、愛する騎士を愛する子孫に殺し合わせてしまった事を嘆いているの。解るかしら？・・・いつも傍にいて、いつも一緒にいてくれた彼を、彼女は自らのせいで失ってしまったの。私がおこへ来たのは、この国に来てからずっと彼女の悲しみが聞こえたからよ』

「きさ...お前は一体何者なんだ？何故、そんな事を...」

『言ったでしょう？わたしはラフレッシュルと同じ。あなた達が思っているのとは違う。ラフレッシュルは今も生きているのよ』

「なんだって！？馬鹿な・・・始祖王が・・・そんな」

『もう一つ、これはみんなに言うておくわ』

レヴェイエの声が皆に響く。

『ラフレッシュルは子を生まない』

レヴェイエが静かに振り返り、後ろにいたシルベストル卿を見て言う。

『リュヌ家はラフレッシュルの子孫だというそうね。けれど、私たちは子を生まないのよ。これで少しは私たちが何者であるか、見当は付くかしら』

「ま、まさか・・・そんな」

『でもね、安心して。ラフレッシュルはそれでもあなた達を愛している。いつも大切にしてくれるって。とても愛しているわ。だからどうか、繋がりなどなくても、ラフレッシュルを忘れないでいて。いつまでも、ずっと覚えていて。そのリュヌの血統のように、いつまでも絶やす事なく、ラフレッシュルを見守ってあげて...』

その場にいる、ロラン以外の全員がレヴェイエに伏せた。

「・・・。やめて。そう言うのは好きではないの...。ロラン・・・」

「解っているよ。だから僕は膝を突かないだろ？さあ、皆さんも立って下さい」

『ふふ、ありがとう。大好きよ、ロラン』

「さ、次に行きましょう」

「次？」

「フルクレスト大陸に向かうの。船に乗って行けるでしょう？」

「フルクレスト？も、戻るのか？」

「ううん、違うの。火天に行くのよ。シンウが呼んでいるの」

「シンウ？火天？・・・それは誰？レーヴは火天に知り合いが居るの？」

「さあ？知らないわ。だから会いに行くんじゃない。シンウが私を呼ぶの。私が行かなきゃ行けないんだって。私に会いたい人がいて、私も会いたいと思う人が火天で待っているそうよ」

アニス・キーオン公国の黒塔から出立した一行はそのまま西へ、国境を越えてフェネル王国に入る。ノーザングレーの港町から一旦経済都市のレイへ行き、そこからフルクレスト大陸の火天という連邦国に向かう事となった。

港町を治めるのはフェネル国貴族、コルド伯爵家。現国王妃の姉に当たるシレーネ伯は前大戦時に元帥として国内屈指の騎士として名を馳せた実力者であったが、今は騎士業を廃業し、己が自治領で結婚も為らず後生を過ごしていた。

「寂れた町だな。活気のある港町じゃなかったのか？軍縮政策、経済発展都市と名高いフェネルの港町と言っても片田舎じゃこんなものか。これならカノンの方がよっぽどマシだ」

「挑発的な発言は慎んだ方がよいよ、エティー。僕らは旅人なんだ」

「うるさいねえ、解ってるよ！だけどもさ...」

「すまんな、ミヤビ。私がかつて訪れた時はもう少し活気があって賑やかな町だったのだ。昨日それをエティエンヌに話して聞かせたばかりだった。それを言いたいのだろう、エティエンヌは」

「聞いた話と全然違うじゃないか」

「左様でございましたか。...しかし、今何か騒ぎを起こすべきでは無いと思ひまして。我々の一行も人数が増えてきました。他の皆様に迷惑がかからなければ良いのですが」

「うむ、流石ミヤビだ。よく行き届いた配慮、誠に素晴らしいぞ」

「有り難きお言葉...」

「なーにが配慮だ、くだらん」

「エティー」

「止めぬか、エティエンヌ」

「はいはい、わかった、わかった。...ったく。私は気晴らしに海でも見て風に当たってくるとするよ。父上とミヤビは仲良く散歩でもしてな」

「あ、ちょっと！待って下さい！単独行動は控えろと...」

「良い、私が責任を取ろう。今は一人にさせてやれ。あれはいつもストレスがたまると潮風に当たりにいく。慣れない旅で疲れておるのだろう」

「これが《囁く海》か...」

フルクレリア大陸の北に広がる海は《囁き》と呼ばれ、南の《嗤い》と同じく、広大な海原が広がる。それはカノン王国が臨む《別れ海峡》とは違い、どこまでもどこまでも続く、果てしなき水平線が眼前に大きく広がるのみの、エティエンヌにとってはどこか寂しい景観だった。

「不毛な海だな...。まるで何も無い。空っぽだ」

エティエンヌは浜辺に立ち尽くして水平線を眺めた。穏やかに佇むそこに吹き抜ける風は無か



った。

「この国を象徴しているだろう？この国にはもう、何の希望も無い空っぽなのさ」

「誰だ！？」

エティエンヌの背後に一人の女がいた。頭以外全てを隠す黒い外套を纏った中年の女は気配を悟られる事なくエティエンヌの傍まで来ていた。エティエンヌは剣を抜いて構えた。

「似ているな…。お前はカノンの者か？カノン王国のロワール卿を知っているか？」

「……………」

「警戒せずとも、私は何もお前を害したりはせん。ほれ、このとおりだ」

(何だこいつ、両目と両腕が無い…)

「昔、カノン王国にロワール卿という騎士がおってな。それはそれは勇敢で誠実な騎士だった。お前と同じように大陸南部に見られる薄紫の髪だ。今も生きておるのかは知らぬが、あの大战を生き延びたとは聞いている」

「……………」

「お前はまるであの頃のロワール卿にそっくりだ。いや、性格はまるで対照的だったが。彼は冷静で礼儀正しい、騎士の鑑のような奴だった」

「ちえ、あんなのと一緒にされたくないわ。私は父上ほど頑固じゃない」

「そうか…、やはり息子だったか」

「ああ、そうだ。息子と言う名の娘で悪かったな！名前だけは息子だよ」

「…ふ、あっはっははは…」

「何がおかしい！私が女である事を愚弄するか！」

「いや、すまん。そうだったな、忘れていた。ロワール卿は娘を息子のように可愛がっていると、…そう言えば昔聞いていたよ。そうか、その娘が大きくなって…。なるほど、似ているわけだ。」

「似てないわ！」

「ふふ、違うよ。そうではない。私が似ていると言うのはお前たち親子共々さ。…久しいなロワール卿…、オリヴィエ殿」

「お懐かしゅうございます、シレーネ殿」

「父上…。って、こいつがコルド伯爵う？」

「エティー様！！」

「…………。我が不肖な娘をお許し下され…」

「構わん。それにもう、私は伯爵じゃない」

「なんと！…やはり、あの時の」

「いや、つい最近までは伯爵だったよ。爵位を返上したのはつい先日の事だ。貴族である事に疲れ、この国を憂いで居るのだよ。今はただ魔導の研究でもしながら後生を過ごすまでさ。この身独りだけが生き長らえてしまったよ、…オリヴィエ殿…………」

「心中、お察ししますぞ。誠に残念な事でした。私の力が至らず…」

「良いのだ、始めから覚悟はしていた。それにお主の所為でも無いだろう。戦場は違ったのだ

から」

「ええ、お互い違う場所へ配属された、その後の訃報でした...」

「さっきから何の話をしてるんだ？」

「私にも...さっぱり。大戦時、お二人は戦列を共にされたのですか」

「おお、そうだったな。ついつい年寄りの黄昏が過ぎたわ。オリヴィエ殿、お二方も、今夜泊まる宛はあるのか」

「生憎、この町には今し方着いたばかりでしてな...」

「然らば調度良い。此処で立ち話に黄昏て花を咲かすも良いが、...今夜は我が館へお招きしても？」

「それは忝ない。お言葉に甘えさせて頂こう」

「積もる話もそちらにて」

「...辛い話では、ありませぬかな？」

「独りで悶々としているよりも、誰かに話を聞いてもらうだけで気が晴れると言うものよ...。久しぶりに過去に向き合うてみたくなりました。お相手に所望したき所存と言うのが本音かも知れませぬ」

その晩、三人はコルド邸へ招かれた。夕食を済ませた微睡み刻、シレーネは静かに話し始める。

アシュリアンの出陣が決まった。

聖導騎士団は通商港の守衛を主な任務とする。熾烈な戦場に出るような訓練などしていない。言ってしまうえば個の群れに等しい騎士団だ。その中でも特に腕の立つアシュリアンが信頼され、その人望も有って統率のとれた軍隊として機能している面も否めなかつただろう。とはいえ、集団戦においての経験値はほぼ無いといえる。

出陣する先でも大規模な集団戦はないであろう。アニスは強国だが個々の力に拠る所が大きく、実際に大規模な騎士団はたった一つしか持たない国だ。しかし一人一人が一騎当千の兵ばかり。数で攻めるとしても、強大な個に対する郡の力はその数に依る連携こそが重要な要素を占める。残念がら聖導騎士団にそうした戦術が出来るとは思えない。頼みの綱はアシュリアンの力量。我が国においても、他国の騎士と比べても、弱くは無いだろう。その名を世に知らしめるフェネルの将軍だ。しかし、相手がアニスの騎士となると、比べれば実力の差は歴然。私やアシュリアンなど、アニスの精鋭に比べたら中の上も良い所、まともに相対して勝てるような気がしない。そのアニスの精鋭が助けを求めているというのだから、一体今のアニスはどんな化け物が居ると言うのか...

そんな化け物共の中にアシュリアンを放り込むと言うのだ、この国は。確かにこの国で他国に貸せる軍隊など聖導騎士団において他にはない。港の守衛や都の治安は我等だけでも充分補える。

北のオブライエン卿を都に招集したのもその為だろう。国王の考えることは解せぬ。

「王子様の見送りがあるとは聞いてないな。一人か？」

王都追放を受けて私が下洛する朝、都の外でケヴィンが私を待ちかまえていた。

「ああ、...独断だ、気にするな。俺一人で来た」

「王都の外れで帯刀もしないとは、従順な王子様だな、ケヴィン。元帥が一人減る。お前が剣を握って私の後釜を継いでくれれば何よりだが、それも適わぬか。二人で競って鍛練に励んだあの頃が嘘のようだ。...なあ、ケヴィン。私は何の為にここにいたのだろうな」

「不甲斐ない俺を笑えシレーネ。件の出陣には選択肢など無かった。俺は今回、己の弱さにつくづく嫌気が差したよ」

「これでは余りにもシルヴィア様が不敏でならぬ。どうせ騎士など煙たい存在なのだろう。ならば私やオブライエン卿に命じれば良いでは無いか...」

「ヴァリアントは軍隊の参加を要請してきたのだ。個としての戦力では無く、郡としての戦力を欲しているのだ」

「馬鹿め...、判らぬのか！」

「解っているさ。ヴァリアントはこれを利用して各国の軍事力を測るつもりだ。しかしフェネルは軍事国家では無い。形式だけでも、要請には応えねばならぬ。戦況は思わしくないのだろう。...この期に及んでこのまま中立を貫いたら、中部壊滅のような事態にもなりかねん。中立を決めていた常磐、来聖、そしてあの神音さえも参戦に応じたのだ」

「あれは国の存亡が懸かっていたからだろう！フェネルのケースとは違う」

「確かに。来聖は滅亡寸前まで追い込まれ、常磐が総力を持って立ち上がった。しかしそれでも神音は動こうとしなかった」

「ウィリンドの武帝が目覚めたそうだな」

「ああ、ウィリンドはセイレーンの魔女に警戒して身動きが取れなかった。武帝の覚醒と、ウィンディア休戦協定には誰もが驚いた。神音はウィンディアに動かされたのも確かだ。そのウィンディアがヴァリアントと共に我が国への参戦を要請してきたのだ。...もはや、選択の余地もあるまい」

「くそっ...！」

「王が倒れられ、シルヴィアも伏せている。俺はこの国を、この大地を守りたいのだ」

「解っている！」

「シルヴィアには、何と言って顔を合わせればいいのか、...俺には分らない。王やケイトだけでなく、俺も憎まれてしまった。しかし、俺は間違っていないと、自分を信じるしかない」

「解っている！」

「すまない、シレーネ...。こんな事を言い合えるのも、俺には君しかいないんだ。本来なら俺自身が出陣すべき所だろうが、元老院が言うことを聞かぬ」

「.....」

「お前には本当にすまないと思っている。…俺にはケイトが解せない。しかし王はケイトを聡明な妃だと言う…。俺は愚かなのだろうか。俺は…」

「自分の信じた道を進めば良いさ。もう、私はお前を守る事は出来ぬ。こんな愚痴を聞くのもこれが最後だケヴィン。シルヴィア様を、頼む」

「すまない…。お前の処遇は何としても俺が守ってみせる！シルヴィアには…、兄として出来る限りの努力すると約束しよう」

「私の事などどうなっても構わん。…じゃあ、私は行くよ」

シルヴィア様がアシュリアンを愛していることは国民の誰もが知る所だった。侯爵家ナーダの当主ではあるが、騎士の家に娘を嫁がせる気など王には端から無かったのだろう。アシュリアンの出陣を決めたのは王子であるケビンだが、その報告を受けた時の王の顔は理不尽に歪むでも無く、まるで喜ぶのを堪えて平静を装う者の安堵にも見えた。アシュリアンの話をすると王の機嫌が悪くなるとシルヴィア様はよくおっしゃられていた。シルヴィア様も立派になられた。剣や槍、弓を覚えては私の所へ来たものだ。生まれながらに恵まれた騎士ではないが、何もしないで怯え続けるような女子ではない。私もそんなシルヴィア様を愛おしく感じていた。

私には妹がいる。ケイトは私と違って騎士を嫌っていた。血生臭い戦場よりも、優雅できらびやかな貴族社会を愛する馬鹿だが、そんな所が王にも気に入られたのであろう。ケヴィンの妃として選ばれ、ぬくぬくと宮廷生活を満喫している。王では無いが、ケイトは姉妹と思えぬほど、私とは真逆の女だった。シルヴィア様もそんなケイトが好きになれないようで、ケヴィンを困らせている。良い様だ。私は子を孕み血を遺す為だけの女にはならん。怯えて何も出来ないまま、されるが俥に死ぬような愚かな女には…。

「そんな所が好き。お姉さまはカッコいいわ。私の最も憧れる騎士」

「勿体無きお言葉…、シレーネ誠に嬉しゅうございます」

「んもう、二人きりなんだから畏まらないで」

「二人きりであっても、常日ごろからこうしておかねば、そのうち公にボロが出てしまいます…、何卒、ご理解を給われませ」

「ふふ…、そうね、お姉さまは社交が苦手だもんね。私もついつい「お姉さま」と呼びそうになってしまうわ」

「なんと！…シルヴィア様、それはどうかお気をつけ下さいませ」

「あはは…、でないとしレーネが怒られちゃうもんね、…お姉さま」

「どうなさいました？」

「ううん、…」

「シルヴィア様？」

「もう少しこうしてきたい」

「あまり私に抱きつくと、シルヴィア様のお召し物が汚れてしまいますわ…。さ、どうか」

「もう少しこうしてきたいの！お姉さまの匂いを感じてきたいの」

「…困ったお方だ」

「ねえ、お姉さま」

「ふふ...、なあに？」

「アシュリアン様は私の事をどう思っておいでなのでしょう」

「あれは真面目な騎士ですから...、そうそう簡単には振り向いては下さいますまいな」

「どうしたらアシュリアン様と好き同士になれるのか...、毎日そんな事ばかり考えてしまいます。邪念だと判っているのよ。身分なんて関係なく、一緒にいられたら...。騎士団の方々が一緒に談笑されているのを見ると、羨ましくて」

「報われぬ恋は辛いですよ、シルヴィア様」

「.....。シルヴィアで良い。二人きりの時は、お姉さまになって、シレーネ」

「御意のままに。...シルヴィア」

「うん。...シレーネがお兄さまのお妃様になれば良かったのに。そうすれば心置きなく「お姉さま」ってお呼び出来る」

「そうね、仕方がないわ。王は騎士である私を疎んじておいででしょうから」

「私！お父様なんてだいきらい！」

「こ、声が大きいですわ、シルヴィア様」

「私ね、お姉さまみたいに強くて立派な騎士になる。そして、いつかアシュリアン様と一緒に、アシュリアン様のお側で剣や弓を使うの。アシュリアン様をお助けするの」

「まあ！素敵ねえ。...でも、まだまだね。そんな腕じゃアシュリアンを守るどころか、足手まといになってしまうわ。恋する心を忠義の剣に込めねば...って、でも立場が逆よね」

「お姉さまはそうやってお強くなられたの？」

「そうねえ、私は...」

「今でもお兄さまの事、好き？」

「ば、馬鹿ねえ、何を言うのよ、この子は...」

「隠さないで、教えて。本当はどう思っているの？私はお姉さまの味方よ。誰にも言わないから」

「もし、...」

「もし？」

「もし、ケヴィンが王子じゃなかったら、...ケヴィンが騎士だったら、私はケヴィンの側でケヴィンの為に尽くしていたわ。それは今でも、死ぬまで変わらない。私の槍はケヴィンを守る為に有る。私はケヴィンの為に槍を振るうの」

「はあ〜...」

「シルヴィア？」

「素敵！お姉さま、素敵だわ！私もそうなる！もっともっと弓を勉強して、剣も練習して、アシュリアン様と共に在りたい！」

「ふう。...一国のお姫さまが言う台詞じゃないわね」

「じゃあ姫なんてやめてやるもん！私、お姉さまの妹でもケイト様が嫌い！あんな女にはなりたくないもん。だいきらいよ、あんな女」

「同感だわ。ケイトとシルヴィアが逆だったら、私にとってこんなに可愛い妹もいなかったでし

ようね」

「本当？嘘じゃない？」

「ええ、貴女は私にとって誰よりも愛おしい妹だわ。ほらっ」

「いやん、うふふ…。嬉しい。私も、お姉さまが好き。誰よりもお姉さまが好き」

「アシュリアンよりも？」

「へ？ち、違う、アシュリアン様は別。だって男の人と女の人では違うでしょう？アシュリアン様とお姉さまに優劣はないわ」

「そうね。ふふ、ありがと」

アシュリアンの出陣には元帥位三人の賛同が必要だった。私は元帥として騎士団に出陣命令を出さねばならなかった。正直悩んだ。しかし、王女1人と国民全て、国の平和を両天秤にかけるなど、元帥位に就く私がすべきことでは無い。シルヴィア様の胸中を察すると、私は思考が止まってしまいそうになった。『何も死にに行くわけではない』『出陣するだけだ。彼が戻らぬと決まったわけではない』何度も、何度も自分に言い聞かせた。

我がフェネルの参戦はフルクレリアの国として、恐らく最も遅いものになるだろう。出陣する騎士団が丁重に扱われるなど恐らくは無い。最も過酷な戦場に派遣される懸念もある。

「この出陣は捨て石と見るべきだ。あきらめろ。仮に生きて戻ってこられても、...余り体裁のよい話ではあるまい」

「フェネルは其れなりの覚悟で遅参為ねばならない。未来の安寧を得る為の人柱になってもらう為の出陣だ。コルド卿、私情を挟んではなりませんぞ」

決断を鈍らせた私にケリーとオブライエンが釘を刺す。それでも私は一晩悩んだ。

国を守る為に無駄死にをしに行けと言うのか。

自国でもない、外国の地で、ただ死にに行く為だけの兵士たちを作り上げて送り込めと言うのか！

それが国を守る元帥の、下さねばならぬ決断か！これではまるで生け贄ではないか！

こんな事が、こんな事を許して、許されて人族は魔族を斬れるのか。私は狂いそうになった。善悪とは何だ。何が悪で、何が善なのだ。

私は調印出来なかった。ケリーやオブライエンには怒鳴られもした。王の冷ややかな目が私を睨んだ。伯爵号を失っても、これに調印する事など、私には出来なかった。私は爵位と元帥の官位を返上してでも拒もうと考えた。しかし、それは単にアシュリアンの出陣に対する責任から逃れたいだけの行動でしかない。

「コルド家はフェネルに弓を引く愚か者か！」

「これは謀反に値する重罪だ。アニスに流されたいか！」

「貴方はフェネルが滅びてもアシュリアン一人を生かしておきたいとお考えか」

「これだから女は大局を見れぬと言うのだ。やはり女に元帥など勤まらぬわ」

元老院が口々に私を罵倒した。私がコルド宗家の家長であるが故、私の罪はコルド家全てに関

わる。王子妃とはいえケイトの立場も悪くなるだろう。

「私がコルド家を代表して調印しましょう。姉はお疲れのようです。暫く北で休まれるとよろしいかと...」

「な、ケイト!？」

「ケイト様とお呼びなさい、シレーネコルド。貴方は狂って居られる。元帥に代り王子妃として、コルド家の総意を此処に調印したい所存。国王陛下のお許しあらば、...是非に」

王に対するケイトの懇願が即座に受け入れられる事は火を見るよりも明らかだった。私はその場で王都への上洛を無期限で禁じられ、官位、爵位は保留とされたが事実上の謹慎処分を言い渡された。シルヴィア様へのお目通りも適わず、私は王都を後にした。

私はコルド自治領、ノーザングレーへ戻った。私の自治領であるが、この町の警備はオブライエン卿の任務。当然、オブライエンは私の監視を言い渡されていた。

「私には理解出来ません。なぜ頑なにあそこまで拒まれたのです、シレーネ殿」

「言うな、もう、何も考えたくは無い」

「しかし! 現実に貴女の諸行が今、民を苦しめておるのですぞ! 領主としてそれは恥ずべきだ」

「黙れ、オブライエン! 生け贄を捧げてまで助かろうとするその考え方が私には魔族にも劣る行為だとしか思えんのだ。そうまでして生き延びたいのか。そうまでして繁栄したいのか。お前は自分が生きる為なら己の妻でも平気で殺せるのか」

「それは綺麗事です! 何千もの民を生かし、民に安らげる国を作り、それを守るのが騎士です。その為の犠牲ならば、騎士として本望では無いか。アシュリアン卿もそれを解って受諾された。貴女は元帥であり、騎士でありましょう! なぜ大局を見失うのです」

「お前は騎士の鑑だな...。立派な事だ」

「貴女は変わられてしまったようだ。元帥になられた頃の貴女ならばそのようなことを考えもしなかつたらう。一体、何があったと言うんです」

「私はただ、ケヴィンを守りたかった。ただ、シルヴィア様を...」

「噂は本当なのですか」

「何の話だ」

「シルヴィア様を惑わせ、アシュリアン卿との縁結びを買っている。だから王から疎まれた貴女は王都から追い出された...と、王都の民が噂しております」

「くだらん! 確かに半分は事実かも知れないが、私は断じてシルヴィア様を惑わすなどと...」

「シルヴィア様が貴女の事を「お姉さま」と呼ぶそうですよ。王宮では「シレーネに懐柔された」と騒いでおります。姫さまが哀れだと、シレーネ様を討つべきだとも...」

「討つか? 今、ここで」

「.....」

「殺したくば殺せ...、何とでも言い、どうにでもするが良い」

「事実は存じません。私は噂話など信じる気はない。ただ、先日ケヴィン様よりお聞きした話で

すが、シルヴィア様がケイト様に剣を向けられたそうです。ケイト様はシレーネ様がシルヴィア様を操っている、シルヴィア様はシレーネ様に騙されているのだとおっしゃられているそうです。ケイト様はシレーネ様を討つべきだと躍起され、ケヴィン様がそれを諫めておられる。ケリー卿は令があるまでは動きません。しかし、あれば即座に動く方です。私は貴女を討ちたくは無い。せめて反論なさいませ、シレーネ様」

「好きにすれば良い。騎士は号令に従わねば成らん。もしそうなれば、私を討ちに来い、オブライエン」

「シレーネ様！」

「オブライエン、...もし、もしアシュリアンに会う事があれば、伝令を頼まれてはくれぬか」

「内容によります」

「生きて戻れと。必ず生きてシルヴィア様の許に戻れと伝えてくれ」

「・・・」

「嫌か...。まあ良い。お前はお前の好きにすれば良い。私を討てと命じられたなら、いつでも討ちに来い」

オブライエンとは王都で肩を並べる元帥同士であるが、ここでは領主と領内警備騎士、私の立場が上になる。騎士として下に従わせるアシュリアンの家柄はナーダ侯爵家。私のコルド家よりも高い地位にある。

この国は歪んでいる。家柄の持つ地位と、騎士としての地位が分裂していて、それを是正しようともしない。また元帥に就くケリー、オブライエンは二人とも平民出身で貴族の地位としては騎士の称号のみしか持っていない。軍事、警備における最高権力者が平民である事は、元老院にとって都合が良く、使い捨ての駒のようなものだろう。騎士としてこの国に仕えると言う事は、元老院にも仕えると言う事。ナーダ家は勲功貴族。代々にその名を残してきた名門騎士侯爵で、軍事にも政治も関わってきた名家だが、軍縮政策によってその権威は衰えた。本来であれば4人の元帥が存在し、アシュリアンの父、ティエリアン様が亡くなられて以来空席と成っている末席にその息子、アシュリアンが就いても不思議では無い。ナーダ家は謀られている。ナーダ家は長く歴代の王から信頼され、誠実で忠実を貫いてきた為、王都より東に広大な領地を授かっている。元々貴族であった諸侯から疎まれていてもおかしくは無い。先代ティエリアン様の死も明らかに仕組まれたものだった。若きアシュリアンを公爵とし、意のままに操り、そして子を授かる前に死地へ赴かせ、...生きて帰ってきても生き恥として何らかの処分を検討している事だろう。そのアシュリアンが王女であるシルヴィア様に見初められてしまったのだから元老院も黙ってはいられなかったのだろう。

ただそれを分っていた所で、伯爵である私に出来る事など無い。せめてシルヴィア様がアシュリアン、及びナーダ家にとって救いに成ればと思ったが、だからと言って私がシルヴィア様を嫉けたわけでは無い。シルヴィア様ご自身がアシュリアンを愛して仕舞われたのだ。適わぬ恋だと言うのに。いや、女は適わぬ恋だからこそ、一層燃えるのだが...、相手が悪すぎたとしか言い様が無い。

騎士団の出陣式を明日に控え、町は閑散としていた。民の多くは首都・フェネルでの式典で、一目ナーダ候を見ようと集まっている。吟遊詩人は王女との恋仲を歌い、英雄の誕生と美しい姫君の恋物語で糧を得ていた。王都に至る宿町の酒場では夜な夜なそんな酒盛りに花を咲かせては夢を見て浮かれる。社会の実態とはそんなものだろう。誰も真実など知る由も無いのだから...そんな茶番を尻目に、私は首都より東に位置するナーダ領を訪れていた。数ある貴族の中でも特に広大な私有地を持つナーダの現当主・アシュリアンに跡取りは居ない。

「ようこそお出で下さいました、シレーネ様」

「非礼を詫びる、ジュード」

正式な訪問では無い。私は隠密に市民を装って徒歩でここまで来た。アマーピアスにここまで送り届けてもらうには目立ち過ぎる。

「いいえ、そもそも謹慎中のシレーネ様を隠密にお呼び立て申したのはこの私...。ご無事で何よりで御座います」

「それで、用とは一体...」

「お時間少々頂けますかな。・・・こちらへ」

案内されたのは大館ではなく、更に東の海岸近く。そこは代々の当主が眠る霊廟であった。

「こちらで御座います...」

奥に祀られていたのは一振りの石剣だった。

「伝家の宝剣と言うわけか。しかしナーダにそんな物が在ったなどと言う話は聞いた事がないぞ」

「左様で御座いましょう...。これは歴史に隠された嘆きの剣で御座います」

「嘆きの剣？」

「ナーダ家はその武勇によって地位を築き上げた豪貴族。八代目ヘイデン・レジス・ナーダ様が一代をかけて作り上げた、ナーダ家の宝剣にすべく霊剣であります。今風に言えば聖剣と言いますか...」

「精霊樹による錬成加工が施されているのか」

「左様。勝利の木、イニスの燐剣。その名を伝統の怒りと名付けられました。トラディショナルレイジ。そう、トラディションだったのです」

「だった？」

「所詮は怒りに任せた伝統の復讐剣という所でしょう。その名の通り、ヘイデン様はアニスのレジス大公家からこの地へ来ました。...いや、この地に捨てられたので御座います。レジスは代々女流の家系。長子であっても男児の血は遺さぬ家柄。それに逆らって妹姫を手にかけてヘイデン様は国外追放。ノーザングレーで我がナーダの姫君と出会い、八代目となられた。初めはアニスの血を得る事でナーダ家に武門としての力が一層増すであろうと受け入れられていたそうです。しかし腐ってもアニスの貴族。その血には魔瘴が宿るのです。聖剣レイジは代を重ねて悲劇を齎します。そして遂にレジス・ナーダの血統は潰えました。ヘイデン様より三代に渡り、数々の悲

劇を齎したこの剣は、十一代目ジョザイア様の自害により、レジス・ナーダ家は滅亡し、その主権をレジスの血に染まっていない純潔のナーダ家に託されたのです。ジョザイア様はレジスの血統を持つ全ての血縁者をこの刃にかけ、自らの死を以て滅亡を宣言しました。剣と共に眠るこの遺言状にはその経緯と事実の隠蔽、そして剣の封印が認められておりました」

「さて、今のアシュリアンは、何代目だ」

「二三代目になります。...そうです。ヘイデン様から数えてもナーダ家は一五代。現在一六代目となる我がフェネルの王家よりも古い。この国が出来るずっと前からナーダ家はあったのです。この事はジョザイア様によって隠蔽され、表向きはアシュリアン様で一二代目となっております」

「まさか、ナーダ家というのは...」

「お気づきになっても口に出しては成りませぬぞ、シレーネ様。それがフェネルの歩みで御座いましょう。この聖剣・トラディショナルレイジ、ジョザイア様以降の代からは魔剣・レイジオヴトラジェディと呼ばれております」

「ジュード、私にそれを見せ、ここへ連れてきた理由は何だ。まさかお前、その剣を...」

「滅相も御座いません。唯でさえ死に行かれるというのに、わざわざこんな物まで用意しようなどとは思いません」

「では一体、私にどうしろと言うのか」

「コルド宗家はナーダの分家。長子継承を貫いて来られたコルドの家長、シレーネ様。私はアシュリアン様のお側に貴方を迎えたかったので御座います。どこの馬の骨とも知れぬ平民がサファイアを名乗り君臨する彼の娘よりも、です」

「私に今からアシュリアンと交われと...、子を成せというのか」

「それもこの老いぼれの夢、泡沫と消えましたわ...」

「・・・」

「コルドの血を遺し、サファイアはこのナーダの血を薄く受け継ぐ家系となりましょう。あとは我が宗家を亡き者とし、貴方が子を成さぬまま御往きに成られれば、サファイアは安泰...。フェネルは名実ともに一八代目でようやく王を迎えるのです。...誰が考えましたか、お分かりか」

「・・・元老院か！」

「元老院はナーダがサファイアである事をどこで知り得たかは存じません。ですが、いずれアシュリアン様が失われれば、この土地は没収され、この霊廟も、魔剣も、...隠蔽してきた真実も全て、失われる事と成りましょう。ナーダ家など存在しなかったと、跡形も無く失われる」

「私が子を成さず、コルド宗家が滅びれば、結果は同じではないか。私は...」

「・・・」

「お前、まさか・・・」

「アシュリアン様が戻られなければ、この積年の恨み、ティエリアン様の代から仕えてきたこの老いぼれとて、老獺なる騎士と成りましょう。我がナーダの魔剣、ナーダの歴史はフェネルと共に...！...左様、良いご判断です。お収め下さい、年甲斐も無く少しばかり頭に血が上りましたか...」

「フェネルは変わらねば成らぬ。サファイアなど捨て置いても既に滅びておるのかも知れぬぞ」

「ぬう...？」

「無駄に命を散らすでない。討つべきは元老院であろう。ブライスが抱えるケリー卿は強い。我がコルドのオブライエン卿もクラークに懐柔されつつある。正面から討って出た所で太刀打ち出来る相手では無い」

「それは解っております。ですが、何もしないまま、ただこのまま黙ってナーダが滅びるのを見ては居れません」

「・・・」

「サファイアを庇い立てたいお気持ちは解っております。貴方がアシュリアン様の出陣に反対為されていたのは、シルヴィア様を想っての事でありましょう。だからこそ、私は貴方にナーダの真実を伝えておきたかったのです！我がナーダの為に、真実を残す為に、どうか、シレーネ様！」

「私に...、子を遺せと、言いたいのか。私に、母になれと...」

「アシュリアン様には従兄弟が居ります。ブライアン様は盲目で体が弱く、病に伏せておりますが...」

「断る！私は子を生む為の道具では無い！血を遺す為だけの道具には成らぬわ！以前にもブライアン殿との婚姻話を持ちかけた者がいたが、そう言う意味であったか！」

「お、お待ち下さい！シレーネ様！どうか...」

「断じて私は道具には成らん！滅びもまた世の道理。私は私の代でコルドを終わらせる事しか考えては居らん！然らばだジュード。もう会う事は無いだろう」

私はそのままナーダ領を後にした。ノーザングレーを空けていた私はオブライエンに何か責められるだろうと思ったが、奴は何も言わず、何も責めてこなかった。

「その後だ。ブラッディヴァレイで陣を布くアシュリアンを尋ねようとしてお主に会ったのは」

「そうでしたか...。いや、国の事情は色々と複雑ですからな。我がカノンもまた似たようなもので、小規模ながら混乱の渦中でありました...」

夜遅くまで続く黄昏時に、昔を懐かしむオリヴィエとシレーネの二人は時を忘れて過去に浸る。

同行している筈だった王子一行だったが、出港を数日遅らせていた。先にノーザングレーに辿り着いたキースとアイン、ロラン、アイファーに加えてオリヴィエ、エティエンヌ、ミヤビの七人は本来、伯爵邸を尋ねて後続を待つ手筈であったが、オリヴィエは昔のままシレーネがこの地の伯爵であると思い込んでいた為、その伝手を頼りにしていた宛が外れ、一行はアインの計らいで別行動となった。今ごろは後続の夏風、霧衣、アリオナらがアニスのクリスティ卿と合流して現伯爵邸に着いている頃だろう。

伯爵邸とは異なり、見窄らしいながらも民家に比べれば幾分か貴族の邸宅らしい造りのコルド邸では、話を退屈に聞いていたエティエンヌがテラスに出て行った為、ミヤビと共に席を外していた。

そんな二人を尻目に、二人の思い出話はオリヴィエの見た戦場が舞台となっていく。シレーネとしても戦場でのアシュリアンは気になる所、オリヴィエの話に引き込まれて行った。

「彼は騎士として、本当に見習う事の多きお方だった。国に対する忠義の心、部下を思う優しさ、そして何より、...戦って死ぬ事への覚悟...。私は彼を見送っていた。国の為を思えばこそ、生き恥を晒してでも国に戻り、再び王への忠義を果たすべきだと。他国の戦に参加して死ぬ事に何の忠義があるのかと、彼を責めてしまった」

「.....」

「しかし、彼は言うのだ。我が命は永世フェネルの物だと。我が魂が在りしは、例え体がアニスで滅びようとも、我が魂はフェネルに永世の忠誠を誓い、其処に在るのだと。当時、カノンの王となられたばかりだったオリヴィエ様は、奇しくも私と同じ名ではあるが、とても忠義を誓えるようなお方では無かった。頼りない小童であったオリヴィエ様を私はいつも嘆いていた。私の国に対する忠義はアシュリアン殿のそれに比べて本当に惨めで見窄らしいものだったのだ。騎士として生まれ、此処までの忠義を誓える君主に恵まれているのだとばかり思い、私は嫉妬すらしたものだ」

「ここへ来て怖じ気付かれたか、ロワール卿」

カノンはフェネル同様、最後まで参戦を拒んで遅参した国。ヴァリアントは王宮騎士団全軍の投入を要請し、激戦区の北方へ配置した。北方軍は西方軍と共にブラッディヴァレイで陣を布き、ヴァリアントとカノン、フェネルが北方へ、西方はアニスとセイレーンが攻める手筈となっていた。ヴァリアントの二個小隊はそれぞれカノンとフェネルの軍を指揮する為の同行である事は明らかだった。

元帥であるションフェルデル卿を筆頭に我が王宮騎士団が参じたそこは、阿鼻叫喚の巷と化していた。新規に参入した我等カノンやフェネルの軍以外、どこを見渡しても手負いの兵ばかりが地を這い蠢いているのだ。その数、数万という兵たちが、たった一人や二人の精鋭にこうまでやられたのだという。私は言葉を失っていた。

「いや、...しかし、幾ら戦場とは言え、こうまで一方的に酷い惨状を目の当たりにするのは初めてです。まさかこれ程とは...」

呆然と立ち尽くす私に声を掛けられたのは、ションフェルデル卿だった。

「これ程だからこそ、我々が参じねば成らなくなったのであろうな。ヴァリアントのクアドラもこれでは面目丸潰れだな」

「敵は多勢を相手にする事に長けている、と言う事なのか。正に一騎当千の武将が待ちかまえているのだろう事は想像に易い。しかし如何に攻めるお積もりなのか」

「さあな、軍配を握るのは我々では無くヴァリアントだ。退かせては貰えんだろうな。聞けば大層な腕前の剣士が居るようだ。厄介なのは電撃を使う異人剣士の方だという...」

「異人剣士？」

「マジの佳卿が自由騎士に昇華した事は存じておろう？」

「...彼の央州皇女と言う、噂の騎士ですね」

「そうだ。天魔剣の彼女でさえ殆ど相手にならなかったのだそうだ。噂によれば、アニスの赤い武神でさえ凌駕するほどの腕前だと言うぞ」

「何者なのですか、その異人とやらは」

「それが解らん。だからこうして手を拱ねておるのだと、私も同じを質問をして酷く怒鳴られてきた所だ。遅参した我等カノン、そしてフェネルの騎士団にでも当てて、その実態を掴もうという魂胆なのだろうよ。...ふふふ、このカノンの騎士団を噛ませ犬に使おうとは、ヴァリウスめ、ふざけた真似をしてくれる！」

「そんな事だろうと思っていた」

「何者だ！」

「ほう、フェネルの者であったか。先ほどから気取っては居たが、敵意を感じなかったからそっとしておいたのだがその勲章、元帥だな。フェネルの元帥は参じていないと聞いたが？さて、この場に何用か」

「.....」

「な、なんだ」

「どうした、ロワール卿に用だったのか？...お前知り合いだったのか」

「い、いえ、初めてお目にかかります...」

「いや、すまん。驚いた...。髪の色が違うだけで、こうも顔が似る者がいるとは...。.....失敬。私はフェネル王国元帥、シレーネ・コルド伯爵である。これより西のノーザングレーを領地としている。其方は...、カノンのロワール卿というのか、...しかしよく似て居られる」

「カノン王国元帥、ヤニック・ショーンフェルデルである。此奴は我がカノンの王宮騎士団長、オリヴィエ・ロワール将軍である」

「カノン王国・ロワール家当主、オリヴィエであります。不肖ながら騎士団長を務めさせて頂いております。さて、たれぞ私によく似た者でも居りましたか」

「あ、ああ...、いや、カノンとフェネルが同じ戦場で戦うのなら何れ会うだろう...」

「フェネルの騎士ならばもう少し先にいかれた場所で駐留しておると聞きますが、未だ我々もこちらへ参じたばかりでしてな、挨拶が遅れて申し訳なく思う。我等カノンの騎士の誇りをかけて、互いに後れを取らぬよう佳き働きをしましょうぞ」

「うむ、こちらこそ崇高なるカノンの聖騎士の胸を借りたい所存である。...と、言いたいが、私は戦前に加わるつもりで来たのでは無い。...フェネルの騎士団へ挨拶に向かうのなら、ご一緒しても宜しいか？ショーン...」

「ショーンフェルデルだ。覚え難かろうな。フェルドというのが呼びやすかろう。よくそう略される。そしてこちらこそ、麗しき伯爵にお招き頂けるとは光栄です」

「ふん、宜しく頼む。それでは行こうフェルド卿、そしてロワール卿」

「あの時は本当に目を疑ったよ」

「ええ、私も初めてアシュリアン卿をみた時は驚きました。シヨンフェルデール殿の驚きようは少し大げさでしたが...」

「いやいや、あれくらい私も驚いておった。言葉を失いましたからな」



「まるで鏡を映したかのように似ておりました。国が離れておりますので髪や目の色が違うのが幸いです。もし同じ国に生まれていたら、間違えられてしまいます」

「はっはっはっ...、全くだ。お前の身代わりでも頼みたい程だ、私は」

「言われるなコルド伯。此度は感謝してもしきれぬ」

「・・・」

フェネルの陣へ赴き、カノン騎士との挨拶を軽く済ませると、私たちは陣より少し距離を置いた。

「アシュリアン、私は...」

「死にに行く積もりは毛頭ありません。私も騎士、侯爵です。国の為にまだまだやらねば成らぬ事も多い」

「・・・」

「ナーダにはブライアンやエスターがいます。直系の宗家ではありませんが、私の後はエスターが継いでくれるでしょう。ブライアンでは荷が重い」

「先日、ナーダの霊廟に行ってきた。呼ばれたのだ、ジュードに...」

「ええ、私がそう命じました」

「な、あれはお前が・・・」

「私もここで死ぬ気は無い。しかし、生きてこちらには帰って来られないかも知れない。エスターには後継を告げてあります。...断れましたけどね。ブライアンに無理はさせたくなくて、まだ彼は幼い。ナーダを背負うには重過ぎる」

「・・・」

「ジュードは貴方にブライアンとの婚姻を迫ったのでしょうか。その顔を見れば何となく想像出来ます。これまでもずっと私と貴方の婚姻を望んでおりました。気を悪く成されたようならこの場を以て私が謝りたい。...すまない」

「い、いや...、私は、・・・私は、婚姻など考えた事も無い。啖呵を切って断って出てきてしまった。少し後悔はしているんだ」

「はっはっは、それでここへ？」

「あ、いや、...」

「私の願いは、...私は、もしエスターがナーダを継がずブライアンが継ごう時には、貴方にブライアンの後見人になってもらいたかったのです。盲目のブライアンには傍で支えてくれるものがが必要です。もちろん、エスターもいますが、伯爵としても元帥としても地位と名声の高いシレーネ様だからこそ、頼める相手であると思う。他に信頼の置ける者がいないという事は悲しいが、
...我が人徳の無さ故か。不甲斐ない」

「私のような無粋な女に候の後見など...、出来ましようか。生きてお帰りなさいませ。生きて、
...シルヴィア様に...」

「言うな！」

「う...」

「あいや、すまない。言わないでくれ。私は今戦場にいる。これから熾烈な戦になるだろう。判断が鈍る...、今は、目の前の戦場の事だけを考えたい」

「ナーダ候...」

「心残りだった家督についてはどうしても貴方に助けて頂きたく、出陣の前に急遽呼び立ててしまった。散々悩んだ末の事だ。決して軽い気持ちで頼んではない。どうかナーダを助けてはくれまいか、コルド伯...いや、シレーネ様」

「...御意」

「すまない」

「謝らないでくれアシュリアン。私はお前が死ぬとは思っていない。その為に、お前を死なせない為にここに来たのだから」

「そういえば、何用でこちらへ？」

「これだ。これを届けに来た」

「こ、これは！？...この剣を何故貴方が」

「ああ、どっかの馬鹿王子がな。私が下洛する時に寄越した物だ。『これを俺だと思ってくれ』とでも言いたかったのかは知らんが、私にそんな趣味は無いし。はは、私は剣士では無いからな。おかしいだろう？...持っても仕方がない。使え。次期国王からの賜物だ」

「なんと...」

「出陣で騎士団は必ず北を通る。ノーザングレーに寄らなければ、私が直接赴くしかないが、立場上ケヴィンが表立って何もしてやれる事は無いだろう。これが奴にとっての精一杯だったのだろう。...不器用な男だ、あいつは本当に」

「なんと有り難き...。我が聖導騎士団は国を背負って戦えますぞ」

「だろうな。聖剣エンハンス。ケヴィンがその昔、神音の巫女から賜った威光の剣だ。ナーダの魔剣ではないぞ。存分に力を発揮せよ、将軍」

「はは！」

「武運を祈る。必ず帰れ！」

「良い剣をお持ちだ」

「これはこれはロワール卿、ご無事で何より」

戦は始まった。隊などもはや烏合の衆も同然。集団対集団の戦では無い。一騎当千、正しくも凄まじいばかりの鬼神が如し敵将は一瞬にして騎士団の兵を数十、数百と蹴散らして行く。これでは將軍として軍を纏めようにも不可能だった。集団の利は無く、むしろ集団であるがゆえの愚鈍な戦術であった。

「銘はあるのか？」

「エンハンス。王子から賜った聖剣です」

「ほほう、素晴らしいな！さぞや力が漲るでありますよ」

「本当に。ロワール卿も立派な剣をお持ちのようですが...」

「ええ、これは代々我が家に伝わる剣でリヤンと言う。戦には相応の友が居てこそ、心強いものです」

「なるほど、素晴らしい。絆の剣ですか...。共に参りましょう！遅れは取りませんよ」

「望む所だ！」

日が経つに連れ、戦術の誤りは濃厚となり、もはやヴァリアント隊の戦略など有って無いも同然。腕に覚えの有る騎将たちはそれぞれで単騎に挑み始めていた。北の塔城に陣を布き、王都、王城前での戦いだったが、目の前にあるアニスの王城・ピューリティがとても遠く感じられた。それほどまでに黄髪 of 剣士は強かった。そして度々現れる電撃の異人...。近寄る事すら出来ない異人剣士の電撃に、数万の軍勢など何の意味も無かった。

やがてマージと共に東方を攻めていた来聖の連隊が全滅し、北方からフェネルの聖導騎士団が要請に応じて移動して行った。

「武運を祈っているぞナーダ殿。我々がこうして戦列を共に出来た事、必ずや何かの縁に違いない」

「ええ、こちらこそ。正にその通りだ。もし良かったら何れフェネルにお越し下さい。私も何れカノンへ行ってみたいものです」

「ああ、ああ、是非とも来るが良い。カノンは良い国だ。色々と紹介しよう。そして是非、フェネルを案内してくれたまえ。楽しみしている！生きて会おう」

それが私とナーダ卿の最期だった。

「ロワール、無事か」

「ションフェルデル殿...。騎士団のほぼ全軍を失いました。カールは...、カール・ロレンツォは無事でしょうか」

「・・・すまん。ロレンツォ將軍は守りきれなかった。俺の判断ミスだった、...すまん」

「いえ、...これも戦場。武運がなければ生きて帰れないのが戦です」

「すまん...。お前が目をかけていた副官だったのだろう。最期までお前を頼むと...」

「そうですか・・・。カールは私をよく慕ってくれた騎将の一人です。ですが、切り替えましょう！我々はここで終わるわけには行かない！まだフェネルの將軍も奮闘しています。負けられ



ませんよ」

我が副官、ロレンツォ将軍を失った。しかし失意に浸る暇などない。たった数人の戦力でこれだけの高い志気…。中央には必ず指令となる人物がいる筈で、これだけ多くの国が多くの戦力を以てしても王都に辿り着いた者が居ないのは、最早脅威を通り越した恐怖でしかない。アニス王が崩御した後、これまでアニスに仕えてきた臣民を追い出して、一体誰が、何をしようと言うのか。フルクレリア各国は確かにアニスの増長に対して我慢の限界を訴えてきたが、この国には一体何があるというのか。これだけ国土を荒らし、これだけ蹂躪しているというのに、王都を護る騎士一人倒せぬ無様は何とも敵ながら天晴れとしか言い様がない。それほどまでに強いのだ。戦力として強いというよりも、守り抜くという精神的な強さか。それ程までに戦える彼らの背中には誰が居て、何があるというのか。戦っていて思う事は、我等の義である。ああまでして護られると、まるで我等が侵略者のようであり、我等こそが悪なのでは無いかと。これでは中部諸国を滅ぼしたミンファとやっている事が同じだ。…来聖や常磐の騎士も同じ思いで戦っていたのだらうと思う。これでは志気を高めるどころか、戦意を失い兼ねない。

進軍しては多くの兵を失い、撤退しては様々な戦略を立て、戦術を模索する。我々は進軍する為に作戦している筈だった。しかしすでにそこは「如何に死ぬか」を考えるようになっていた。なるべく無様な死は御免だと言わんばかりに…。これでは勝てる戦も負けて当然だった。志気など微塵も無い。しかし、それ程までに相手が強いのだ。私も二、三、剣を交わしたが、一撃の重さが違うのだ。圧倒されて動く事を忘れ、部下を失う…。死ぬ前からして無様な将軍だ。悔しくて死に切れない思いが胸を焦がした。撤退する前、私は一人残って剣を収め、離れた所から名乗った。

「カノン王国・王宮騎士団長、オリヴィエ・ロワールである！」

撤退する場に在って相手を称賛する気は無い。しかし、あの見事な腕前に敬意は表したかった。…唯の自己満足だった。



「バラーナ王国大使、デビット・ディッケンズだ。見事な剣捌きであった！」

赤褐色肌で黄髪の彼はそう名乗り、剣を胸に敬礼し鞘に収めると立ち去っていた。見事なのは彼だった。悔しかった。私は悔しくて涙を流した。騎士としても、貴族としても、完膚無きまでに破れたのだ！

北の塔に戻ると、各地の戦況報告が伝えられていた。最終戦を見越しての全戦力の投入が行われていた。南から来る増援はまだ北には来ていない。東にはマージの第二王子ガラム様と騎士侯爵ベルナディス枢機卿が出陣され、西にはセイレーンの魔女・イニス皇帝と天帝クロディア様が、南にはヴィリンクトが武帝・アイン卿と王宮騎士団長のシュネル卿、竜騎士団長のカヴァリー卿が参戦されたと聞く。

軍隊では無かった。ヴァリアントは今更にして気付いたのだ。数では無いと。前線で指揮を執らぬ将軍が如何に愚かな者か、よく解った。我々カノンの民はその為の糧となったのか！北方にはヴァリアントのラメロウ将軍が唯一人来ただけだった。大将クラスの騎士は僭越ながら私を含めたとしてもションフェルデル卿とラメロウ殿、たった三人だった。アニスの騎士たちは南や西から中央を目指していると思われ、東や北には来られまい…。見捨てられたかのような絶望

感だった。

それから数日と経たない内、私は東方の戦況を伝え聞き愕然とした。東方は敵味方問わず全滅.....

フェネルのナーダ卿と絆を深め合い、再会を約束して別れたのはまだほんの半年ほど前だった。後から聞いた報告で、彼を討ったのは若くして完全体となった魔導師だったと言う。マージのルーン・ベルナディス卿と相打ち倒れたと聞く。先日その者がルーンの始祖王の加護を受けた騎将であり、あのニヴァール帝国を建国した男であったと聞いた。強い筈だ。セイレーンの魔女と並ぶ騎将であったのだ。

ヴァリアントは遂に痺れを切らしたのか、加護すべき筈のアニス王子、王女までも出陣させるに至った。南からリンス王子を筆頭に黒騎士カタルシア卿が、西からはルシファリア王女を筆頭に赤騎士レイナ卿と常磐の連隊も加入していた。ヴァリアントの司令ではアニスは全軍西から中央を目指す手筈となっていたが、北が手薄であると気付かれた王女が多く師団を連れて我等の救援に駆けつけて下さった。そして何よりも、今まで戦いを拒んできたあの赤い武神が遂に深紅の鎧を纏った。アニスの騎士たちの志気はこれまで以上に高かった。最前線で戦っていた我等もいくらか安堵したものだ。

しかし地上も天空も騎士が入り乱れる大混戦。ショーンフェルデール卿からの推薦でラメロウ将軍から戦術指南を乞われた私は、彼のディッケンズ殿と対峙すべく戦略を立てた。少数精鋭、六人で相対するというものだった。私を含めてショーンフェルデール卿、ラメロウ殿、常磐のアスカ殿、フーシヲ殿、クレナイ卿で三人づつに別れての波状攻撃だった。ディッケンズ殿はその腕も然る事ながら、彼の持つ聖剣の威力が絶大にして強大だった。並大抵では近寄る事すら出来ない。ショーンフェルデール殿を失い、ラメロウ殿が決死の覚悟で相討ちを狙われたが、まさかの...。同じ技を使われ、ディッケンズ殿が勝利された。あれには私もクレナイ殿も驚いたが、あの技は消耗するであろう。卑怯者と罵られようとも、私は挑んだ。

「騎士として、武人として貴方には敬意を払いたい！こんな戦い方は本来はしたくなかった！良き好敵手となりたかった！貴方にその美しき剣技を倣いたかった！しかし、我等は敵！私とて、私とて！！」

私は討ちたくなかった。それ程に彼を尊敬していたのだ。

「それが、戦です。私も貴方のような方と最期に戦えて嬉しく思う！騎士として！互いに信ずる者のために！迷いは捨てなさい、ロワール殿。我が戦友よ、いざ！」

一撃勝負だと解っていた。この一撃を決めた方が勝つのだと...

彼は私に剣を向けなかった。

「ぐう...ふ！...見事です。最期があなたで...」

「馬鹿な！何故だ！なぜ！...」

「もう戦いたくは無かったのかも知れませんね...。彼の目は哀しみを帯びていました。迷う貴方と同じように、この方も迷いのある目をされていた。...撤退しましょう。アスカ、フーシヲ、無事か！」

「何とか...」

「申し訳御座いませぬ、足手纏いに...」

本来なら彼を撃破して王都、中央へ進軍する手筈...。我々はディッケンズ殿に敬意を払い、引った後、撤退した。

その後、私は陣で待機を命じられ、アニス王女ルシファリア様率いる将軍数名と常磐の三人が出陣した。私はナーダ候を失い、ディッケンズ殿を討った事で酷く戦意を喪失していた。それを哀れまれ、下卑た目で罵られもした。

「お優しい事だな、神聖なる神音の騎士は。何とも情け深い事だ。邪魔なだけの軟弱者など無用！次が有る事を願って次までに整えよ。...胸を張って国に帰りたければな」

ディッケンズ殿が亡くなられたそこにはヴァリアントのリヒター卿が立ち塞がったという。赤の武神、レイナ候に破れたそうだが、あのリヒター候を一撃で破ったと聞いた。そして雷神と謳われる異人の剣士とも互角に渡り合い、今でも生き延びて居られる。末恐ろしい方だ。

それから戦は不可解なまま終結した。全軍撤退命令が出された後、アニスは謎の光に包まれ、何事も無かったかのような静けさを取り戻した。ヴァリアントの王城では何やらあったそうだが、私はその時の事を詳しく聞かされていない。

ブラッディヴァレイへ撤退した兵は私を含めても十数人程だったと思うが、カノン王国の騎士として生き残ったのは私一人だけだった。国では戦争参加を辞退していたそうだが知る由も無く、負傷していた私が目覚めたそこはノーザングレーの伯爵邸だった。

アニスが大きな白い光に包まれていた。嫌な予感がしてならなかった。私は止めるオブライエンを蹴り飛ばしてブラッディヴァレイへ急行した。アマーピアスに跨がって上空から見たアニスの光景は、まるでその先に何も無いかのような、虚無だった。紅族であるアマーピアスでさえ恐れおののくような、それは何とも名状し難い光景だった。

渓谷へ降りると数人の兵が生き倒れていた。私の水術魔導では治癒こそ出来ないがいくらか状態を維持出来る。アマーピアスが仲間を呼んでくれたおかげで数人は運んでノーザングレーで治療が見込めた。その中にアシュリアンは居なかった...。ただ、アシュリアンの顔をした薄紫の髪の騎将がいた。

私は聖導師を集め、私の家を医療院として使わせた。全員助けたかった。アシュリアンは居ない。そんな事は分っている。身内が居ようと居まいと関係ない。数日間私は聖導師に交じって兵たちの治癒を手伝っていた。

「う...、ああ、気を失っていたか」

「少しお休み下さいませ、伯爵。精霊が足りませぬ。我等とて疲れが癒えぬのです。ましてやそのお体では...。寧ろシレーネ様の方が重症でありましょう。どうかこれ以上は無理はなさらず...」

館の中では精霊たちに極力、兵たちを優先するよう請願していた。負傷していない我々は普段

以上に体力が消耗した。

治療は概ね十日ほどで終わった。

「賑やかな街だな...、まるで彼の戦場が嘘のようだ。ここは楽土か...」

「何を冥土にでも来られたかのように...。ロワール卿、元気そうで何よりだ」

「貴方は？...ここはどこです」

「フェネル王国ノーザングレー。この地を治めるコルド伯爵邸だ。私はノーザングレーの守衛を任務とするディーン・オブライエン。及ばずながらこの国の元帥位に就ける騎士です」

「わ、わたしは...、くう...」

「まだ休まれて居られよ。傷は癒えたが長く眠って居られたのだ、眠った後というのは頭がしっ
かりしませんからな」

「すまない...。戦は、戦況は...」

「終わったよ。不可解な終わり方をした...」

「シレーネ様！貴方もまだ安静にして居られよ！」

「む！？...どうなされたのだ、そのお姿は一体...」

「ああ、腕の失い損だ。私は何をしに腕と目を失ったのやら...、セイレーンの魔女の腕でも貰
いたいものだよ」

「シレーネ様...」

「一体、何が有ったと言うのです。貴方は戦場には...」

「ロワール卿、どうか聞いて下さいますな、どうか」

「構わんさ。もう...、悲しんだからといって時が戻るわけでも有るまい。恨み、怒り、嘆いた
所で、何も無かったかのようにな。...見ろ、民たちは楽しそうに浮かれて居る。...ああ、冥府か
地獄のようだろう？」

「シレーネ様、どうか、...お体に障ります」

「病人扱いするんじゃないよ、オブライエン！...席を外せ。ロワール卿と話がしたい」

アシュリアンの出陣から間もなく、伏せていた王が崩御された。それは戦場には伝えられず、
密かに弔われた。ヴァリアントにはすぐに伝わっていたそうだが、戦場の兵の志気が下がる事を
懸念して暗黙を貫けと請願していたらしい。私がそれを知ったのは少し後の事だが...

おかしいと思っていた。王が崩御されたにも関わらず騎士団は戻らない。いくらヴァリアントで
も一時的な離脱は許す筈。誰もが不思議に思えば元老院はこう宣ったのだ。

「騎士団は戦に忙しく、王の崩御如きで帰る暇など無い。戦に勝利したらその勝利を手土産に王
の墓でも参ろうではないかと、将軍からはこんな通達が届きました。何とも身勝手な騎士共で
すな。これだから武勲に目の眩んだ野蛮な騎士など信用出来ぬ者...」

そんな事をアシュリアンが言う筈がないであろう。愚弄するにも程がある。しかし民はそれを
信じ、利益を生まない騎士団など無用である。税を貪る騎士など居なくて良い。と騒ぎを起こし
ているようだ。

差し詰め元老院が吟遊詩人を使って流布して回っているのだろう。民とは何も知らず躍らされるものよ。しかしそれが確かな民意である。そして……

アシュリアンが死んだ。

アシュリアンの仕えていた聖獣ヴァニサウトが聖剣エンハンスを携えてシルヴィア様の下で息絶えたそうだ。血塗れた聖剣だけがアシュリアンの謝辞を携えて帰ってきたのだと聞いた。

宮廷では祝杯を上げて祝ったそうだ。もはや狂っているとしか思えん。

ケヴィンの戴冠式を明日に控えた日にアシュリアンの死亡が知らされ、式を延期するでもなく前日に酒盛りとは…、流石の私も耐えられなかった。しかしそんな私の怒りすらも忘れさせられた。それは王の戴冠式の真っ最中だったそうだ。

シルヴィア様が城の自室から身を投げられた……

その胸にはエンハンスが抱きかかえられていたそうだ。認められた遺書も無かったそうだ。

戴冠式は中断したまま成立と見なされ、シルヴィア様は密かに弔われた。国民にそれを告げる事も無く、国民は新たな王の誕生を祝い、新時代の到来を歓喜した。

世は戦の真っ只中である。帰還したオブライエンから報告を受けた私はただ、何も考えられなくなっていた。

フェネル以外の全ての国が隣国アニスで壮絶な戦をしている中、歓喜に湧き上がり、祭りや酒盛りに明け暮れる我が国の状況に気付いたセイレーンの魔女がブラッディヴァレイからこのノーザングレーを訪れたのはそんな頃だった。

「随分この国は楽しそうだな、コルド伯」

「そのようですね」

「他人事か！」

「私は謹慎中の身ですから」

「貴様！」

「殺したければ殺せ。貴方がそうしなくても、私は国から疎まれている。その矛先は私にも何れ向くであろう」

「どういう意味だ」

「軍縮政策。言うなれば元老院の私腹を肥やしたい政策です。この国に騎士など要らぬでしょうから、そのうち騎士の権威を没収するつもりでしょう。騎士団を出陣させて騎士を殺し、最後に残った貴族の騎士、…私を殺せば国は全て元老院の物。国王が崩御され、気の弱い操り人形が王になる…。だから祝い酒で酒盛りでもしているのでしょう」

「……呆れて何も言えん」

「でしょうな。次に出陣をまだ望むなら私が出ましょう。国内の全戦力を、投入すればよろしいか」

「新国王を出せ」

「クローディア…」

「な！…っ」

「お前など宛にならぬわ」

「クローディア！」

「イニス様はどうも甘い。私には此奴の感情が解りませぬ。イニス様はこのような感情にどうしてこうも甘いのか。ノヴァの時といい...」

セイレーンの魔女。

長く精霊によって時間を止められた眠りによって若くして完全体を手に入れた二人の王女。魔女と恐れられた伝説のイニス内親王、その姪に当たり獣身変の特殊能力を持つと言われるクローディア内親王。共に三千年以上も前に生まれている。完全体となった二人は言葉無くして意志を通じ合わせる伝心の能力を有している...

「一つ聞きたい、コルド伯」

「そんな事...」

「黙れクローディア！」

「そうか、読まれているのか...」

「読むつもりは無くとも感じ取ってしまうのだ。目覚めて間も無くてまだ巧くコントロールが出来ん。それは許せ」

「それで、聞きたい事とは？」

「なぜ騎士団を撤退させなかったのか」

「なに?...どういう意味だ」

「王が死んだと言うのに、それを自国の民に伝えさせも為ず、死に至らしめたのは何故だと聞いているんだよ!...知らないのか？」

「なん...だと!？」

「我等がヴァリアントにいた時、ヴァリウスからはそう聞いている。フェネル王からの通達で、前線の兵には黙っておけという話だそうだが?.....どうします、イニス様。直接フェネルのカレヴァーラ城まで行きますか」

「.....」

「このまま新国王を尋問してやった方が手っ取り.....う」

皇帝イニスの白い槍が天帝クローディアの喉元に突き付けられ、天帝クローディアは黙って一歩退いた。

「待ってくれ!私が...、王の代わりに私が」

「王を救いたいのか」

「.....私は」

「元老院とやらはどうするつもりか」

「くっ.....」

「馬鹿ものめ!お前のそれを元老院に利用されていると気付かぬか!」

「しかし、ナーダ候が亡くなられて、この国にはもう我等元帥以下、まともな戦力などありません!王は、王は騎士では有りません!先ずは我等を、私をお使い下さい!仮にも元帥.....
...うっ、くう」

一瞬だった。天帝クローディアの薙る槍が私の両腕を斬り落とした。

「面倒くさいから教えてやる。お前じゃ役不足だ。これでもう槍は握れまい」

「クローディア！！」

皇帝イニスが天帝クローディアを平手打ちにする。

「なにを！」

「お前にはどうして...、お前は、愛を知らずに完全体になったばかりに・・・」

「愛い？そんな物が何の役に立ちますか！馬鹿馬鹿しい。現にイニス様を見ていると危なっかしくて恐ろしくなります。その甘さが戦場では命取りになるのですよ」

「はあ...。もういい、お前は下がれクローディア。...フェネルに対してはもう徴兵しない」

「はあ？...ち、ちょっと、何を...」

「下がって黙っている！」

「すまぬ、コルド伯...。これには我等も詫びねばなるまい。其方の腕を以てフェネルは不問に致す...」

「ふふ...ふふふふ、まだまだ甘いですよクローディア姫。私は槍使いであると同時に魔導師で御座います。これくらいは為ねば、戦意喪失など...」

「ち、止めぬか馬鹿者が！」

「あう！」

導師にとって導術の根源足る額眼を失えば、騎士としても導師としても生きて行けん。私は自らの水術で目を切り刻もうとした。...もう何もかも、全て失っても良い。

しかし皇帝はそれを察知して私ごと水術を弾き飛ばした。

「王に加え、姫君を失われた事への多大なショックは理解する。もう辞めよ。もう良いと言っているんだ。お前の気持ちが解らない訳じゃない！勝手にお前の気持ちを知ってしまう私を許せ！私も過去に同じほど痛い思いをした！...私はそれで魔女と呼ばれているようだが・・・。自分を傷つけたって何も、その後には何も無いんだ！ただの虚無しか...」

額眼や頬眼に損傷は無かったが、実眼は双眸共に潰れた。腕と顔から失血する私を屋敷の聖導師が駆け寄って緊急治療を始めていた。館内が慌ただしくなっていた。

「ええ、虚無です。私にはもう、何も有りません。せめて戦場で適当に...」

「それで失った者達が喜ぶと思うのか！ナーダ候やシルビア姫が、お前のそんな姿を望んでいるのか！」

「私だってその言葉をシルヴィア様にお伝えしたかった！こんな事になる前にい！」

「落ち着いて下さいませ伯爵、どうか、どうかじっとして下さい！」

「私の二の舞だけは踏むなコルド伯。深い悲しみを、感情のまま行動するのだけは辞めておけと言っておく。傷と共に悲しみを癒せ...。すまなかった...」

私の近くで静かにそう言い残すと、二人は黙って帰って行った。

その後オ布莱エンが駆けつけてきた。相変わらずタイミングの悪いというか、良いというか...。行動の遅い男だ。オ布莱エンの手筈で私の治療の為に青法聖導師を含めた多くの聖導師がこの伯爵邸に集まっていた。

「そのおかげでお主たちをこうして治療出来ているのだがな。私が負傷したおかげだぞ、有り難く思え口ワール卿。はっはっは...」

「いやはや、何と申せば良いか...」

「気にするな。私もすっかり癒えたわ。最近では寧ろ失った腕の変わりに肘腕を召喚し続けるのに躍起していてね。なかなか基本導術ながら安定して使いこなせん」

「私など、後翼しか使いこなせませんぞ...」

「なんだ、私より酷いのが居るよ、はっはっはっ...」

「はっはっは...、面目ない」

「水と風しか使えなかった私の素質は闇ではなく光だったよ...」

「ほう、導術を極められようと？」

「私には専らこっちの方が性に合っていてね。アマーピアスもこちらの素養から契約してくれたのだが...、まさか光だったとはな。アマーピアスがガッカリするかも知れないな」

「なるほど、闇であれば治癒法のようにも使えますからな...。流石に聖導法師には及ぶまいが...、そこは武門の名家たるコルド様という事でしょう」

「ふふ、世界は私にまだ戦えと言うのかな。風術を極めるにも時間はかかるまい。あとは光を作用させられれば、戦列にも復帰出来ような」

「それはそれは頼もしい。良かったら今度カノンにでもお越し下さい。カノンには術師が少ないですから...、...私だけが、フェネルを訪れてしまったな。いずれ墓標が出来ましたら、また訪れてもよろしいか」

「...。ナーダ家には代々の霊廟が有る。その時は共に参りましょう。今は、英気を養って、国にお帰りなさいませ。ご家族も心配なされて居るであろう。...お子様もおいででは？」

「ふむ、そうだな。息子...、いや、娘が一人居ります。本当は息子が良かったのですが、産んですぐ妻が亡くなりまして。私が一人で育てております」

「それでは留守を預かって寂しい事でしょうに...」

「なあに、男の子がそんな事で寂しがるとは、立派な騎士になりませんから」

「え？娘...では、ないのですか？」

「ああ、娘ですが、息子として育ててます」

「んな！なんと、お可哀想に...」

「...。駄目でしょうか？」

「そりゃあ駄目でしょう」

「しかし、騎士の家に生まれた子が箱入り娘のような軟弱者に成られては困ります」

「私のような女になっても良いのか？」

「...。も、もちろん！立派な騎士では有りませぬか」

「なんだ今のは」

「あ、いや...、人が悪いですな、コルド卿も」

「ふふふ、あはははは、面白い男だ、お主は」

戦争は終わった。アニスの戦争は・・・

大きな傷跡を残し、数多の国が痛手を負い、国家間の軍事力は削がれ、戦争前に比べてその差は均等になっていた。どの国も戦に疲弊し、自国の経済を立て直す事が優先とされ、暫く何事も起こらないであろうと言われた。それ程までに先の大戦は虚しい物だったのだろう。

一つ、このフェネルを除いて・・・

戦が終わり、国はこれまでの平静を装っていた。

あれから五年程が経ち、王となったケヴィンは未だ私を伯爵とし、元帥としてこの地に縛りつける。オブライエンは聖導騎士団に代って港の守衛に就き、ケリーは変わらず王都の守衛を任務とするが、状況は随分変わっているようだった。

私は中央から年に一度の召喚に応じて上洛していた。シルヴィア様の墓標は無く、王家の霊廟に密かに弔われていた。

「昔の誼みもこれが限度ですよ、コルド様」

ケリーに無理を言って王家の霊廟を弔わせてもらっていた。

「私も今はそれ程自由な身の上ではない。普段は帯刀すら許されていないのだから。貴方は飼い犬と罵りますか」

「ロニー・ブライス議長様、か...」

「オブライエン殿はクラーク様に。他にもブラッドレイ殿がケアード様に、幹事官ではシトリン伯やガードナー伯も...」

「エスターもブリーズをナーダに迎えたようだな」

「オブライエン殿にも会われたのですか」

「ああ。来る途中レイにも寄ってきた。あいつにはあの街の華やかさが似合わんな」

「今度もまた王への謁見を申し込むおつもりか」

「さて。謁見出来るかどうか...。毎年謁見を申し込んではいるが断られ続けている」

「王に会う事はもう出来ませんよ」

「何故だ」

「言える事はそれだけです。元老議員としての公務が終わりましたらそのまま北へ帰られよ。そして、何があっても毎年行われるの元老議会以外で南には...」

「最近、王の事を余り聞かぬが...」

「生きております。ですが、これもご内密に...。それ以上は何も言う事はありません」

「知っているかケリー。戦は時として数より個の強さで決まるといふ。先の戦でよく学ばせてもらったよ」

「貴方のその腕はセイレーンの魔女に噛まれたと聞きましたが...やはりあの戦場に行かれていたのか」

「いいや。それはオブライエンからも聞いているだろう。報告に誤りは無いよ」

「あの大战で一体何があったと言うのです。私には未だに理解出来ない事が多い」

「身を以て経験せぬよう、成れば良いな」

「何か、お考えでもお有りなのか」

「ふん、それはお前たちの方だろう。私は静かに後生を過ごしたい。何事も無く。もううんざりだよ」

「.....」

「どうした」

「正直、あなた方貴族が羨ましい」

「私はお前のような自由な身が羨ましいよ。ケリー、羨望感とは自分が持っていない物を嫉む気持ちから生まれるのだ。お前も大概にして貴族社会に毒されているのだろう」

「まさか・・・」

「じゃあ、私は行くよ。世話になったな」

ケリーに言われた通り、私は王への謁見を見送り、議会閉廷後ノーザングレーに戻った。そもそもここ最近はどうも忙しくていつまでもノーザングレーを空けてはいられなかった。

「お帰りなさいませ、シレーネ様」

「留守中、大事無いか？」

「はい。ただ、先日アニスより書状が届いております」

「またか...」

戦後、アニスのアホ貴族から度々ブラッディヴァレイへ呼び出される。しかも密談だと言うからはオブライエンに知られるわけにもいかない。執務官と口裏を合わせ、公務に忙しい振りをするのも大変だが、...それよりも、私はあまりこの地に来たくはないと言うのが本音だ。

一血塗れた溪谷

この地が乾く事は無いのか。荒廃したこの地の城砦には戦没者の慰霊碑が建てられた。あのアホ貴族はよくここに来ているらしい。あの頃の惨状はもうここには無い。綺麗に片づけられ、すっかり美しい景観となっても、私はここでアシュリアンに剣を授けたのだ。ケヴィンが神音から授かり、私へ渡った剣はアシュリアンを大いに活躍させてくれたであろう。そして今は王家の霊廟でシルヴィア様と共に...

数多の騎士達がここに集い、戦功を挙げて出世を夢見ては、打ち砕かれて絶望に明け暮れた。絶望と失望の地、ブラッディヴァレイ。そう言われて一番嘆いているのは、お前たちやも知れぬな。そんな風に呼ばれる為に在る大地ではあるまい...

この慰霊碑は、そう呼ばれ、嘆き悲しむこの地の精霊達を諫める物でもあるのかも知れないな。

「おや、やっと来てくれたか、シレーネちゃん」

「お前が死んでしまえば良いのに...、ふふ」

「一言目に言う言葉がそれかよ・・・」

エーリス・ダイヤ・レイナ大公。言わずと知れた赤き武神。・・・随分黒くなったが。その後ろから小娘が顔をのぞかせていた。

「ん？・・・ほう、お前そう言う趣味か」

「う・・・いや、こいつは・・・」

「庶民か？ずいぶん女々しい小娘だな」

私を見て怯えている所をみると騎士では無いようだ。たしかにこの姿は少々気持ち悪いのかも知れぬが・・・

「だから付いて来るなって言っただろう、化け物に会いに来たんだから」

「おい・・・お前今何と言った」

「気にするな」

「人魔のお前に化け物呼ばわりされるほど酷いか！」

「ひいいい・・・」

「ほれ、怖がってるぞ」

「私とて仮にも女だぞ！傷つくわ...」

「まあ、良いじゃねえか、お互い化け物同士...」

「良くないわ！...まったく。で、何用だ」

「レイラ...」

「は、はい...。こちらです」

「ん？聖導器か...」

レイラと呼ばれた小娘が何やら装身具のような物を取り出した。

「いや、魔導器だ。こいつはレイラ・テトラプテ・ランス。ミスティア領の魔導法師だ。大戦時に魔族によって護られていた大法師様だ」

「大法師様、・・・これが」

「人に慣れてなくてな、俺や王以外には懐かんのが困り者だが、腕は良いぞ」

私を見て怯えて震えているだけの小娘にしか見えない。その小娘が意を決したように、手に持った装身具を私の方へ掲げた。

「私にか？・・・これを、・・・受け取ればいいのか？」

受け取ると、即座に小娘はアホ貴族の背中に逃げ隠れた。

—正直、そこまで怯えられると傷つくわ！

受け取った直後から体が熱い。これは・・・

「お前の相性に合わせて造らせた。魔導器を錬成、醸造出来るやつはそんなに居ない。こう見えて戒令官なんだレイラは」

頭をなでられて嬉しそうにする小娘。だが、しっかりその腕は赤いローブを握り締めたままか。

「お前の子供か？その小娘」

「ちっがーう！俺そんなに老け込んでねーし。言っておくが俺はお前よりも一五〇は若いぞ」

「そんなに離れてないだろう...」

「んじゃ、一二〇でいいや」

「・・・良いやってなんだ。全然良くないだろう。...まさかお前、その小娘...」

「小娘って言うけど、こいつは俺と五〇も違わんぞ。これでも一二〇歳...・・・弱？」

「一一八です...。アリスとは三七しか違わないよ...」

「そうか。お前が老け込んで、小娘が若作りして居るのだな！」

「ほっとけ！...お前、いくつになった」

「淑女に年齢を聞くとは無礼だな...」

「ん？どこだ、どこに淑女が・・・、ああ、お前かレイラ」

「・・・・・・・・」

「わ、わるかった、落ち着け！レイラが怖がる・・・」

「まだ二七一だ。お前とは大体一一六しか離れてない。それよりも、この魔導器...、一体なんだ。これは・・・、持っているだけでも凄い影響を受けるぞ」

「相性が良いからな。お前の為に拵えた」

「・・・、目的は何だ」

「何れ解るだろう。それを使え」

「どういう意味だ」

「先見だ。リリーナ様やティスほどの力はないが、アナスタシアが光塔で先見を見た。内容は言わんが、お前には必要な物だろうと思ってな。それで何度も呼びつけてお前の事を色々聞いていたんだ。俺達が手を出すわけにはいかないが、...俺達もうんざりしてるんだよ。この先血なまぐさい事が起こる。既に起こっているのかは知らんが...」

「ああ、そう言う事か。私に火の粉が降りかかるか・・・」

「さあな。ただ、お前が重要人物であると言った。そしてこの先も。詳しくはどうか判らんが、できる限りの手を打った。もう、アニスは戦火を上げるのも、巻き込まれるのも御免だからな。...武運を祈る」

「フェネルの問題はフェネルだけで片を付ける。先の戦いで、我等だけはろくな戦果も上げていないしな。ご助力は感謝する」

「あ、あの...」

お互いに立ち去ろうとしたとき、小娘が私に声をかけた。か細い声だ...

「光の代りに、肩腕をお使い下さい...。光は、消耗が激しい...から、肩腕で合成魔導を...、連動した魔導輪が使える筈です！貴方なら...。武運をお祈りします...」

「ふ...、ありがとう。参考にさせてもらうよ」

シルヴィア様も生きて居られれば今ごろ一一八歳だった...

「なんと、アリス卿が助力されておったとは...」

「内密な話だ、知る由もなかろう。あれからこの魔導器を使って魔導術の研究ばかりをして時が過ぎた。言われた通り、光はなかなか極められん。だが、肩腕を代用する事で、光を使うよりも術に多様性が生まれる事が解った。...まさか、この私が大魔導術の魔導輪を複数同時に召喚して合成出来るようになるとは、思いもしなかったが...。身の程に合わん力を手にしてしまったよ」



「魔導輪から合成など出来るのですか!？」

「おや、君は興味があるのかい？見た所、導術は使えぬようだが...」

「お前には天地がひっくり返っても無理だぞ、ミヤビ」

「いえ、私が使うのでは無く、使われた時の対処をどうすれば良いのかを学んでおかねば。この

先空中でそんな事をされたら私は対応出来る自信がありません」

「ああ、そう言う事か」

「その通りだ。武器を扱う者、相手と同じであるとは限らんからな。魔導や聖導に対する知識や対応なども出来なければ、ただの的になってしまう。うむ、誠によく考えておるな、ミヤビ」

「け、悪かったな、何も考えてなくて。魔導なんて剣で薙ぎ払って見せるわ、しゃらくさい！」

「これ、エティエンヌ…」

「はっはっは…、頼もしい娘をお持ちだなロワール卿。親離れ出来ぬわけだ」

「いや、お恥ずかしい限りで…」

「また私を愚弄するか、この腕無し魔導師！」

「ほう…。薙ってみるか、我が魔導…」

「お、おお止め下さい、お二人とも！！」

「どうかお許し下され、シレーネ殿。まだまだ身の程を弁えられず…。エティエンヌ！相手の力量を見縊るとどうなるか、未だ解らぬか！」

「うるさいわ！わかってるさ！それくらい。…どうせ、私にはこいつの魔導を・・・うう、くそっ！ちくしょう！」

「良い良い、騎士ならばそれくらいの血気、素晴らしい娘だ。若い頃の私のようなぞ」

「う……………、一緒にするな！」

「はっはっはっは、どうすれば怒るのか手に取るように判る。本当に若い時の私はお主のようだったよ、エティエンヌ卿。強く成られよ。御立派に…」

「うう…、いい、言われなくても成ってやるさ！」

ブライアンにもこれほどの意固地があれば、ナーダも滅びの憂き目を見ずに済んだのかも知れんな…

大戦が終結して三〇年ほど経った頃だろうか。アマーピアスが伯爵邸に突如姿を見せた。彼の方から姿を見せるとは思わなかった。寧ろ姿を見せないかも知れないと思っていたからだ。

「話している暇は無くなった。行くぞシレーネ」

「良いのか、私を乗せて…」

「話しは空でも出来るだろう」

アマーピアスの言葉から私は事態の緊急さを悟った。

遂に元老院の化けの皮が剥がれたか…。

大戦終結後、元老院は軍縮政策を大々的に謳わなくなった。寧ろ、軍事力を強化し、貴族たちは競うように兵力を所有し合うようになった。前国王時代、国内の兵力は全戦力をかき集めても一万程度しかなく、アシュリアンが出陣した大隊でもたった一五〇程度であった。それが今や三万は下るまい。元老院議員の連中はそれぞれに三千から一万程の戦力を持っていた。元老院が師

団を所有するなど最早ただ事では無い。しかも王がそれを黙認している意図も解らない。

元老院がこれだけの戦力を揃える理由はただ一つしか無い。騎士侯爵ナーダ家、騎士伯爵コルド家を殲滅する狙いが在るのだろう。この数年間、元老院議会には多くの若い騎士が出席するようになった。グリフィス、ブラッドレイ、ブレア、ブリーズ…。アシュリアン亡き後に育てられた者、他国から戦場を求めて身を寄せてきた者も居る。私の所にも何人か売り込みにきた者がいたが、全てナーダに送り込んだ。コルドが我が宗家諸共潰れるのであれば、それも良いだろうと考えていたからだ。ただ、アシュリアンとの誓いもある。私はナーダ家を守らねばならない。

ナーダ宗家はアシュリアンの従兄弟であるブライアンが継いだ。約定通り私は後見人として彼を見守っている。エステルは元老院議員になり、感化されて兵を雇い入れるようになった。しかし今のナーダに騎士団を持つほどの力は無い。ナーダ家の将軍になったメイナード・ブリーズはエクサリオの残党だという。祖国の復興も為ず戦場を求めるような輩に期待など出来るものか。エステルの愚かが災いしなければ良いと思っていたが、前国王時代から予め企てられていた事なのであろう。準備するにしても手際が良過ぎる。

議会では度々ナーダに難癖がつけられ、濡れ衣のスクャンダルも多かった。エステルもまだ夫を持たぬ身。あの泣きっ面にも少々見飽きてきた頃だった。あれで侯爵とは情けない。付け入る隙を与え放題だ。我慢も出来なかったのであろうな。

エステルが城に男共を集めて夜な夜な遊んでいるという噂が国中に流布され、ナーダは有り余る権力を行使して民から搾取した税金で毎日遊び呆けていると、まあ吟遊詩人共が唄い踊る巷である。

エステルが事もあろうに議長であるブライス公を煽ったのだ。

「私利私欲を貪るのは貴様だろう！下品で低俗な腐肉の分際が、いつまでもでかい顔が出来ると思うなよブライス公！」

「ほほう、それは宣戦布告と見て良いのですかな？侯爵如きが分際を弁えられぬようだ。無駄に広い領土も手に余る事だろう…。逆賊ナーダには制裁が必要なようだぞ、皆の衆！」

待ちに待っていたのだろうな、この時を。元老院がナーダに対して一斉蜂起した。罪状はブライアン・ナーダ、およびエステル・ナーダの謀反。ブライアンの後見人である私も結託して謀反を企てたとされた。

議官長、ブライス公爵の手勢はイアン・ケリーを筆頭に凡そ九千。ナーダの手勢はメイナード・ブリーズを筆頭にたったの八百だった。

準備は万全に整えられていたのであろう。その行動の速さは異常だった。その場で捕らえられたエステルは明日にも公開処刑を執り行うと公示され、王都の炎の間と呼ばれる広場で生きたまま焼き殺される事が分った。

一方、ナーダ領では予め出撃準備が整えられていたかのようにケアード侯が抱えるグリフィス王国騎士団参謀長を指揮官とした師団六千がナーダ領グリーンヒルに突如現れて陣を布いた。その後、シトリン伯のブラッドレイ将軍が連隊二千を北方に、ガードナー伯のブレア将軍が連隊三千を南方に展開させ、東端にある公爵邸、コランダム城を完全に包囲していた。

対するはブリーズ将軍率いる大隊八百。この軍勢を防ぎ切れる数では無い。

「戦はもう始まっているのか!？」

「予め練りに練られた作戦だったのだろう。見事なまでの迅速な展開だった。寝耳に水のブライアンやブリーズは隊を組んで応戦はしているが、果たしてそれもいつまで持つか…。間に合わないかも知れないが、それでもお前は行くと言うのだろうか?最期まで付き合おう、シレーネ」
—使わせてもらうぞ、アホ貴族め…

私は首から肩を覆う程の大きな装身具を握り締めた。

魔導器マジスティック・ブルー。

埋め込まれた大きな青の燐石が私にその名を教えてくれた。

恐ろしいかな、この魔導器は私の力を増幅させるだけでなく、私の身体能力、主に額眼に拠る能力をかなり高めている。装備しているか否かではその差も歴然…。強過ぎるが故に使う事が無ければ良いとさえ思うほどだ。…手加減が出来ん。

ナーダ領に付いた頃、そこは既に戦場と化していた。ブリーズ将軍は籠城戦を構えてはいるが、最早それも風前の灯…。一方的な戦場である事は言うまでも無い。

「良い判断だ。この戦力差では立て籠もるしかあるまいな。礼を言うぞ、メイナード・ブリーズ」

これで自軍の損害を最小限度に抑えられる…。

大笑いする馬鹿どもの笑い声の下から聞こえる。大群の後方、師団長を務めているギルバート・グリフィスか。これだけ数で圧倒していれば誰が師団長でも同じだろうな。共にアホ面で談笑しているのはブレアか。

上空で戦況を確認していた私を見つけ、近くの竜騎士が一人で上空へやって来た。

—エミリア…

シトリン伯爵に飼いならされたエミリア・ブラッドレイだった。かつて私の部下として小隊を任せていた騎士だ。一人で来るとは、私も随分なめられたものだな。

「これはこれはコルド伯爵。生きて居ら…」

話す事など何も無い。もう何も…

胸から上を吹き飛ばされたエミリアが竜からこぼれ落ちた。その先にもう一人、かつて私の参謀を務めた男がいる。

「ギルバートオォオ!!」

そのまま急降下し、高圧縮の気圧でグリフィスを圧殺し、傍にいたブレアを吹き飛ばした。降り掛かる弓や魔導、聖導は悉くアマーピアスの結界に弾かれ、私はただ攻撃に専念した。数百、数千、万の兵が私に向かって来ようとも、私はその全てを吹き飛ばしてみせる!

肩腕から繰り出される大魔導輪は天に在っては風を起こし、地に在っては足場を水辺へと換えた。大嵐の大魔導術に吞まれ、兵の数など多かれ少なかれ問題では無かった。先の戦いで敵方が導師を将にしていたのは一対多数の戦況を強いられる事が前提だったからだと聞いた。本来は導師など戦場では後方支援に徹すると言うのが定石である。戦の常識を破った戦い方は学ばせてもらうに限る。

河の水を全て利用して、上空からその全てを叩きつけた。如何な騎士と言えどこの水量、この

水圧ではそうそう凌げまい。幾ら数を用意しても無駄な事だ。

「おのれ、シレーネ・コルドォォ！！」

「河に近い布陣が災いしたなシーザー・ブレア。オブライエンの部下だったお前が私の得意を知らぬわけでも在るまい...」

あの水壁を抜けてくるとは、流石將軍だと褒めてやろう。地を這う水を氷に変えて針にする事など造作も無い事。主翼や背翼を使わなければ上空まで来る事も出来ない騎士など私の敵では無いわ。

将も逝ぬれば烏合の衆よ。哀れなものだ。

氷を粉碎して風で搔いてしまえば万の兵も形なしだ。...これが、先の戦で多くの国が数多の兵を失った戦術か。

城を攻めていた数千の兵は、後方の無様を見て指揮が乱れ始めていた。あとは一風吹かせれば終わりか...。加減出来ればいいが、...城壁まで吹き飛ばすなよ！

「風戈招来！我が魔導に集え。我が意に宿れ。猛き叫びを！」

ふむ、...やはり崩れてしまったか。

城の周りで攻めていた兵を風の圧力で壁に押し付けて一掃する積もりだったが、城壁まで少々吹き飛んでしまった。この魔導器で本気を出したらどうなるのか、想像を絶するな...

「コルド様ー！コルド様ー、よくぞ駆けつけて下さいました！」

「コルド様、ご助力感謝いたします！」

遙か遠方にあるコランダム城から、勝利を確信した兵たちの喝采が聞こえる。粗方片が付いて城に迎えられ、公爵邸に入城すると、先ほどまで騒いでいた兵たちの喝采は聞こえなくなっていた。城内は打って変わって静かなものだった。

「随分静まり返っているな。何かあったのか」

「いや、先ほどまでは皆騒いでいたと思うのですが、急に静まり返って...」

門を守っていた兵と共に城内へ進むと、奥の方から何やら話し声のような、叫び声のような声が聞こえた。私は立ち止まり、兵を下げ払って構えた。

一何が起きている...、一体何が...

突然上の階の窓が破れ、聖導師が一人身を乗り出した。

「こ、コルド様？おお、コルド様ー！、どうか、...ぐうっ...ふう、ああ！！」

上の窓から身を乗り出して私を呼ぶ聖導師が突然悶え苦しんで死んだ。その窓から顔を出したのはブライアンだった。

「ブライアン、無事か！よかつ.....、お前！」

「シレーネ...」

ブライアンの手には黒緑の燐剣があった。それはナーダに伝わる魔剣...

「ブライアン！なぜその剣を！...そこで何をしている！！」

青く、色鮮やかな背翼を大きく羽搏かせてゆっくりとブライアンが上から降りてきた。服は血に塗れ、幾人もの兵をその手にかけてきた事が分る。

「ジュードか！ジュードがお前にそんな物を...」

「そうだ。ジュードがくれた。ナーダ家伝統の怒りを。そして悲劇をおお！！」

ブライアンがレイジで私に襲いかかってきた。私は魔導で氷の槍を拵えて応戦する。

「止めぬか、馬鹿者めが！」

「なぜだ！なぜ僕たちがこんな目に合わなきゃいけないんだ！全部叔父さんのせいじゃないか！叔父さんが死んだから僕たちがこんな目にい、・・・エスターがあ！！」

殴りかかるように剣を振り回して泣きじゃくるブライアンに私は何も出来なかった。ただその剣を槍で受け止める事しか出来なかった。やがて力尽きて膝が折れ、座り込んだ。

「僕たちが何をしたっていうんだ！エスターが何をしたっていうんだ！何もしてないよ！エスターはいつもこの国を良くしようって、ナーダ領の領民だけでも幸せに出来るようになって！！二人と一緒に頑張ってる勉強して、・・・叔父さんに負けなくらいの侯爵になるってえ！！なのに何でそんなエスターが殺されなきゃいけないんだ！・・・シレーネ！答えてよ！シレーネ！」

「エスターはこれから助けに行く。未だ間に合うだろう...」

「どうやって！相手はケリーだよ。そんな体でどうやってイアン・ケリーが守る王都に入るんだよ！エスターと一緒に死ぬだけじゃないか！」

「・・・倒して見せるから...」

「気休めはよしてくれ！もう沢山だ！この戦で死んだのは騎士ばかりじゃないんだぞ！多くの領民が突然現れたあいつらに殺されたんだ！」

「な、何だと！？」

「民は何も知らないで突然殺されて、首を切られて、・・・この城にどれだけ多くの首の雨が降ってきたと思ってるんだ！みんな昨日まで生きていたんだぞ！昨日、一緒に家を建てて、完成したって喜んでいたんだ！ラナも...、ジョンも...・・・皆を返してくれ！僕の、僕たちの領民を返してくれよおおお・・・！！」

「・・・、本当なのかブリーズ」

ブリーズが私の後ろにいた。血相を変えて走って来ていた。

「仰る通りです。...遅れて申し訳ありません、メイナード・ブリーズ只今戻りました」

「今まで何をしていた、ブリーズ」

「メイナードには準備をしてもらっていたんだ。...出来たかい？メイナード」

「・・・ははっ」

「ブリーズ...、何の準備だ・・・」

「・・・」

「ブリーズ！」

「もう良いんだよ、シレーネ。もう良いんだ」

「ブライアン？・・・ブリーズ、何の話だ！」

「この城に、焦炎陣を...」

「さあ、メイナード。後は君に任せるよ。君の最期の任務だ。そしてお別れだ。よく尽くしてくれた。感謝するよ、遠方の大魔導法師メイナード・ブリーズ」

「おい、やめろ...」

「・・・」

「さあ、やるんだメイナード」

「・・・お許し下さい！ブライアン様！！...私には、私には出来ません！エスター様と過ごしたこの城を、エスター様の愛したこの地を、・・・私には出来ませぬ！どうか、エスター様救出の命を！私が必ずこの命に代えてもエスター様を連れ戻し...・・・」

「...！？」

懇願するブリーズに気を取られていた。...私の失態だった。ブリーズが私の後ろにいるブライアンを見上げたとき、凍りついた。

私の後ろでブライアンはレイジを自らの首に刺していた。

「ブライアン！！」

「ブライアン様！！」

即死だった...。ブリーズと共に抱きかかえた時はもう、既に息絶えた後だった。

城には数多の死骸が転がっていた。事もあろうにナーダの魔剣を持ちだすとは...。恐らくブライアンに魔剣を渡したのであろうジュードもまた、その剣の餌食になっていた。

「馬鹿めが...」

城に残っていたのはブリーズと共に焦炎陣の構築を手伝っていた魔導法師と、難を逃れた救護班の聖導法師数名だけだった。全員揃っても小隊すら組めん。

「共に参ります。いや、駄目だと言われても、残った全ての兵と共に、私も後方から支援します！」

ブライアンの死後、弔いを手短に済ませてエスターを救う為、王都に向かうつもりだった。ブリーズはブライアンの仇を討ちたいと盛るが、この城を空にするわけにはいかない。しかしブリーズはそれでも聞かなかった。

「これほどの無念を、私はもう味わいたくは無かった...。騎士は領民を守る為の盾。領民の剣でございます。私は主亡きエクサリオを離れ、一人放浪と世を渡り、そして此処へ辿り着いた。そしてまた主を失う...。・・・もう御免だ！今度こそ、世捨て人の放浪者であった私を再び騎士として迎えて下さったエスター様に、今度こそは報いたいです！私にはファラ様や貴方のような強力な魔導は在りません。しかし、・・・しかし！！もう逃げたくないのです！死ぬように生きるのなら、今度こそ主と共に在りたいのです！どうか、私もお連れ下さい、コルド様！」

壊滅した中部諸国は紅鳳の新皇帝、紅零火の下、メガリア、オウス、タイハーン、テラーの前元首の血筋が生き残っていたが、明華は滅亡し、エクサリオは紅鳳ではなくエーレンが実効支配権を獲り、皇帝とその一族、貴族は滅亡したと聞いている。紅鳳に同じく女系国家に近かったエクサリオはメガリアやテラーに比べても被害は大きかった。

国や主を失い、放浪の末に辿り着いたブリーズがナーダに仕官する前、この男はノーザングレーに居た。ノーザングレーでも港の守衛に騎士を少なからず募集していたが、守衛任務に就くのに強過ぎる騎士は必要無かった。ブリーズは炎と風の法師で、その腕も私と同等程度。港の守衛に

腐らせる人材ではないと思い、私がナーダに紹介状を書いた男だった。ノーザングレーに居た時は死んだような目をした世捨て人だった。まさかあの浮浪者がここまでの騎士になるなど、あの時は考えもしなかった事だ。

「足手纏いだ。ここに残って私が戻るまでの間この城を守れ」

「もし、戻られなかった場合は……。私がこの城にいて何の意味が有りましょう」

「ここはエスターの城だぞ！エスターの帰るべき侯爵邸だ！」

「そのエスター様も、貴女様も、戻られなかったら私は一体何なのでしょう！私はこの城の侵略者ではないですぞ！...共に、行かせて下さい」

刻一刻とエスターの処刑が近付いている。いつまでも口論している暇は無い。

連れて行くと言っても、私はアマーピアスで空から王都を奇襲するつもりだった。歩兵の足では鳥の速さには付いて来れまい...

私は先に一人で行くと告げ、ブリーズは捨て置いた。...もう時の猶予が無い。

「ケリー殿から伝言を頼まれたよ...」

「見つかったのか！」

「ケリー殿だけだったが。他の者には見破られなかった。流石は元帥と言った所か。見逃されたから今こうして生きているのだが...」

「伝言は何と」

「王に光は届かぬ。シルヴィア様のお側に。たったこれだけだ」

「どういう意味だ...」

「解らぬ」

アマーピアスで王都へ向かっている。

私がコランダムに入城した時、アマーピアスには王都を探ってもらっていた。擬態で姿を隠す事が出来るアマーピアスには度々こうして隠密行動を執ってくれる。もちろん自主的な行為だが、世話になりっ放しだ。報いようにも我が不肖、なかなか報えぬ未熟が恨めしい限りだ。

アマーピアスによるとエスターは未だ処刑台に掛けられてはいるが生きているらしい。しかし王都ではケリー率いるブライス公爵軍の師団九千が各所に点在し、王都付近に凡そ三千、南の正門に凡そ八百、東の門に凡そ五百、西の門に凡そ三百、炎の間に千二百が陣を布く。残りはすべて城内にいるとみられ、その数三千二百程度だと推測される。

城内の人数が多過ぎる。遊撃戦闘に潜む敵は居ないと思われ、都の民も不自然に増えている様子は無いとすれば、公爵はよほど城に入れたくないようだ。

「元老院議官の館はどうか」

「そこに時間がかかった。余りにも人がいなさ過ぎて」

「なに？」

「せめて執務官や小姓などが居てもおかしくは無いのだが、どの屋敷にも殆ど人の気配がしない。いるのは使用人が数人程度だった。伯爵らはレイに居るとの話をちらっと聞くに及んだが、

クラーク候、ブライス公は城に居られるようだ。処刑を見に来る気配も無さそうな所を伺うと・・・、お主がケリー殿の軍勢に片づけられると見ているのだろうが...

「だったら残りの三千余名はどこにいる」

「それが不可解だった。直接ケリー殿にも尋ねたが、...まあ、口は割らなかったよ」

「お前も良い度胸だな...」

「でなくてはお前の相方は勤まらぬぞ、シレーネ」

「ふん、感謝してもしきれん...」

「ケリー殿も覚悟はしている。準備は良いか」

「望む所よ！」

王国筆頭騎士、イアン・ケリー。つい二〇年程前に剣聖将となった。実力では竜騎天眼士のオブライエンの方が強く、前国王時代は彼が筆頭を務めていた。オブライエンはノーザングレーより南西にあるフィンラン公爵領の出身で、フィンラン公爵とは前国王妃ミリア様に他ならない。ミリア様もオブライエンも元は平民で、フィンランはミリア様が王妃となられた暁に、ただの集落だった地が公爵領として発展した経緯が在る。その為ミリア様以下、フィンラン出身のオブライエンは貴族たちから軽んじられていた。一方、同じ平民でも経済都市・レイ出身であるケリーは優遇される事が多かった。そんなケリーも今や捨て駒とされる日が来たか...

元々ナーダの分家として勲功貴族の私は元老院の貴族共の言いなりにはならん。平民出身の二人は貴族社会を知らず、ただ名誉ある将として出世し、ただ貴族には従うのが道理だと思っている。特にケリーの忠実振りは有名で、どんな命令にも即時従い結果を残してきた。寡黙な男だが決して悪い奴じゃない。ただ酷なまでに真面目過ぎるのだ奴は...

「どうするシレーネ。このままケリー殿に突撃するなら...」

「いや、先に正門と、東門を攻める。ケリーの相手は私一人で充分だ」

「正門か。破壊するか？」

「いや...。ここは兵を潰しておこう。海へ行ってくれ」

海に面した王都フェネル。正門は港になっていて、そこは通称関税局があるだけで民はいない。

関税局とは表向き...。ふふ、伊達に元帥はしていないよ。海水を巻き上げて潰させてもらう。

「何をやる気だ？」

私がアマーピラスから降りて海上に現した魔導輪へ移ったからだ。

「もう少し上空へ行ってくれ。直ぐにお前に戻る」

アマーピラスが上空へ退避したのを確認して、私は肩腕を召喚して風の大魔導術を海面の魔導輪に向かって放つ。

「美しいね、海の精霊は。私に多大なる力を貸しておくれ...。我が魔導を糧に！」

魔導輪に集う風の精霊がそこに上昇気流を作り上げ、勢いを増す気流に呑まれそうになったアマーピラスが上空で慌てて遠ざかる。気流に乗って中空に浮かび上がるシレーネが輪術詠唱を唱えた。

「集いし精霊に請う。我が魔導は大なる風、我が魔導は刹那の閃き、天の波動は地を打たん。

いざ...、解き放てえー！」

詠唱によって魔導輪から解き放たれた風の力はその真下、海に向かって放たれた。海は大きく揺らぎ、上昇気流をかき消すほどの音波が反動する。シレーネはその勢いで上空へ吹き飛ばされ、アマーピアスが高速でシレーネを拾いに行く。

「無茶をする！せめて教えてくれ、私まで吹き飛ばされる所だったぞ」

「すまない、アマーピアス。このまま東門へ行ってくれ」

「正門はもう良いのか」

「...海が壊してくれるさ」

「・・・恐ろしい事を考えるな、お前は...」

「もう少し...、もう少しだけ、我慢して付き合っておくれアマーピアス...」

慈愛の鳥・アマーピアス。紅族・猛禽類はあまり攻撃的な種族では無い。特にアマーピアスは本来ここまで一方的で無差別な戦を好まない。敵にも情けをかけ、なるべく殺さない戦を好む。私も無駄な殺生などは本来好きでは無かった。

アマーピアスが飛ぶ速度と同等か、それより少し遅れて巨大な波が地上へと向かっている。これが全てを呑み込むのだ。水の力を思い知るが良い。アマーピアスと共に戦うのもこれで最期だと確信した。...痛いほどに、アマーピアスの心が泣いているのが伝わった。

「降ろせアマーピアス。...お別れだ」

アマーピアスは何も言わず私を降ろした。

「すまなかったな、これまで本当によく私を助けてくれた...。感謝する！」

アマーピアスが何か言いたげだったが、私はそのまま背を向けて東門へ向かった。東門に陣を布く兵たちが目の前にいる中、後翼を使って跳躍し、空中へ氷の魔導輪を放った。見慣れないものを見て警戒する兵を他所に私はそのまま東門を風の魔導術で吹き飛ばし破壊した。

海からの津波は正門を越え、王都へ流れて来ていた。王都では土煙が巻き上がり、阿鼻叫喚の巷と化している。東を守る兵たちも混乱し、王都へ様子を見に行く者、北へ逃げる者、様々だが、私に向かってくる者は居なかった。公爵の軍と言えどもこの程度か...

「コルド様！あれは一体・・・。何事ですか」

「ブリーズか。そろそろ来る頃だと思っていた。行くぞ！エスターを救い出そう」

王都は既に水に吞まれ、建物の残骸や民の死骸が流れている。そこは最早街では無く、濁流が渦巻く地獄だった。

「こ、これは...、一体。何故こんな事に...」

「ブリーズ、高所へ避難しろ。炎でも纏っておくと良い。...飛べ！」

ブリーズが避難したのを確認し、空に浮かぶ魔導輪を呼び寄せる。

「我が魔導は停止、我が魔導は固結、汝ら精霊に請わん。大地に死滅の沈黙を齎せ...」

氷の魔導輪からの輪術詠唱を光の魔導術で強化する凍結合成魔導術...。この戦の為だけに鍛練し修得してきたものだった。生きた人族であろうとも凍結して死に至らしめる、最高クラスの魔導術だ。

王都を流れる濁流がどんどん凍って行く。シレーネは休む間も無く炎の間へ向かう。処刑台に

掛けられたエステルは公開処刑の為に高台となっていた事が幸いして無事だったが、氷の魔導でそのまま死なれては困る。後翼で疾走し、エステルを縛りつける柱を烈風で切り倒してエステルを無事救出した。拷問を受けたのか、エステルは所々に外傷を負って憔悴し切っていた。

シレーネに遅れて赤い炎に身を包んだブリーズがエステルの下に駆けつける。

「エステル様、エステル様、よくぞご無事で...」

「メイナード?...ああ、メイナード!...メイナード!」

「エステル様...。申し訳ありません、ブライアン様をお守りする事が出来ませんでした...。コルド様の助けがありながら、こうして貴方を救いに駆けつけるのが精一杯でした。申し訳御座いません!」

「そう...、ブライアンが...」

「ブライアン様は魔剣で自ら命を絶たれた。私が傍にしながら、...申し訳ありません、エステル様」

「コルド...。お前が来てくれて良かった。ごめんね、私の所為でお前まで...」

「お気になさいますな。ブリーズ、エステル様を連れて行け、ここは危険だ。まだケリーの生死は確認していない。急げ!」

「その必要は無い!」

「おう!、ぐう...」

「ブリーズ!!エステル!!」

「まさかこんな手を使われるとは思いませんでした。魔導の力、極められたのかコルド伯!」

ブリーズを逃がそうと画した直後だった。背後から現れたのは最も警戒すべき元帥、イアン・ケリーだった。ケリーの投げ付けた剣がエステルを抱えるブリーズの背を貫き、エステル諸共串刺した。

「ブリーズ、エステル!」

「ああ...、がはっ!...エステル様、...」

エステルは胸の中心を貫かれて即死だった。ブリーズもそのまま倒れ、辛うじて生きているが、その息はもう浅かった。

「貴様!」

その後の事は正直あまり覚えていない。ただ無防備なケリーを跳ね飛ばし、私の目で捕らえられなくなるまで吹き飛ばしていたと思う。最早この国ごと滅してやろうとも考えていただろう。そのまま後は城内に入り玉座を目指した。私に近付く者、刃向かう者は容赦せず吹き飛ばした。戦意の無い雑兵如きには魔導輪すら要らない。

途中、謁見の間において妙に嗅ぎ慣れた香の匂いが漂ってきた。それが我が妹、ケイトがよく好んでいたものだと思い出すのにそうそう時間はかからなかった。現国王妃であるケイトが居るならば、そこには...

「お、お姉...、シレーネ・コルド!...ケリーは、ケリーは何処だ!何をしておる!」

「遂にここまで来おったか、コルド伯...」

謁見の間の脇にある小部屋にいたのは、ケイトとブライス公だった。

「王を隠したか...

「ケヴィンは何処だ、ケイト」

ケイトのお腹が大きかった。王妃が懐妊したなどと言う話しは聞いていなかったが...。子を孕んでいるのなら手荒には出来まい。

「王を呼び捨てとは、さすが身の程知らずだ、コルド伯」

「貴様に用は無い」

平民風情が運良く躲し切れたものよ。私の飛ばした氷塊の弾を回避し、公の肩に当たった氷塊はちぎれた右腕と共に奥の壁に飛んでいった。

「きゃあああああ！！」

「うあああああ！！腕が、腕があ！」

「ケイト、ケヴィンはどうした。...ブライス！王を何処に匿っている！」

「ふふふ、あはははは・・・」

「ブライス様、...誰か！聖導師を呼べ！公が、公がお怪我を！！...誰か！」

どうも様子がおかしい...

「哀れ、田舎貴族は何も知らぬとは」

「なにい！？」

「王など疾うに死んだわ！馬鹿めが。はっはっはっは、この国の王は元老議官長である私だよ！」

「腕を失って気でも狂ったかデブ...。王が生きている事は知っておるわ！」

「ぬう...、愚か者めが・・・」

「では何処にいるというの、シレーネ。ケヴィンと言う名の馬鹿な男など、戴冠式のあったその日からこの世にはもういないわ！あっはは...、馬鹿じゃないの」

「どういう意味だ！ではそのお腹の子は...まさか、貴様ら・・・」

「そのお腹の子は次期国王となるサファイア様だよ、コルド伯。サファイアの血統も無い狸にいつまでも国王面されてたまるか！」

「この国はねえ、私の血を継いで純正なるサファイア王が誕生するのよ！私はその母となる！ブライス様と私の子が王に！おーっほっほおおお・・・お、あ・・・」

「んな！？・・・うがあ！！」

「王はどこにいる...。」

腹の子がこの肉塊との間に出来たものなら生かしておく必要も無い。腹の子諸共ケイトの腹に風穴を開けた。いよいよ私も大罪人だな...。国民のみならず王妃まで殺した。

左腕を氷の針で壁に突き刺してブライスを尋問するが、結局このデブは戴冠式の後、王に毒を盛って殺した事しか白状せず、ケリーが「生きている」と言っていた事を告げると驚いた様子を見せた。

「馬鹿な！奴は確かにケリーが・・・、ううおおのれ、イアン・ケリー！謀ったか！」

「...そうか。平民に謀られたか腐肉。もうお前にも用は無くなったな...」

「んま、待て！待てく...」

待つ必要など微塵も無いわ。

私は静まり返る王城を後にして、残る元老院議員達を探したが、生き残っている者達にその行方を知る者はいなかった。

「ナーダ候の処刑が決まった時から、クラーク様はレイへ行かれると…。ただ、レイに居られるオブライエン様はコルド様、貴方の屋敷へと向かわれたのでは？」

やっとの事で執務官長から聞きだした情報を頼りに城を出ると、そこにアマーピアスが降りてきた。

「イアン・ケリー…」

アマーピアスの背には血まみれのケリーが横たわっている。

「生きているのか、アマーピアス…」

「生きている。お前の魔導をくぐり抜けて助けられたのだ」

私が怒りの余り容赦なく放っていたあの魔導をくぐり抜けて助け出すなど…、そんな奴が居るとは到底思えないが…。

「誰が…」

「さあな。名乗らなかった。名のある自由騎士だろう」

「話したのか？」

「王家の霊廟へ行け、と。その一言だけだったが…。意味が解るかシレーネ」

「…！アマーピアス、…」

「行くぞ、シレーネ」

「すまぬ、背を借りるぞ」

長い一日も終わり、再び朝日が昇る頃、私たちは王家の霊廟前にいた。気を失っていたケリーが目覚めます。

「…うう、ここは…、私、は…、生きて…」

「起きたか、死に損ない」

「コルド…」

「無駄に喋るな。…言え！ケリー。王は何処だ！ケヴィンはどこにいる！まだ生きているんだろ！…死ぬならそれを言ってから死ね」

「シル…ヴィ、さまの…、下に」

「シルヴィア様の下？…棺の下か」

「隠し…、地下に。私、の…、部…下に、保護さ…せ…」

ケリーの言った通り、シルヴィア様の棺の後ろの床に隠し扉を見つけ、そこから地下へと降りられた。

「ケヴィン！ケヴィン！…生きていたら返事をしろ。ケヴィン！私だ、シレーネだ」

階段を下りると地下通路が長く続いており、その先は何か広い部屋のような空間が広がっているように見える。私の声を聞き、その奥から一人の男がおどおどと現れた。

「コ、コルド様！？・・・ああ・・・、あの、これは、その・・・」

「ケリーの部下か。王はどこにいる...。捕らえに来たのでは無い！居るのなら案内せよ！」

「うう...・・・、こ、こちらです」

殺されるのを恐れる者の目だ。死んでいる筈の王を匿っているとすれば、それも当然か。しかも主人では無く血まみれの元帥だけが降りてきたのだからな...。恐れられても仕方がない。

「おやぁ？今日はいつもと違う人が来たんだねえ。...これはこれは美しいご夫人だ。こんな所へようこそ」

「・・・・・・・・」

「ケヴィン？」

「おや、なんだい？それは僕の事かな？・・・僕の名前は・・・なんだっけ」

「君の名前は、そう、ケヴィンだよ。ケヴィンって言うんだ。僕は親友のマーティン。ほら、忘れたかい？いつもここで遊んでいるじゃないか」

「ああ、そうだったね、マーティン。覚えているさ。僕たちは親友だもんなあ」

「今日はね、村のお、おばさんが会いに来てくれたんだよ。ほら、シレーネおばさんだ」

「シレーネ・・・おば...さん」

「どうしたんだい？・・・また、また頭が痛むのかい？」

「ううう・・・、シレーネ・・・シ・・・シレーネー・・・ああがあああ！！」

突然苦しみだしたこの男の両腕、両足には鎖がつけられていた。

私の目の前にいるこの男は一体なんだろうか...。私は何も考えられなくて、呆然としていた。

「コルド様、少し下がってお待ち下さい。落ち着いたら外でお話しを...。ケリー様は？」

「あ、ああ。...わかった。け、ケリーもいる。外で...、待ってる・・・」

私は何も考えられず、ただ心を絶望に支配されてフラフラと地上へ戻った。

目の前にシルヴィア様が居る。

城でシルヴィア様と共に在りし日々が鮮明に甦る。あの愛らしかったシルヴィア様が...、今はただ硬い棺の中で安らかに眠って居られる。

ーシルヴィアさま.....

「シルヴィア...、私はこれからどうすれば良いのだ？お姉さまに教えてくれ、シルヴィア・・・うう...、シルヴィア・・・」

硬く閉ざされた棺を抱いて、私は泣いていた。ただもう、どうして良いのかも解らず、ただ、ただ、泣く事しか出来なかった。

「ケリー様ぁ！」

マーティンという男が地下から出てきて、私は共に霊廟をでた。

その入り口で横たわっていたケリーは既に死んでいた。少なくとも二発は喰らっている筈で、生きていた方が寧ろ不思議だったのかも知れない。

「私が殺した。恨むなら私を殺せ...」

「何故です！なぜケリー様を！王をお救いしたのはケリー様ですよ！そのケリー様が何故！・・・
・そういえば貴方も元老院でしたね。やはり王権が欲しくてこんな事を！」

「ちがう！それは誤解だ！...ケリーはナーダ候を殺した。私はナーダ、...エスターを救いに来た
だけだった。それをケリーが殺した。殺す必要は無かった筈だ！ケリーが、...初めからケリーが
王をお救いしていると知っていればこうまではしなかったさ。私は...、王が暗殺を企てられてい
た事すら知らなかったのだ！」

「・・・」

「愚かな私を笑え。北の果ての田舎には王都の現状など届きはしなかった。無知な私を笑うが
良い。最後まで元老院に謀られた私を！・・・私は、私は結局何も救えなかったのだ！・・・
何も...、誰も...、・・・何が元老院か。何が伯爵か。何が元帥か...。誰が為の元帥だと言うか、
私は！」

「もうよせ、シレーネ...」

「...、誰だ！？」

「へえ？」

少し離れた場所に人影を見た気がした。気配は無い...。しかし、確かに・・・

「どいているアマーピラス。そこに誰がいる！」

林の中から黒い外套に身を包んだ者が現れた。

「ケリーを救ったのはお前か...。そうだな、アマーピラス」

「間違いない...」

「何者だ、貴様・・・」

外套の者は敵意が無いと言うかのように両手を上げ、そのままのりくらしと歩いてこちらに
来た。見覚えのある歩き方だった...

「王はどうした。無事では無かったのか」

その声は聞き覚えのある声だった...

私の容赦の無い魔導をすり抜けてケリーを救出した...、相手が此奴なら納得も出来る・・・。

私を前に外套で身を隠し続けるなら明かさぬ方が良いか...

「王は無事だった。ただ、酷く毒にやられている。もうかつての王では無かった」

「これからどうするつもりだ」

「残りの元老院議官を肅正する。生け捕りにして全てを白日の下に晒し、国民に信を問うた上で
元老院制度の廃止を王に訴えるつもりで居た。・・・すべて泡沫に消えたが...」

「王国元老院・議官長代理、ハミルトン・クラーク公爵、以下アビゲイル・ケアード侯爵、アデ
ルバード・シトリン伯爵、ジェラルド・ガードナー伯爵の四名はレイで俺が肅正した。五十年以
上前からの罪状だ。ついでに、お前の城をうろついていたネズミも一匹始末しておいてやった。
件については後々謝礼でも戴きたい所存だ」

「大戦前からの罪状だと？一体何の...」

「魔族の捕獲とその人身売買における密輸への加担...。中部諸国の混乱、滅亡に加担した罪は王
国元老院、双に王国王家に在り！厳正なる戦後処理の一環だ。元老院・議官長のロニー・ブライ

ス公爵はお前がやったのか」

「こ、公爵様まで・・・」

「そうだ。肉親であるケイトと共に、私が討った」

「王妃様まで・・・。コルド卿、貴方は一体何を望まれて居られるのか！謀反にしてもやり過ぎだ！」

そう叫びながらマーティンは霊廟の入り口前に立った。

「こ、ここから先へはもう行かせませんぞ！あ、ああ、貴方は、王まで殺してこの国を乗っ取るつもりだろう！」

「何を馬鹿な...」

「ぎゃああ！」

「お、おい！やめろ！...貴様何をするつもりだ！」

外套の男は目にも捕らえ切れぬ速さでマーティンを退けると霊廟へ入って行った。あれだけ高速で払われたらひとたまりも無い。平民なら即死.....

「なに！」

吹き飛ばされた筈のマーティンの姿がない・・・

「何のつもりだ...」

「行かせん。死にたくなくば、今すぐここからで...」

「うわあ！？」

外套の男の肩に取り縋って短剣を突き付けていたマーティンが勢いよく私の方に吹っ飛ばされてきた。私はマーティンを庇うようにそのまま共に倒れた。

「そ、その姿...、まさか！何故ア...ぐあ、ああ！」

外套が乱れ、顔を見られた男は仕方なくマーティンを殺した。関わっている事が知れば事が面倒になる。・・・止む終えない事だった。できれば彼と共に行き王の現状を説明して欲しかった所であったが...。それも全てケリーを殺した私の科か。

「レイニャン、出てきてくれ！レイニャン！」

「なんだ、喧しい…。ほう、これはこれは賑やかな事だ…」

「白竜！？」

「美しいな…白竜は初めて見る」

「違うわ、竜の形をした精霊よ。精霊が人の形をしているとは限らない。あれは竜の形をしているだけ。竜じゃないわ」

「ほお、私を一目で精霊と理解したか。初めてだな…」

「あ、ああ、凄いな、お前」

「どうでも良いわ。匿っている子を出して。その子に会いたいの。その子に会いにここまで来たの」

「・・・ならぬ」

「お前の許可など求めてないわ。此処へ出して」

「お主が何者かは存ぜぬ。あれを此処に出すわけには往かぬ」

「じゃあ、私を案内して。その子に会わせて頂戴」

「何人たりとて我が領域に踏み入れる事能わず。我は暝帝。我は時の防人。我が力は時空。我が創り出でし其れは亜空間也…」

「左様か。然らば我も応えよう。…我は霊神（りょうじん）。我は精霊王。時の霊獣風情が我に命ずるなかれ。汝、我を見紛うなかれ！」

そう言いながらレヴェイエが外套を脱ぎ、仮面を取って叫んだ。白金の髪、白金の瞳、透き通るような白い肌が顔（あらわ）になった。



「…！？」

「なに！？」

「精霊族！？…の、王？・・・そんなのが居るのか」

「霊神って…、レーヴ？」

「おい、こいつは一体…」

「やはり、神族であられましたか…、レーヴ様」

「開闢為よ時空。…我が所望に応えよ！我は大地！我はフルクレスト！我が声は鳴動、我が力は脈動、我が願いは豊穰。汝ら渾に命ずる…。地上の理・天下の理。狭間吹き荒ぶ天つ風・狭間吹き荒ぶ旋風。闇の天理と光の地理の、顕在と潜在の狭間に介在。我は絶対なる均衡、我は絶対なる安定と絶対なる変遷。理の安定を解いて遷し出せ、理の均衡を解いて現せ。回天・天翔る…」

周りの反応を他所にレヴェイエが刹那の間に巨大な聖導陣のような法陣を幾重にも作り上げる。聞いた事も無い詠唱と見た事も無い速さでの構築にその場の誰もが微動だに出来ず見入っていた。其れは正しく神の成せる業と言わんばかりの…

「ご無礼をお許し下さいませ地の精霊王よ。……どうか、こちらへ」

レイニャンはレヴェイエが作り上げた複数の法陣を収束させて、即座に目の前の空間を裂いた

。

レヴェイエは何も言わずその裂け目の中にそのまま歩いて入って行く。

「レーヴ！」

「来てはダメよ！...ロラン。あたし1人で行くわ」

後ろからロランが叫びながら走り寄ってきたのを振り向かずに強く制止した。

「でも、...ヴェリテは...、ヴェリテが...」

グランの腰に帯びた白い剣が鳴動する。レヴェイエはゆっくり振り向いて優しい笑顔をロランに向けた。

「大丈夫よ、心配しないで。時の領域に入るから、少し危険なのは判っている。けどここから先は私とその竜しか入れないの。だから、...ごめんね、ロラン」

レヴェイエは奥へ進みかけたが、思いとどまり振り返って戻ってきた。

「明日の正午にもう一度此処で会いましょう。...アイン様、私が戻るまでに、法師を出来るだけ多く集めて頂戴。魔導でも聖導でも良い。とにかく多くの法師たち、...そうね、出来れば力のある法師が良いわ。急いでね...」

「御意。明日正午、お待ちしております...」

時空の門が閉じる。

傷だらけの人魔が横たわり、蠢いている。

『イキル...シナヌ...ヤクソク...イキル...マダ...シナヌ...』

人魔の心の叫びが聞こえる。強い思念が弱り果てた人魔から伝わる。

「...」

『...！？ シナぬ！ワタシは死なぬ！！』

レヴェイエが静かに近寄ると、その気配を察知してか、強い思念がより強くなった。それは物凄い生への執着だった。

レヴェイエは人魔の記憶を見ていた。それはかつて生き別れた友の記憶...

「ヴィオレ...」

『ワタシハ...わ...』

人魔の記憶が深く、強く流れてくる。かつて暗黙に君主として仰いだ、レヴェイエの言葉.....
...【生きて。生きて必ずまた会おうの！だから死んではダメよ、許さないから！絶対に戻ってくるから！】.....人魔の思念に何度も何度も自分の別れ際の言葉が強く流れていた。

レヴェイエは横たわる人魔の傍で膝を突き、そっと抱いた。レヴェイエの涙が人魔の疲弊した心を癒していく...

「ヴィオレ・ヴァンフィーユ。麗しき堇色の、風乙女...。愛おしき私の、ヴィオレ...」

『.....』

レヴェイエの語りかけは伝心となって伝わる。人魔の精神状態が安定してゆく。地の精霊、寵愛の神レヴェイエの力が人魔と成り果てたヴィオレを癒してゆく。

「私…。私が誰か、判る？ヴィオレ」

「・・・エエ...ウ　・・・エーブ...」

喉がただれ、耳を失った人魔は巧く喋れない。

『レーヴ...さ・・・ま・・・』

ヴィオレは伝心でその名を呼んだ。かつて暗黙に君主と仰いだ、心の主...

その声を聞いたレヴェイエはもう悲しみを堪える事が出来なかった。

「ああ！！ヴィオレ...、ヴィオレ...。ごめんね、ヴィオレ！！私が、私が「生きて」なんて言ったばかりに...。ごめんね、ヴィオレ...」

『レーヴさま...、本当？...本当に？』

「ええ、本当よ、私よ、ヴィオレ。ごめんね、私の所為でこんなに...」

『申し...訳、ありま・・・せん。わた、私、が、・・・私は・・・』

「大丈夫よ。貴方はよく頑張ったわ。そして...、よく生きて居てくれた！よく、生きて・・・」

『あ・・・ああ、レーヴ、様...。すみま...せん、私、もう...、私・・・』

「ううん、ヴィオレはちゃんと役に立ったわ！そのおかげで私とまたこうして会えた。大丈夫、貴方の見てきた記憶は、貴方の今までは、...私の中に・・・。大丈夫よ、ちゃんと貴方の記憶は私がしっかり受け取ったわ」

『...もう・・・、ワタシは、要らない？・・・』

「こんなに長い間、苦しんで、苦しんで、辛い思いをして...。貴方はもう少し笑顔で居るべきだわ、馬鹿な子...」

『こ、れが、...私、の...』

「違う！そんな事無い！言ったでしょう！？人は喜ぶ為、楽しむ為に生きているのよって。悲しんだり苦しんだりする為に産まれた子なんていないんだから！」

『わた...、幸せで...。さい、ごに、レーヴさま...・・・会えた』

「ダメよ！まだ許さない！死なせない！貴方を待っている人がいるの！・・・ちゃんと、その目でもう一度私を見て...。私が貴方に笑顔をあげる！約束したじゃない！貴方はずっと、こんな苦しい思いをしてまで私の約束を守ってくれた...。私の約束も果たさなきゃ！」

『レーヴ...さ、ま・・・』

「痛みはもう無いでしょ？ヴィオレ。応急措置だけど、怪我は治したわ。少し休みなさい...、ヴィオレ。私が疲れを取ってあげるから...」

『ありがとうございます...。貴方は...、やはり・・・ただの、精霊族では...、無いのですね...』

「そうね...、私たち可視精、特に私のような上位の精霊はそんなにいないはずなのよ...本来ならね」

『神族、なのですか？...レヴェイエ様は』

「どうかしら...。神族といっても、可視精と大して変わらないけど。私はただ、このフルクレス

トの大地を創っただけ…。私はフルクレスト。貴方のいたフルクレリアにもいるのよ、マージという国にラフレシールって言う子がね」

『マージ…。リュヌ様の、事ですか？マージ国を…、治めた、伝説の…』

「そう言われているそうね。彼女はもう人型を捨ててしまっているけれどもね。少し前に、会ってきたわ…」

『そういえば…、ヴェン…ティーン様、には、お逢い出来…ました、か？』

「うん、会えたよ。あの子はラフレシールのことが嫌いだったみたい。だから私も嫌われちゃったけど…」

『では…』

「安心して。手立ては見つけたの。ラフレシールが教えてくれた。フルクレリアに行った事は無駄じゃなかったわ。別の方法になっちゃったけど…。大丈夫よ、アルトワの大地は戻るわ」

『良かった…』

「貴方のご先祖様にも会ったわ。貴方によく似てた」

『先祖…。イニス様が…、お目覚めに！？』

「また寝ちゃったけどね。寝るのが好きな子ね、ヴェンティーンの子は」

『ヴェンティーン…の子？』

「ヴェンティーンが愛した子。イニスの持っている槍はヴェンティーンの力が宿っている。グランに持たせたヴェリテと同じようなものね。あの子はまだ使いこなせもしないけど…」

『…イニス様が、…羨ましい・・・』

「愛しているわ、私のヴィオレ…」

レヴェイエの傍らで、静かに眠りに就くヴィオレ。それを優しく、ただ愛おしく、髪を撫でながら静かに佇むレヴェイエ。子供を寝かす母親のように…

離れた場所で二人を静かに見守るレイニャンがいた。時の神の僕であるレイニャンには地の神であるレヴェイエの行動が解せないでいた。ヴィオレと呼ばれるこの人魔を今ここで助けた所で、もう何日も生きられる状態では無い。時を止めたこの空間に閉じこめているから保っているだけの命で有る事は、レヴェイエにも解っている事だろう。この空間から出れば、時は動き出す。止まったままだった時が戻れば、その肉体はもう生きてはいない。レヴェイエが何をやる為にここに入り、彼女を癒し、外で法師を集めたのか、レイニャンには全く見当がつかなかった。死んだ者を蘇生させる事は神であろうとも絶対の禁忌。それも時の神や闇の神では無く、地の神の力では不可能な事。地の神は創造と維持の神。愛の神である地の精霊王が死者を前に何をしようとしているのか、レイニャンには解らなかった。どうせ死んでいるも同然の身。今更少しばかり生き長らえさせたとして、どうなると言うのか。地の神の優しさは、時の従属者・レイニャンには全く理解出来ず、ただただ困惑するだけだった。

翌日、アインは十数名の法師を連れ、正午前に神殿へとやってきた。実力確かな者ばかり。大聖導師にはアインとロラン。大魔導師にはアリオナとパルス。魔導・聖導の力を持つ聖導

器を所有するソウルもそこに加わり、火天からは神の力を持つヤンと、騎士団の後方支援部隊から数名が、また原霞からは部隊長メイシアと、部下の法師が数名加わった。

「これだけ集まっても、恐らく使い物になるのは俺を合わせても5人くらいかあ？まあ、メイシアもよく来てくれた。助かる」



「恐れ入ります。少しでもお役に立てれば良いのですが、我々の国は操術師が多く、法術師は少ないですから...、私も外交の職務からフルクレリアで教わった者ですし、部下たちも資質を見出して私が育てたものですから、使い物にはならないかも知れませんが、精霊王様のご意向と聞けば、少しでもお役に立ちたくて...」

「まだ気に病んでいるのか？メイシア...」

「...忘れられますまい。二度とあのような事は・・・」

「言うな、メイシア。火天の民、神脚の民、皆の教訓だ。もっと東の大陸との国交を持たねばな...。これを機にそれも探ってみようでは無いか」

「その時は是非に。この原霞のメイシア、必ずや佳き働きをお約束申し上げます！」

「ん、期待するぜ、...っていても、今や俺もただの騎士だからな。今度ルーアンに会ったら話をつけて見るかな」



「アイン殿、一体これだけの法師集めて何をなさるのでしょうか」

「それは誰にも分らん。今は時が来るのを待とう」

「しかし、あの者は...、ウィリンド王の侍従と聞いております。一体何故ウィリンドの王は彼らを？」

「彼らは侍従と言う肩書きではあるが、実際は私もその素性を詳しくは知らん。彼女の伝心を私が偶然聞いてしまった為、私もある程度の事情は王から聞いているが、...見慣れない身なりの二人が城下をうろついていたそう。兵が尋問した所、抵抗された為、たまたま近くを通りかかった大公、王の側近が彼らを保護したと聞いている。結果侍従として国に匿っていたのは確かだが、まあ色々とな。国の事情もあって話す事は難しい所もあるのだよ」

「あの髪の色と言い、肌の色といい、ロランと言う騎士はこちら側の人族でありましょう...。この行軍も彼らの意向を汲んでこちらに渡ってきている。ウィリンドと何か因縁でも？」

「我が国が落ちた事は知っておろう。セイレーンに落されたのでは無い。この火天国も敵対する、南のニーセという国だ。無関係ではない。ロランと彼の精霊王、レーヴ様の二人は恐らくニーセ国の民だったのだろうな。そして、我が国を侵した者達は彼女が精霊王である事を、恐らくは知っていた。ロランは彼女を連れて亡命し、それを追ってきたのでは無いか、と私は見ておる」

「なるほど...。しかし、それにしては...」

「そう、時間がかかっている。ロランはもう50年以上前、あの大战役の前にはウィリンドに来ている。王とロランの間でどんな密約があったのかは、私も知り預かる所では無い。ただ、...」

「どうなされました？」

「...いや、.....。王は始めから国を没する積もりであったのかも知れぬ...」

「何を馬鹿な...、一国の王が自分の国を滅ぼす道を選びましょうか。考え過ぎでしょう。キース様が聞かれたら何と仰せになるか...」

「そうだな。考え過ぎなのだろうな。いや、すまない。そもそも関係の無いあなた方を巻き添えにしてしまって、本当に申し訳なく思う」

「それは何度も申しております。少なくとも私はどこへともお供します、と。彼の大战役で私は記憶の殆どを失いました。...もう、戻る事は無いでしょう。いや、戻ってもらわなくて良いとも思っている。凄惨な過去ならば、尚更。しかし、母や弟の身の上は見るに耐えられません。王侯貴族であったにも関わらず、亡命してきたのは確かだが、...余りにも非道な仕打ちよ。国に戻れば逆賊扱い。亡命した経緯は分らないが、亡命するにはそれなりの理由があつての事だ。我が父、我が母は民を見限って捨てるようなお人では無い。私とて...」

「記憶を失ったと聞くが、父や母の事は覚えているのだな」

「失ったのは大战時、何があって国が滅び、父が討たれ、母が亡命していたのか...。その記憶が私には無いのだ。母が知ってるのだろうが、辛かったのであろう、思い出させたくは無い...。私は大战終結後、メガリアのバール殿下によって救われた。私の契約していた幻獣・氷鳥が私を守ってくれていたから助かったそうだ」

「あの侵略は酷かった...。」

「明華の侵略であったと聞いております。紅鳳が操られて、二国で中部制圧を目論んだと...。あのカノン王国さえ参戦するきっかけになったと聞きましたが...紅鳳なら兎も角、明華にそれだけの勢力があったとは思えません...」

「毒だよ。夢想溺という麻薬さ...」

「はい...。バール様からそれは聞きました。メガリアの姫さまも皆、それで...」

「恐らく彼は君を妹のように思えたのだろうな...。彼は君を助ける時、本当に必死だった」

「あの場に居られたのですか？」

「いや、氷の柱に封印された君を発見したのも、助け出したのも殿下だ。私はその後で、その場に着いた。偶然トリリオンの調査に来ていたのは確かだが、私に助けを求められた。まさか、その後で殿下と敵味方に分かれて相対するとは思わなかったが...」

「相対?...なぜです？」

「君は先ほど、大战終結後と言ったが、実際は大战中だった。終結したのは明華による侵略紛争の方だよ。バール殿下、その姉であるアイリーン殿下はアニスに亡命していたんだ。聖導器でね。しかし、メガリア陥落の知らせを聞いた皇太子殿下は単身で乗り込んできたそうだよ。戻ってくるべきでは無かったと悔いている矢先に、君を発見したと言っていた。妹たちの無残な姿を見た後だ。君をどうしても助けたいと願う気持ちは痛いほど伝わった」

「そうか...。それで...。暫くしてヴァリアントで殿下と再開した時、物凄く喜んで下さった。それもまるで子供と再会した父親のように...。その時は凄く恥ずかしくて、人前でもありませんでしたし、突っぱねてしまったんですが...、後でお詫びをせねばなりませんね...。どうもあれ以来上

手く話せなくて...」

「彼も大人になった。アニスへの亡命で一時は敵対したが、無事戦役も終結し、この50年で世の中も変わり果てた。彼の身の上も色々だろう。話しかけてやると良い。彼も善い騎士になった。色々と教わる事もあるだろう」

「はい、ありがとうございます！何だか少し心が晴れました」

「お話し中、割って入って申し訳ないですが...、アイン様...」

「どうした、ロラン」

「時が来たようです...。ヴェリテが、私の剣が、レーヴからの交信を告げています」

人は歌う きっといつかは救われるのだと
人は笑う やがて全てが滅びるのだと
人は踊る それが全ての始まりだと

鐘が鳴り響く。

笑うように。囁くように。怒れるように...

七色の鐘が踊るそこは深紅のマスカレード。

悪意と悲劇を演じるそこは魍魎達の舞踏会。

人魔渾然の世。

人は精霊の恵みを忘れ、聖導の力を失いつつあった。

時は近代フルクレスト大陸。

大陸西の半分を領土とする帝国は天下無双を謳う軍事強国として世界に知れ渡る。

同時にフルクレリア大陸のほとんどを統一国家としたアニス帝国は広大なフルクレスト大陸にその侵略の手を伸ばしながらも☆とは友好関係にあった。

しかし、一つの国が広大な領土を治める事は難しく、

やがて各地に反政府組織が活動を始め、その反乱の火は日増しに大きくなるばかりであった。

帝国の反政府組織は各地で政府による鎮圧を受けながらも、その勢力は衰える事を知らなかった。

彼らには神がいた。

反政府組織には与していないが、度々彼らの窮地を救ってくれる者達が居た。反政府組織が神と崇める彼らの特徴は仮面で顔を覆い、現れる時はどこからともなく風のように鐘の音と共に現れる。有る時は黒いマントで槍を振るい、また有る時は黄色のマントで剣を振るう。目撃情報は様々で、四～五人はいるであろうと噂されるものの、その正体を知るものはいなかった。しかし、正体不明ながらも、政府に敵対しているのは確かで、反政府組織が活動していない場所においても彼らは現れ、突如として行政区を襲撃する。ただし、そんな彼らも首都にだけは現れた事がないため、一部では政府の自作自演ではないかという噂もあった。

政府は彼らを道化師と呼び、反政府組織は彼らを神将と呼ぶ。

「...だそうだ。物騒になったもんだ」

新聞を片手にカフェで朝食をする若い男が、連れの女性にそう言った。

「そう。・・・」

女性は静かにお茶を啜る。

「神か道化か・・・どっちかと言えば道化だろうな。秩序を乱しているのに神だとさ、どう思う？」

」

そう言いながら新聞をテーブルに置いてクロワッサンを頬張る。

二人は旅をしながら各地を放浪する芸人で、男はリュート、女は踊り子だった。

「くだらないわ。神だろうが道化だろうが、私は日々の生活で手いっぱいなの。そんなのどうでも良いわ」

女は立ち上がってそう言うと、溜め息を吐いて空を見上げた。

よく晴れた朝の陽射しを浴びるかのように。

「私は静かに暮らせればそれで良かった。貴方にとっては退屈でしょうけれど、私はただ、笑顔が好きだけ。私の踊りがみんなの笑顔になるのなら……。みんなが私に笑顔をくれるから、私はいつも踊ってられる。笑顔でいる事が何よりだと思わない？みんなの笑顔が私の幸せ。

……。こんな事言うと貴方はまた怒る？」

少し寂しげに男を見る。

そんな眼差しを受けて男は無表情に立ち上がると、二～三步前に歩いて振り向き、女の方を見て真顔で話し始めた。

「ああ、くだらん。今はどこもかしこも血なまぐさい。西へ言っても東へ言っても。

どの国も権力だの自由だの。自分にとって都合の良い事ばかり考えては争ってやがる。争いは怒りと悲しみしか生まない。何も嬉しくはならないし、楽しくもならない。終わってみれば疲れ果てた空しさだけがこの手の中に残る」

「だからこそ、笑顔が必要なんじゃない？私たちの旅は世界中を笑顔にするの。貴方にも...いつか、貴方の笑顔が見たいわ。貴方の本心からの笑顔」

そう言われて男は女に背を向けた。

「ふん、笑いたければお前一人で笑ってろ。だが、その笑顔で俺の気も少しは紛れるのは確かだ」

そう言われて女は嬉しそうに頷くと、男はまた女の方を振り返る。

「そろそろ行くぞ。今日もその笑顔とやらを頂くとしようじゃないか」

「うん」

二人はまた旅を続ける。

男の名は明時雨焔聖（あけのしぐれ・えんじょう）、女は明時雨響丸（あけのしぐれ・きょうまる）と名乗る。二人とも鮮やかな淡い草色の髪を靡かせる純血の人族だった。